箱崎 40

－箱崎遺跡第62次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集

2010
福岡市教育委員会

箱　崎　40

－箱崎遺跡第62次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集

遺跡略号　HKZ-62
調査番号　０８２５

２０１０
福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉、文化交流の窓口として発展してきました。このような歴史環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましてはその保護と活用に努めているところです。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、東区馬出５丁目における都市計画道路馬出東浜線建設に先立って行われた箱崎遺跡第62次調査の記録の報告書です。本調査では、平安時代から江戸時代に至る集落跡や墓地跡を発見しました。調査地点は筥崎宮を中心に展開する中世都市としての箱崎遺跡の南西側縁辺にあたりますが、本調査により明らかになった中世から近世にいたる土地利用の変遷は、箱崎地区の歴史を知る上で重要な資料になるものと考えられます。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施について多大なご協力をいただいた道路下水道局をはじめ、現地にてご協力をいただいた妙徳禅寺をはじめとする近隣の皆様など関係各位の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成21年3月23日

福岡市教育委員会

教育長　山 田　裕 嗣

例　言

１．本書は、福岡市道路下水道局の委託により、福岡市東区馬出５丁目31外地内において、福岡市教育委員会が平成20（2008）年7月15日から同年10月15日まで発掘調査を実施した、都市計画道路馬出東浜線建設に伴う箱崎遺跡第62次調査の報告書である。

２．調査は、廃土処理の都合上から東西に二分割している。最初に調査した西側（調査区全体の約2/3）をⅠ区、土砂を反転後に調査した東側（同約1/3）をⅡ区としている。遺構の呼称は記号化し、甕棺墓（近世）をＳＴ、土坑および土壙墓をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、井戸をＳＥ、性格不明遺構をＳＸ、柱穴および性格不明ピットをＳＰとしている。また遺構番号は、調査時に用いた番号をもとに一部整理修正して報告している。

３．本書の遺構図に用いる方位北は、断りのない限り国土座標北である。ただし、一部の遺構図に磁北を用いた場合がある。調査区の座標は任意のものである。国土座標上における調査区の位置は、馬出東浜線道路建設に伴い、土木局道路建設部（現・道路下水道局）が道路建設予定地周囲に設置した測量基準点より国土座標を移動して求めている。なお座標系は世界測地系によるが、周囲における既存の発掘調査地点の国土座標値は日本測地系による場合が多いので注意が必要である。

４．本書の遺構図に用いる標高は、筥崎土地区画整理事業において設置された測量基準点兼水準点の標高から移動して用いている。

５．本書に用いる遺構図は、久住猛雄（埋蔵文化財第１課）、坂口剛毅（技能員）、山崎悠郁子（別府大学学生）、天野正太郎（九州大学学生）、角信喜（東海大学学生）、吹春憲治（発掘作業員）が実測し、作成した。

６．本書に用いる遺物実測図の作成者は以下の通りである。土器・陶磁器・瓦類の実測は、主に上方高広（埋蔵文化財課調査員）が行い、他に西拓巳（福岡大学大学院）、山崎悠郁子（別府大学大学院）、谷澤亜里（九州大学大学院）、安武憲史（福岡大学大学院）、小嶋篤（福岡大学大学院、現・福岡県教育委員会）、久住が行った。また、金属器の実測は主に上方高広が行い、一部を西拓巳、山崎悠郁子、久住が行った。ガラス玉の実測は谷澤亜里が行った。土器・瓦等の拓本の採取は西拓巳、山崎、および成清直子（整理作業員）が行った。なお、金属器の錆取りおよび保存処理、Ｘ線写真撮影は上角智希（埋蔵文化財センター）が行い、銅銭の判読（同定）も上角が行った。　金属製品については上角から教示を得た。

７．本書に用いる遺構図および遺物実測図の製図は、成清直子、宇野美嘉（整理作業員）、上方高広、山崎悠郁子、西拓巳、谷澤亜里、および久住が行った。

８．本書に用いる遺構写真および遺物写真は、一部を除き久住が撮影した。遺構写真のうち、空中写真撮影については、有限会社空中写真企画に業務委託し、バルーンを用いて撮影したものである。また金属器の写真については、上角智希、上方高広が撮影したものがある。また、動物遺存体の写真については屋山洋（埋蔵文化財第１課）が撮影した。

９．本書の編集と執筆（一部を除く）は久住が行った。遺物の記述に関しては、上方高広からの教示を得た部分がある。また、動物遺存体に関する記述は屋山洋が執筆した。

10．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面・写真）は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

調査基本情報一覧表

遺　跡　名	箱崎遺跡	調　査　次　数	62次	調　査　略　号	HKZ－62
調　査　番　号	0825	分布地図図幅名	34．箱崎	遺跡登録番号	0202639
事前審査番号	10-1-20	調　査　原　因	道路建設	敷　地　面　積	22,000㎡（全対象地）
調　査　期　間	平成20年（2008年）7月15日～同年10月15日			工　事　面　積	22,000㎡
調　査　地	福岡市東区馬出5丁目31外地内			調　査　面　積	693.24㎡（62次調査）

目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
　３．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅱ．調査の記録 …… 4
　１．調査地点の位置と基本層序 …… 4
　２．調査の経過と概要 …… 15
　　１）調査の経過 …… 15
　　２）調査の方法と概要 …… 16
　３．検出遺構 …… 20
　　１）近世甕棺墓 …… 20
　　２）近世土壙墓 …… 20
　　３）近世土坑（土壙墓であるか不確実なもの） …… 27
　　４）時期不詳（中世～近世）の土坑 …… 28
　　５）中世井戸 …… 29
　　６）中世土壙墓および土坑 …… 30
　　７）溝状遺構（中世～近世） …… 30
　　８）落込み状遺構（中世） …… 34
　４．出土遺物 …… 34
　　１）近世甕棺（大甕） …… 34
　　２）土器，陶磁器，瓦 …… 37
　　３）金属製品（銅製品・銅銭，鉄製品ほか） …… 41
　　４）有機質遺物 …… 42
　　５）ガラス製品 …… 45
　　６）動物遺存体 …… 45
Ⅲ．まとめ …… 46

挿 図 目 次

— 挿 図 目 次 —

Fig. 1　周辺主要遺跡分布図（1/40,000） …… 2
Fig. 2　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000） …… 3
Fig. 3　箱崎62次調査区の位置と周辺の調査区（1/600） …… 5
Fig. 4　箱崎62次調査区全体略図（1/250） … 6
Fig. 5　箱崎62次調査区全体図（1/100） … 折込
Fig. 6　Ⅰ区東半東西トレンチ土層図(1/40) … 7
Fig. 7　Ⅱ区柱状土層図（1/40） …… 8
Fig. 8　Ⅰ区西半１面下（２面）検出遺構平面図（1/100） …… 9
Fig. 9　Ⅰ区断面図(Fig.5･6･8-Ⅰ～Ⅵ)(1/100) …… 10
Fig.10　Ⅰ区西半中央２面下トレンチ実測図土層図（1/50） …… 11
Fig.11　近世甕棺墓ST019,ST845実測図（1/30） … 13
Fig.12　近世甕棺墓ST001,ST031実測図（1/30） … 13
Fig.13　近世土壙墓SK361,SK580実測図（1/30） … 14
Fig.14　近世土壙墓SK363,SK362,SK702実測図（1/30） …… 15
Fig.15　近世土壙墓SK701,SK321実測図（1/30） … 15
Fig.16　近世土壙墓SK312,SX106実測図（1/30） … 16
Fig.17　近世土坑実測図(1)(1/40)(SK334,SK324･325, SK441,SK536･538,SK516,SK552,SK525･539, SK476,SK464,SK188, SK187･352) …… 17
Fig.18　近世土坑実測図(2)(1/40)(SK097･102,SK099, SK103,SK202･203,ST012･SK425,SK228) …… 18
Fig.19　(中世～)近世土坑実測図(1)(1/40)(SK730･731, SK716･718･720･721,SK625) …… 19
Fig.20　(中世～)近世土坑実測図(2)(1/40) (SK015,SK081,SK088,SK092,SK373,SK484, SK338,SK189,SK083,SK658) …… 21
Fig.21　SX601ほか（中世～近世）土坑群実測図（1/60) (SK733･734･740･743･748･749･781) …… 22
Fig.22　井戸SE801実測図（1/40) …… 23
Fig.23　中世土壙墓SK837実測図（1/30) …… 24
Fig.24　中世土壙SK837下部遺構実測図（1/30) … 24
Fig.25　中世土坑SK805実測図（1/30) …… 25
Fig.26　SD802,SD803,SD804土層図･断面図(1/25) … 26
Fig.27　落込みSX830実測図土層図（1/50) … 27
Fig.28　ST001陶器甕棺実測図（1/8) …… 29
Fig.29　ST019陶器甕棺実測図（1/8) …… 29
Fig.30　ST845陶器甕棺実測図（1/8) …… 30

Fig.31 ST031土師質甕棺実測図（1/8）…… 30
Fig.32 近世甕棺墓出土および遺構出土中近世土器･陶磁器実測図Ⅰ(1/3,一部1/4) …… 31
Fig.33 遺構出土中近世土器･陶磁器実測図Ⅱ(1/3,一部1/2･1/4)…… 32
Fig.34 遺構出土中近世土器･陶磁器実測図Ⅲ(1/3,一部1/2･1/4)…… 33
Fig.35 遺構出土中近世土器･陶磁器実測図Ⅳ(1/3,一部1/2･1/4)…… 35
Fig.36 遺構出土中近世土器･陶磁器実測図Ⅴ(Ⅰ区東半２面Ⅱ区遺構)(1/3,一部1/2･1/4)…… 36
Fig.37 SE801出土陶磁器実測図Ⅰ(1/3) …… 37
Fig.38 SE801出土陶磁器実測図Ⅱ（1/4),SK321出土陶磁器実測図補遺（1/3)…… 38
Fig.39 SD802出土土器・陶磁器実測図（1/3)… 38
Fig.40 SX830出土土器･陶磁器実測図（1/3,一部1/2)…… 38
Fig.41 Ⅰ区１面以下トレンチ包含層グリッド出土土器･陶磁器実測図（1/3,一部1/4)…… 39
Fig.42 Ⅰ区Ⅱ区1面検出時および攪乱出土土器･陶磁器実測図（1/3, 1/4)…… 40
Fig.43 古代以前の土器実測図（1/3) …… 40
Fig.44 箱崎62次出土中世瓦実測図（1/4) … 41
Fig.45 箱崎62次出土金属製品実測図Ⅰ(1/3) … 42
Fig.46 箱崎62次出土金属製品実測図Ⅱ(1/3,銅鈴銅鏡は2/3) …… 43
Fig.47 SK702出土金属製品･土器(1/3,銅銭拓影は1/1)…… 43
Fig.48 箱崎62次出土中国銭貨拓影（1/1) … 43
Fig.49 箱崎62次出土近世銭貨拓影（1/1) … 44
Fig.50 SK702出土ガラス丸玉実測図（1/1) … 45
Fig.51 SK334,SK281出土遺物(1/3)と近世土壙墓SK281(1/40)…… 46

— 表 目 次 —

表１ Ⅰ区東半(１面下)東西トレンチ土層図(Fig.6)注記…… 7
表２ Ⅱ区壁面･１面下柱状土層図(Fig.7)注記 … 8
表３ Ⅰ区西半中央２面下トレンチ土層図(Fig.10)注記…… 11
表４ SD802,SD803,SD804土層図･断面図(Fig.26)注記…… 26
表５ 落込みSX830土層図(Fig.27)注記 … 27
表６ 箱崎62次出土金属製品一覧表(銅銭除く) … 44
表７ 箱崎62次出土銅銭一覧表Ⅰ …… 44
表８ 箱崎62次出土銅銭一覧表Ⅱ …… 45
表９ 箱崎62次出土動物遺存体一覧表 …… 45
表10 箱崎62次出土動物遺存体一覧表Ⅱ … 46

本文中写真（Ph.）・表紙写真目次

Ph.1 バルーンによる空中写真撮影（Ⅰ区,東から）… 7
Ph.2 発掘調査作業状況（Ⅰ区西半,南西から）… 9
Ph.3 Ⅰ区調査終了状況（西から）…… 12
Ph.4 ST02（左)～ST05（右）近世甕棺墓検出状況（東から）…… 12
Ph.5 ST12（左)・ST11（右）近世甕棺墓検出状況（南東から)…… 12
Ph.6 SE801井戸側桶組出土状況(東から)…… 22
Ph.7 SD802土層断面①(西から）…… 25
Ph.8 SD802土層断面②(東から）…… 25
Ph.9 SD803土層断面(西から）…… 25
Ph.10 SD804土層断面(西から）…… 25
Ph.11 発掘調査作業状況(Ⅱ区,東から）…… 28
表表紙写真 調査区空撮全景(合成写真)
裏表紙写真 (左上)Ⅱ区中世井戸SE801(北から)
(右上)Ⅰ区近世土壙墓SK362(西から)
(左下)Ⅰ区近世土壙墓SK580(南から)
(右下)Ⅰ区近世甕棺墓ST31(南西から)

写真図版（PL.）目次

(PL.1～4はカラー図版)
PL.1 1．調査区空撮全体写真（合成写真）
PL.2 1．Ⅰ区西半２面遺構調査状況
2～5．SK362･580近世土壙墓出土状況
PL.3 1～3．SK702･363近世土壙墓出土状況
4．落込みSX830土層断面
5．Ⅰ区西半中央２面下トレンチ土層断面
6～8．Ⅰ区東半１面下トレンチ北壁土層断面
PL.4 1･2．SK363出土和鏡
3･4･6～8．和鏡･銅銭布目痕(繊維痕)
5．SK580出土銅製臥鉦
9．SK702出土キセル・毛抜・銅銭
10．SK181出土銅製鈴
11．攪乱001出土鍍金銅製小仏像
PL.5 1．Ⅰ区（１面）調査状況全景（空撮)
2･3．Ⅰ区，Ⅱ区調査状況遠景（空撮)
PL.6 1･2．Ⅰ区（１面）調査状況（空撮)
3．Ⅰ区（１面）中央調査状況
PL.7 1･2．Ⅰ区（１面）中央～西部調査状況
PL.8 1･2．Ⅰ区西半２面調査区調査状況
PL.9 1．Ⅰ区西半２面調査区中央～西側調査状況
2．Ⅱ区調査状況全景（空撮)
PL.10 1～4．Ⅱ区調査状況，Ⅱ区土層写真
5～8．ST001･031･019近世甕棺墓検出･出土状況
PL.11 1．ST845近世甕棺検出状況
2～4．SK361･321･701近世土壙墓出土状況
5･6．Ⅱ区中世遺構（SK837,SE801）調査状況
7．落込みSX830完掘状況
PL.12 1～10．箱崎62次出土遺物写真

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成10年6月24日、福岡市土木局東部建設第1課より都市計画事業に基づく「馬出東浜線」道路整備事業の計画に伴い、福岡市東区馬出・箱崎地内における「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」（事前審査番号10－1－20）の文書が提出され、埋蔵文化財課ではこれを受理し対応を協議した。対象地の多くの部分は箱崎遺跡として周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、書類審査、確認調査（試掘調査）を実施して対象地における遺跡の範囲と各地点の埋蔵文化財の有無を確認するとともに、関係部局と協議に入った。確認調査の結果から、事業予定地のうち箱崎遺跡に含まれる範囲の大部分に井戸、土坑、ピットなどの遺構や中世の輸入陶磁器などの遺物があり埋蔵文化財の存在が認められたので、文化財保護法に基づき、記録保存のための発掘調査を実施することになった。続いて用地買収や既存建物の撤去などの諸条件が整った箇所から、順次発掘調査を行った。当該事業による発掘調査は、平成13年度の27次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集）から開始され、37次（14年度，951集）、45次（15年度，951集）、47次（16～17年度，1046集）、54次（18年度，998集）、55次（19年度，1046集）が順次行われ、これらはすでに報告書も刊行されている。

本報告の62次調査部分は、事業対象地のうち最後に残っていた部分である。62次地点は、調査前は隣接する妙徳禅寺が管理する墓地区画の一部となっており、墓地移転の問題から用地買収と工事着工が保留されていた。しかし平成19年度に入り、当初の墓地区画のうち道路用地となった南半部分を解体・改葬し、墓地区画の北半の土地に墓地を新たに造成してここに墓を移転することになり（墓地造成部分は事前審査番号19－2－563）、用地買収と工事着工の目処が立つことになった。これを受け、墓地であった道路用地と新たに墓地が造成される北側隣接地について、平成19年10月29日と12月6日に確認調査を行い、道路予定地と墓地造成予定地の双方について遺構や遺物包含層などの埋蔵文化財が確認された。この結果を受け関係者の間で協議を行ったが、墓地造成部分に関しても造成時の掘削深度から埋蔵文化財に影響が避けられず発掘調査が必要なこと、墓地造成工事のための搬入路や資材置場の確保の必要性があること、また墓地移転工事を早急に終えたいという寺と檀家の希望もあり、墓地造成部分（民有地）の発掘調査を優先して行うということで関係者間の合意を得た。このため、北側隣地の墓地造成部分についての発掘調査が箱崎遺跡60次調査として平成19年度末（平成20年1月21日～3月27日）に先行して行われるに至った（『福岡市埋蔵文化財年報Vol.22』「0762 箱崎遺跡60次調査」）。60次調査終了後の平成20年度に入り、北側隣地の墓地移転工事が進み工事搬入路や資材置場の問題がなくなる時期を見込んで62次調査部分の本調査の予定が立てられ、平成20年7月に62次調査が開始されることになった。

発掘調査は、平成20年7月15日に開始され、途中8～9月のたび重なる豪雨の影響があり若干の期間延長などの工程調整を行ったが、平成20年10月15日に調査を終了した。なお整理作業と報告書作成は平成21年度に行っている。

2．調査の組織（平成20年度：本調査年度、平成21年度：整理・報告年度）

調査委託　道路下水道局東部建設課（平成19年度まで土木局東部建設課）

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　山田裕嗣

調査総括　文化財部埋蔵文化財課　課長　山口譲治（平成20年度）、濱石哲也（平成21年度）
埋蔵文化財第１課調査係長　米倉秀紀

事前審査　埋蔵文化財第１課事前審査係　星野恵美（20年度）、阿部泰之（21年度）

調査担当　埋蔵文化財第１課調査係　久住猛雄

庶務担当　文化財管理課　古賀とも子（平成20年度）、山本朋子（平成21年度）

なお本調査にあたっては、猛暑の中、多くの発掘作業員の方々の協力を得た。現場における遺構実測は、坂口剛毅（技能員）、山崎悠郁子（別府大学学生）、角信喜（東海大学学生）、吹春憲治（発掘作業員）、久住が行った。また発掘調査には作業員として九州大学学生の片岡ゆう、中井歩が参加した。整理作業は、担当者の指示の下、成清直子、宇野美嘉、丸茂朋が行った。遺物の実測は、主に上方高広（調査員）が行い、他に西拓巳（福岡大学大学院）、山崎悠郁子（別府大学大学院）、谷澤亜里（九州大学大学院）、安武憲史（福岡大学大学院）、久住が行った。本調査の条件整備においては、道路下水道局東部建設課のご協力を得た。また、発掘調査中に出土した近世以降の墳墓における人骨については、調査地が元々隣接する妙徳寺（妙徳禅寺）が管理する墓地であったことから、協議の上、妙徳寺が引き取り、荼毘・供養して頂けることになった（隣接し先行して行われた60次調査における合意を継承している）。これら関係各位の方々に対し、特に記して感謝申し上げたい。

３．遺跡の立地と歴史的環境

箱崎遺跡は多々良川河口の博多湾岸に形成された南北に延びる古砂丘上に立地する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近までの博多湾岸に分布しており、本遺跡を含め、多くの遺跡が立地している。箱崎遺跡の埋蔵文化財包蔵地は、およそ南北1000m以上、東西500mの範囲に広がり、その標高は2.0～3.5m前後である。

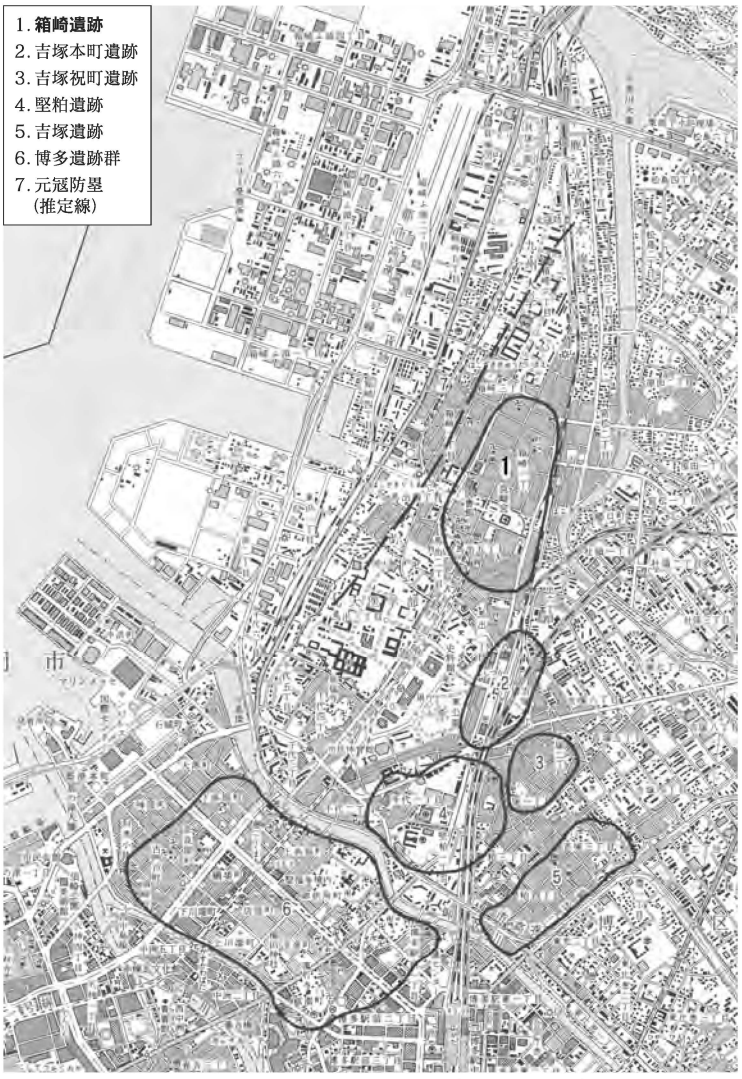


Fig.1　周辺主要遺跡分布図（1/40,000）

※上図の遺跡範囲は概略であり、記していない遺跡もある。また埋蔵文化財包蔵地の範囲は変動することもあり注意されたい。

箱崎遺跡は1983年の地下鉄貝塚線建設に伴う第1次調査以来、現在（2009年12月）までに65次の調査を数えるが、調査の本格化は1990年代からである。弥生時代以降、近世までの遺構と遺物が検出されているが、中世の遺構と遺物の調査・報告が多い。これは、古代中頃である10世紀前半の923年（延長元年）に筥崎宮が創建されたのを機として、門前町として周囲に集落が広がり、12世紀以降には広範囲に広がり「中世都市」として変貌を遂げたためである。筥崎宮創建の10世紀から11世紀頃までの遺構は、遺跡の東半分に主に分布する。これは箱崎遺跡の砂丘の東側には、かつては中世のある時期までは入江（潟湖）が存在し、

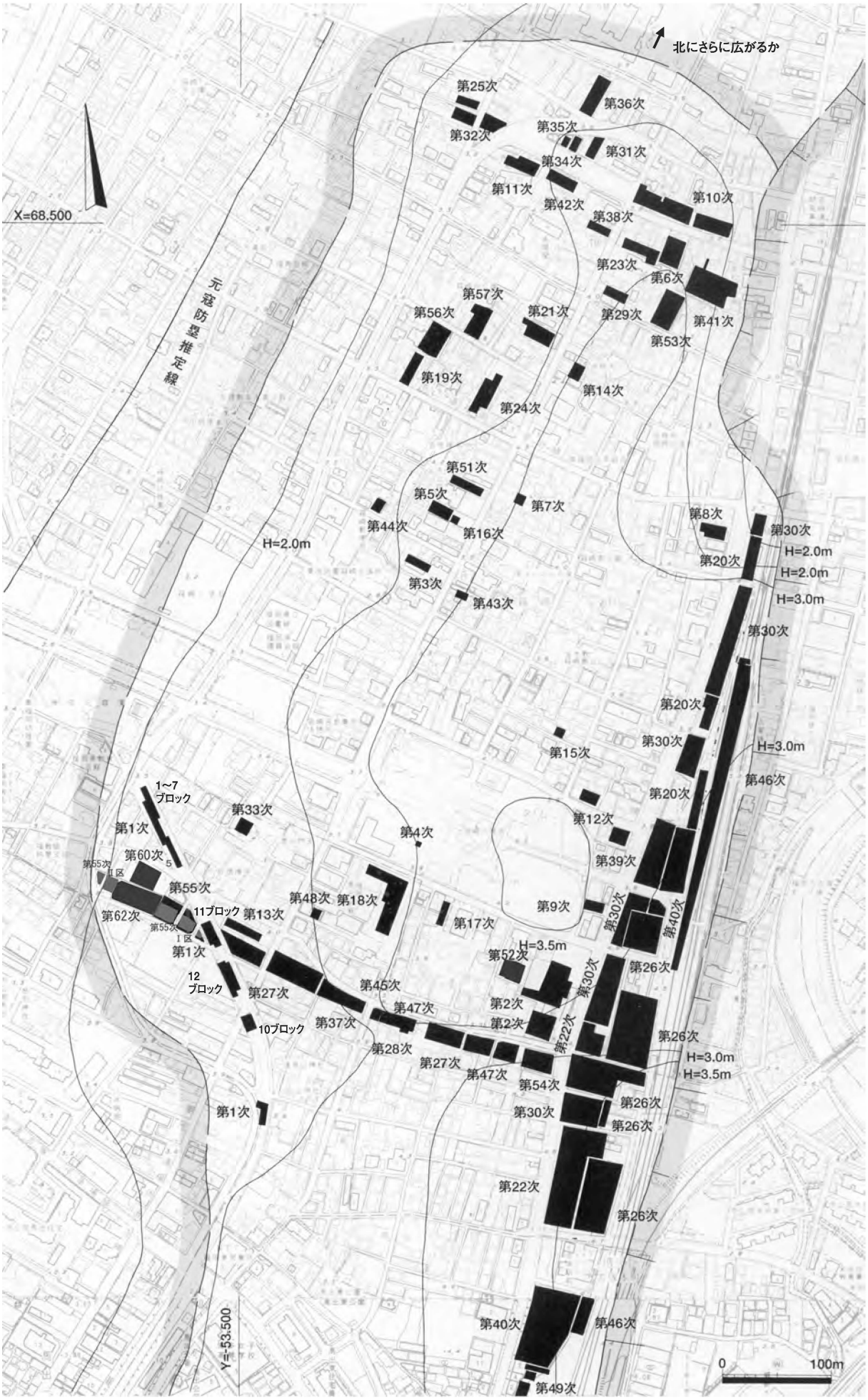


Fig.2　箱崎遺跡調査区位置図（1/5,000）

※52次調査の位置は、報告書（第997集，Fig1）に誤りがあったため訂正している。

「箱崎津」という港津として機能していたようである。現在でもこの潟湖推定地は標高の低い土地が広がっている。筥崎宮は石清水八幡宮の別宮となったり（1051年、1185年）、大宰府所領となったり（1140年）、歴史上、権門社寺との結びつきが強くみられる。遺跡の分布は12世紀頃に南北に走る砂丘尾根線前後に広がり、13世紀にかけて遺構分布は全域に拡大するこれはその潟湖の埋没過程とも関係があるだろう。現在の筥崎宮の門（鳥居）は西側に向かっているが、何時からそうなったかというのも箱崎遺跡の歴史の上では問題であろう。なお12世紀半ばには、博多と箱崎に1600軒以上の家屋があったという記録もあり、その頃までには博多と並んで「都市化」が達成されていることが遺構や遺物の増大からも確実である。同じ頃（1151年）には、大宰府の検非違使による「宋人大追補」が博多から箱崎にも及んでおり、やはり博多と同様に宋人の居住が考えられ、博多に次ぐ貿易都市としての性格も考えられ、貿易陶磁の量の増大が11世紀から12世紀に顕著である。『今昔物語』には筥崎宮の神官自らが、宋人と貿易交渉をしていたことが記されている。13世紀後半には、遺跡西側の海岸線最前列の砂丘に元寇防塁が築かれたはずであるが､後世の削平が激しく、現在はその痕跡をほとんど留めない。元寇のうち文永の役（1274年）には筥崎宮が一時焼失したとされ、13世紀後半の焼土層が検出される調査地点も多く、箱崎一帯が戦火に見舞われた可能性が高い。しかしながら、1323年（至治3年）に沈没した韓国新安沖沈没船からの「筥崎宮」銘木簡の出土から14世紀前半までは貿易拠点の一つとして存続していたようである。その後の中世後半以降の遺構については、近世遺構と混在する浅い深度に多く存在するためか、調査例が少なく不明な点が多い。しかし､『海東諸国記』や『宗湛日記』などの14～16世紀の国内外の文献に「筥崎（箱崎）」の地名が散見され、また中世に創建されたとされる寺社も多く、箱崎の集落（街）は近世を経て近現代へ継続しているものとみられる。なお近年の調査からは、Fig.2に示す遺跡の北端部分での中世遺構が濃密であることから、遺跡の範囲がさらに北側の九州大学構内に大きく広がる可能性が指摘されている。

中世以前の遺跡の様相についても触れておく。弥生時代から古墳時代については､『箱崎33』(52次報告、福岡市埋蔵文化財調査報告書第997集）に詳しいが、弥生時代の遺構や遺物は散発的で（6次・22次に早期～前期の石器・土器、18次に中期の土器、30次16B区に後期初頭の甕棺墓、22次・30次13区で後期の土器)、安定的に遺構が見られるようになるのは古墳時代初頭以降である。古墳時代前期～中期の遺構や遺物は、8・10・20・22・26・30・40・46・47・52次で検出されている。碧玉を素材とする玉作（47次・52次,『箱崎36』第1046集）、韓半島の還元炎焼成（陶質・瓦質）土器や軟質土器、東海系のS字状口縁甕などの遠隔地からもたらされた土器の出土が少なくないこと､飯蛸壺の集中出土（8次）、葺石を有する中期の円墳（40次）の検出など興味深い発見も多い。古墳時代後期にも遺構・遺物は継続するが（20・30・40次)、遺構数は減少する傾向にある。古墳時代の遺構の大部分は、砂丘列中央の南北方向尾根の東側、古代までは存在した潟湖に向かって傾斜する緩斜面上に分布する。その後の7～9世紀の遺構は不明瞭で、遺物が散漫に出土するにすぎない。これは博多や堅粕、吉塚などの周囲の砂丘上に存在する遺跡（Fig.1）の消長傾向と異なっている。

Ⅱ．調査の記録

１．調査地点の位置と基本層序（Fig.3・4）

本報告の第62次調査地点は、箱崎遺跡の南西縁辺部にあたり、現在の標高は3.2～3.6mを測る。東側が微妙に高い地形となっている。周囲には、北側に60次調査、東側に55次調査Ⅰ区、西側に55次調査Ⅱ区の各調査地点があるほか、東側に1次調査地点が位置している（Fig.2・3)。

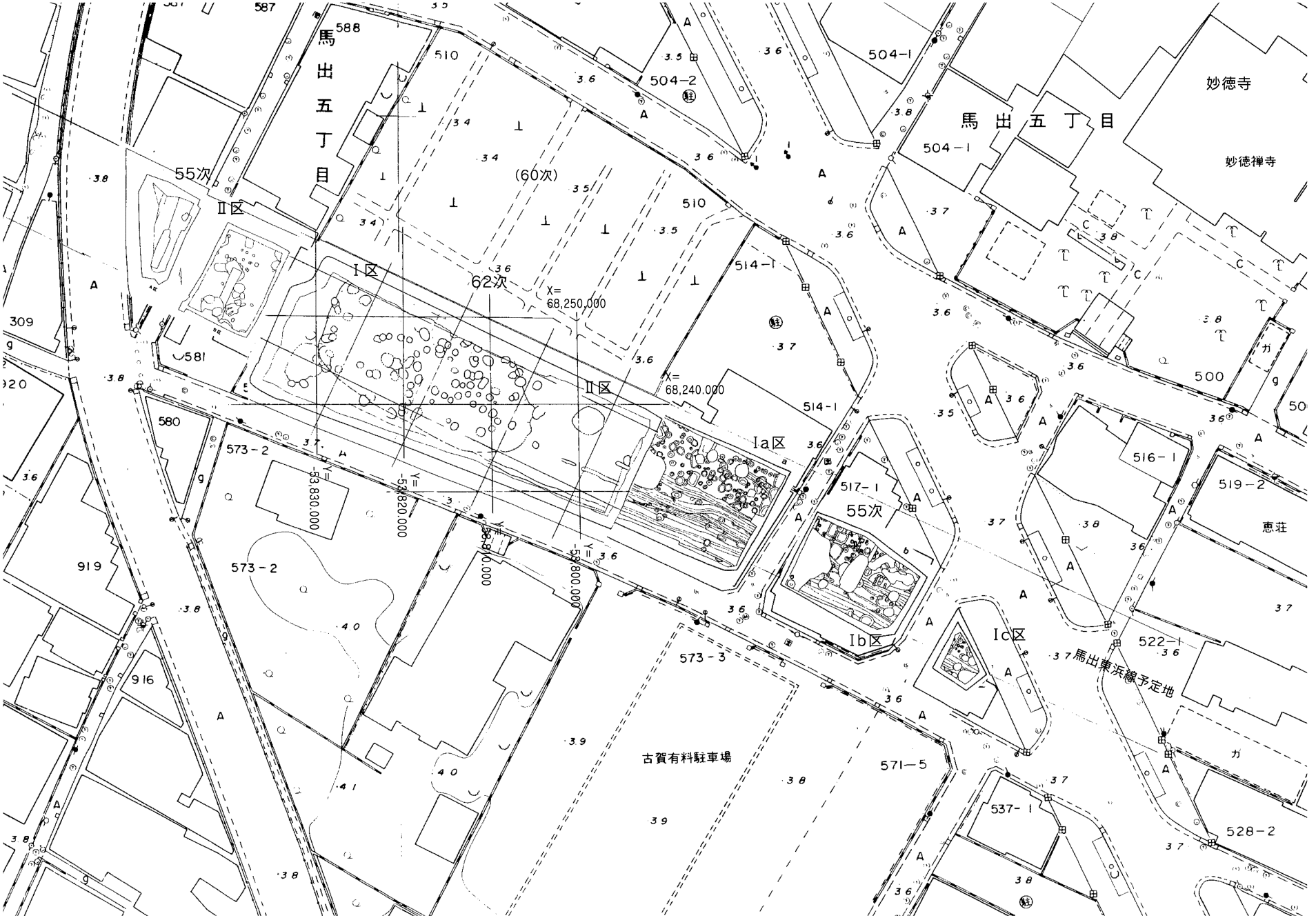


Fig.3　箱崎62次調査区の位置と周辺の調査区（1/600）

地下鉄２号線建設前に行われた**１次**調査では（Fig.2参照，福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集、以下「○○集」とする）、現在の箱崎地区の大学通りを中心とする街割（13世紀形成の街区に起源か）に近い方向の大溝・溝状遺構や、これに伴う道路遺構が検出されている（北西側１～７ブロック）。道路遺構とされた整地層は13世紀後半～14世紀前半という。その他の廃棄土坑や井戸も13～14世紀が多く、一部12世紀後半がある。55次Ｉ区の東側になる１次11ブロックは、大半が近世墓の群集であり、これは60・62次と同様に、隣接する妙徳寺の近現代までの墓域の一つであったものである。この南の12ブロックでは、南部柱穴群が密集し、その北側に13～16世紀の井戸が累代的に存在する。その他、14～16世紀の石組（配石）遺構がある。

62次の東に隣接する**55次**（1046集）のＩ区（**１区**）では（Fig.3）、大学通りに直交する方向の溝群や12～13世紀を主体となす土坑や遺物が検出されている。55次報告では溝群について、「中世末～近世段階」の遺物が多いとして、その時期の可能性を考えているが、一方では下層で中世段階の遺物が多いとして中世前半の掘削の可能性も述べている。これらの一部の溝は62次Ⅱ区に続き、それを勘案するとおそらく後者が妥当である。例えば55次Ｉa区の溝群の前後関係はSD003→SD125→SD002だが（報告第5図）、図示されたSD003の遺物は12世紀中～後葉、SD002は13世紀前～中葉であり（同第7・8図）、時期的矛盾はない。上層部が掘り返されているとするが、報告の土層図では近世の掘り返しの想定と溝同士の重複の時期的相互関係が説明しがたい（※報告第６図土層図と第５図の溝番号に異動があり注意）。報告の土層写真を見ると、遺構検出面より上のレベルにいくつもの新しい掘り込みがあるようにも見られるので おそらくは「中世末～近世段階」

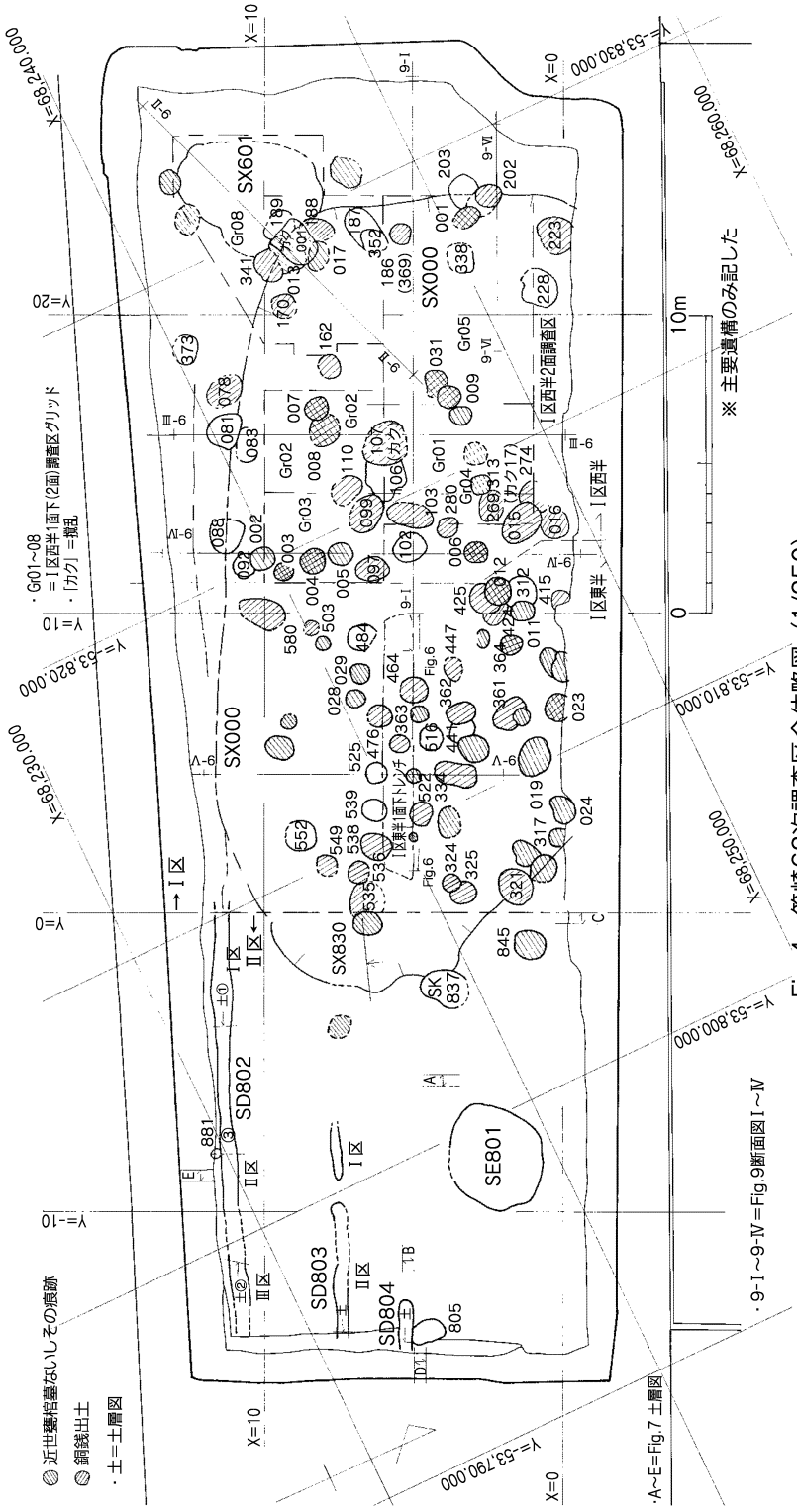


Fig.4　箱崎62次調査区全体略図（1/250）

・「カク」＝撹乱

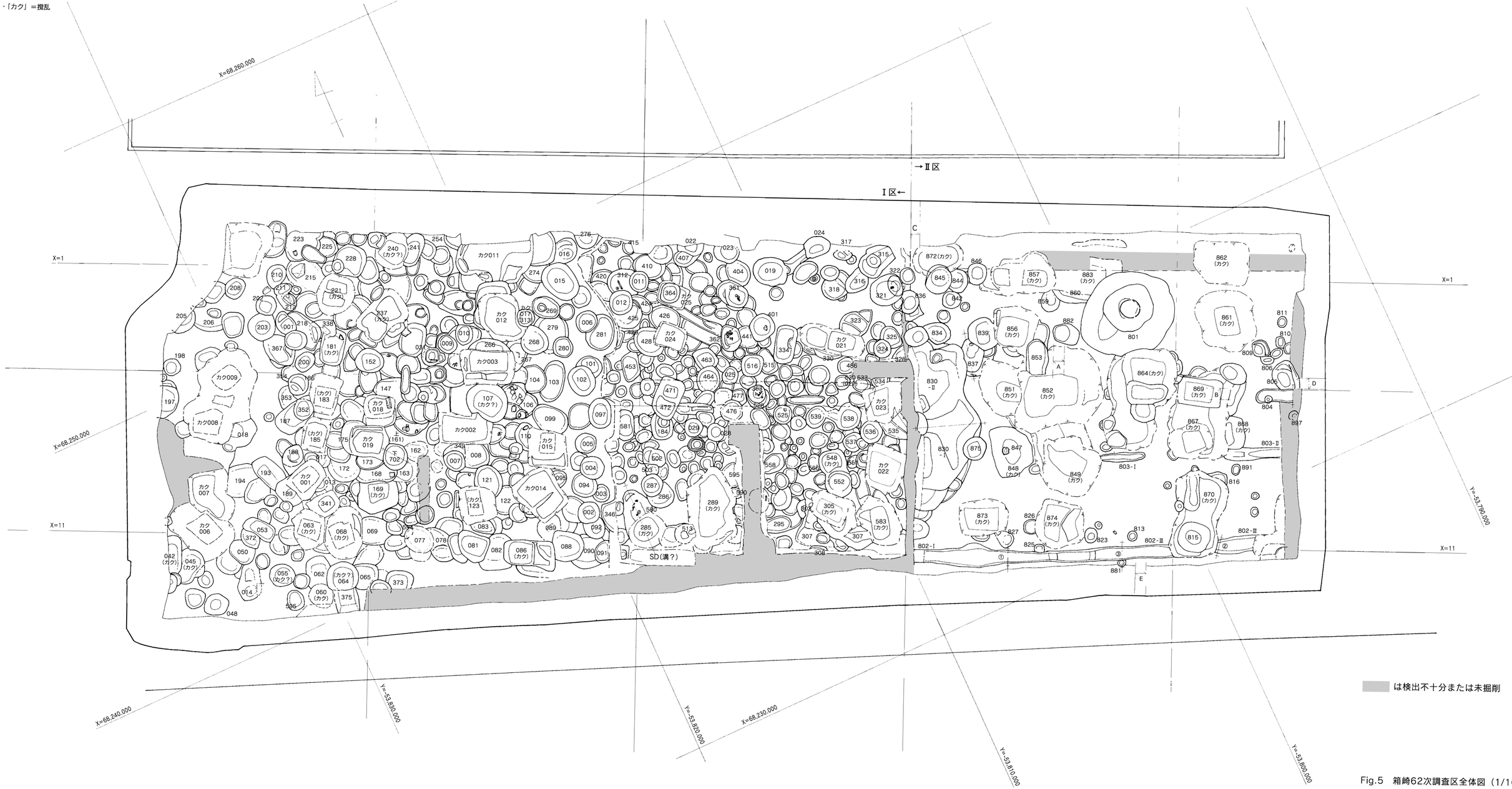


Fig.5　箱崎62次調査区全体図（1/100）

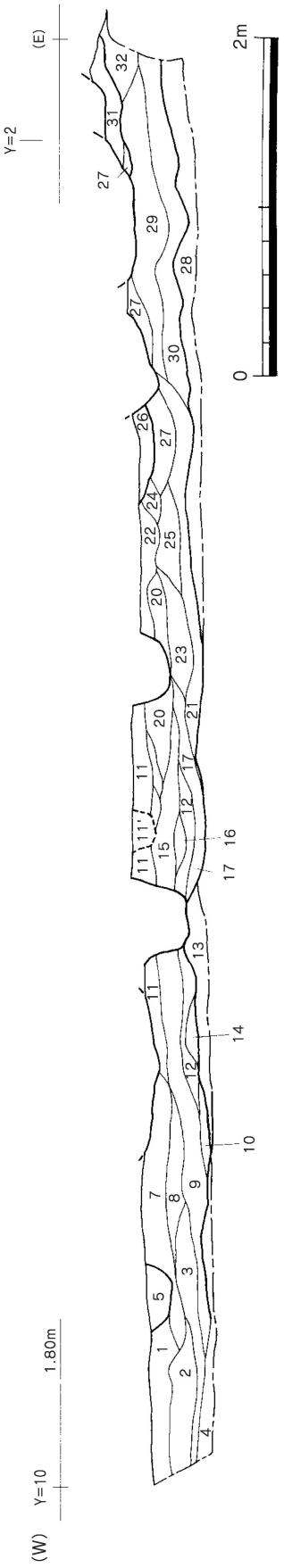


Fig.6　Ⅰ区東半東西トレンチ土層図（1/40）

1　暗茶褐色細砂、酸化鉄沈澱、下部に遺物を含む
2　1層より明るいこげ茶色（にぶい茶褐色）砂、1層より粗い砂
3　2層より明るく白っぽいこげ茶色（淡茶褐色）、2層より粗い砂、2～3㎜の砂礫を多く含む
4　灰黄褐色、3層より粗い砂、しまり甘く非常にもろい、遺物を含む
5　1層より暗い褐色細砂、酸化マンガン沈澱、しまりあり堅い、炭化物含む
6　5層より明るい褐色砂、5層より細かめの砂、酸化鉄沈澱、5層よりしまり甘い、炭化物・遺物含む
7　灰茶褐色砂、5層と同じ細かめの砂、酸化マンガン沈澱、5層よりややしまりが甘い、炭化物、遺物含む
8　7層より明るくて白っぽい茶色砂、やや赤味、5層と同じ細かい砂、酸化鉄沈澱、7層よりややしまり甘い、炭化物・遺物含む
9　3層とほぼ同じ土質・土色、炭化物・遺物含む
10　4層と同じ黄色気味の茶色砂（灰黄褐色砂）、細かい砂（7層とほぼ同じ）、2～3㎜の砂礫を含む、4層よりしまりが甘い
11　7層より灰色気味の灰褐色砂、7層と同じ細かい砂、7層よりしまりやや甘い、少量の炭化物含む
12　9層よりやや明るく10層より灰色が強い灰黄褐色砂、9層よりやや粗い砂、9層よりしまり甘い、9層下部面との間に遺物含む
13　4層と同じ砂丘砂（灰黄褐色砂）
14　赤みを帯びた茶色砂（10層より赤い）、9層より細かい砂、9・10層よりもしまりあり、酸化鉄沈澱
15　14層より赤味少ない灰茶色砂、9層より赤い、5～6㎜の砂礫含む、11層よりしまり甘い、炭化物あり、酸化鉄沈澱
16　14層と同じ土質・土色、酸化鉄沈澱
17　12層と同じ土色、土質、酸化マンガン沈澱、12層よりややしまりが甘い
18　11層より灰色気味の灰褐色砂、酸化鉄沈澱、11層より粗い砂、11層よりしまりが甘い、炭化物
19　18層と同じ灰色気味の茶色砂（灰褐色砂）、18層と似た砂、2～3㎜の砂礫混じる、しまりは18層と同様、酸化鉄沈澱
20　土色は18･19と同様、19層より粗い砂、3～4㎜の砂礫を多く含む、しまりは19層と同じ、酸化鉄沈澱
21　17層より白黄色が強く明るい淡黄褐色砂、17層より粗い砂、2～3㎜の砂礫、17層よりしまり甘い
22　暗茶褐色砂、11層より細かい砂、11層よりしまり甘い、遺物含む
23　17層と同色砂、17層より粗い砂、4㎜大の砂礫が入る、17層よりしまりが甘い
24　20層より暗いこげ茶色、（やや暗い暗褐色）砂、酸化マンガン沈澱、20層と同じ砂質、20層としまり同じ
25　23層より明るい赤茶色（明茶褐色）砂、酸化鉄沈澱、24層より粗い砂、2～3㎜の砂礫、20層よりしまり甘い、炭化物含む
26　22層とほぼ同じ土質・土色、遺物なし、炭化物を含む
27　23層と同じ土色（灰黄褐色砂）、酸化鉄含む、23層と同じ砂質、8㎜程度の砂礫を含む、23層としまり同じ、炭化物・遺物含む
28　4層と同様の土質・土色、ほぼ同じ層、砂が細かくふわふわする（しまり甘い）
29　27層よりやや暗い暗（灰）黄褐色砂、砂質は27層と同様、27層よりしまりやや甘い、炭化物含む
30　29層よりやや白っぽい淡灰黄褐色砂、4・27・28層より粗い砂、27層よりしまり甘い、炭化物含む
31　暗茶褐色砂（22層と同じ）、細かい砂、しまりあり、遺物・炭化物あり
32　31層より明るい茶色砂（にぶい黄褐色砂）、31層より粗い砂、31層よりしまり甘い、遺物・炭化物あり

表1　Ⅰ区東半（1面下）東西トレンチ土層図（Fig.6）注記

の遺物は、溝上面で検出できなかったその段階の諸遺構（溝の掘り返しとは限らない）の混入である蓋然性が高いと考えておきたい。ただし、SD002は62次SD803（近世遺物あり）に続くもので、SD125の凹みに再掘削された近世溝である可能性がある（1a区中央以西のSD002下部はSD125である可能性があり、中世遺物はSD125に伴うか）。次に**55次**Ⅱ区（**2区**）は、西側A区で街割に沿うような略南北の大溝SD001があり、中世末（16世紀後半）の掘削で、近世までの箱崎の街区外縁線の可能性が考えられる。Ⅱ区では中世の遺構・遺物は少なく、近世の遺構が散漫に分布する状況であった。未報告であるが、62次の北側に接する**60次**は（『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.22，p.99）、62次と同じ墓域である妙徳寺が管理した近現代に続く近世墓群の密集が検出されており、甕棺（陶器棺）と土壙墓（桶棺）がある。土師器小皿や六道銭、和鋏・毛抜を副葬する土壙墓（桶棺）が多くあるのも62次と同じである。近世墓地は18世紀後半～幕末とするが、墓地の初現期は検討を要する。包含層から中世遺物も多く出土したとされているが、無数の近世遺構が大部分を占めるためか明確な中世遺構は幅3.0～3.5mの南北方向の大溝のみとされる。この大溝は62次では検出されておらず、60・62次の調査区間の未調査部分の幅内で途切れるか、あるいは後述する落込み遺構SX000に関

Ph.1　バルーンによる空中写真撮影（Ⅰ区,東から）

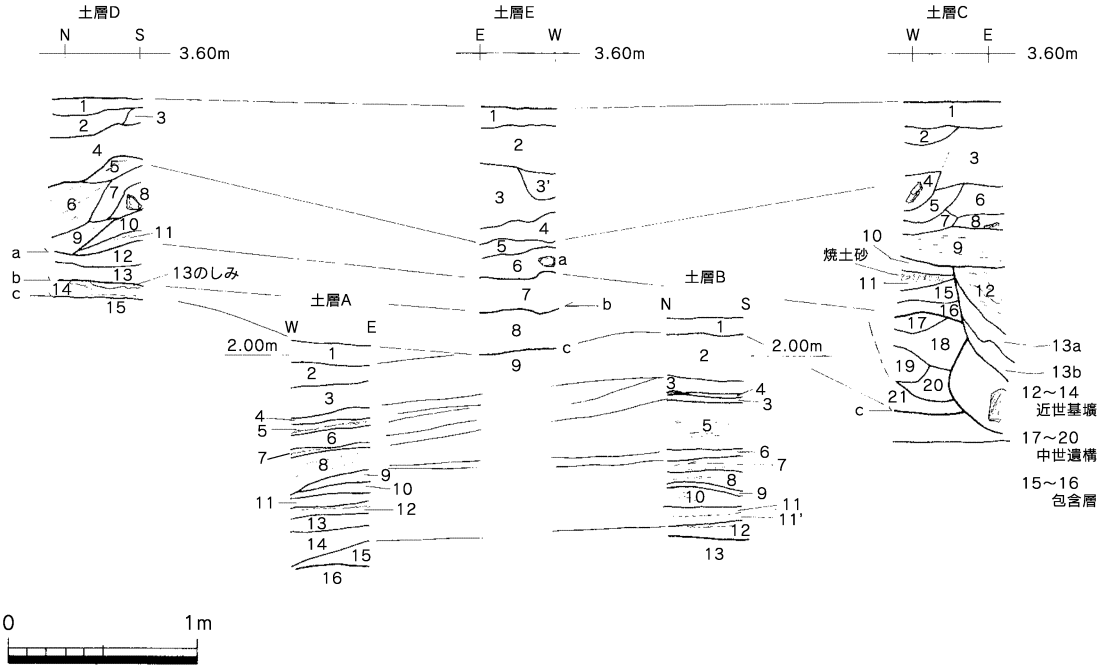


Fig.7　Ⅱ区柱状土層図（1/40）

Ⅱ区調査区壁面土層D

1　表土、暗黄褐色～にぶい褐色砂＋粗砂多＋暗褐色シルト
2　レキ・ガラ多、暗黄褐色～にぶい黄褐色砂粗砂主体、しまりやや甘い～ややあり
3　2層＋4層混合
4　しまり(やや)あり、暗褐(～黒褐)色砂質シルト、粗砂・小レキ・レキやや多い、レンガ他のガラ少し、近現代層(1～4層)
5　にぶい黄褐色～にぶい黄橙色砂＋にぶい褐色砂汚れ30%(斜めラミナ状)、しまりやや甘い
6　板ガラス片含む、(近代ガラスか)、にぶい黄橙色～明黄褐色砂、(粗砂もやや多い＋褐色～暗褐色シルトの一部汚れ、斜めラミナ状堆積、しまりややあり
7　浅黄色砂～黄色砂＋褐色砂汚れ(ブロック状)少し、しまり8層よりややあり
8　にぶい浅黄色～にぶい黄色砂＋にぶい黄褐色砂汚れ(水平ラミナ状)、レキ含む、しまり甘い(6～8層は一連か)
9　少し粗い(にぶい)浅黄橙色砂＋にぶい黄褐色砂斜めに混合する、しまり甘い
10　にぶい黄褐色砂＋にぶい褐色砂ブロック＋にぶい浅黄色砂少し、しまり(やや)甘い
11　明黄褐色～浅黄色砂＋にぶい黄褐色砂汚れ30%、しまり甘い
12　ややにぶい(浅)黄橙色粗砂(やや粗い砂)黄橙色砂、しまり甘い、1㎜大以上粗砂やや多、炭粒わずか、(土層E-7層上部に対応?)
13　にぶい浅黄色砂＋にぶい黄褐色(～にぶい褐色)砂の汚れ50%、しまりやや甘い、(土層E-7層中位に対応)
14　にぶい浅黄色～浅黄橙色砂、13層のしみあり、しまり13層よりあり(15層より甘い)、(土層E-7層下位に対応)
15　ややしまりあり、浅黄橙色(～明黄橙)砂、粗砂(1㎜大以上)少し含む(土層E-8層と同じ)

Ⅱ区1面下土層A(カクラン壁面)

1　浅黄色～浅黄橙色砂(粗砂わずかに含む)、しまりやや甘い
2　(浅)黄橙色粗砂、1～2㎜大粗砂やや多、2㎜大以上粗砂少し、しまり(やや)甘くもろい
3　浅黄橙(～黄橙)色砂、1～2㎜粗砂少し含む(やや粗い砂)、しまりやや甘い
4　浅黄橙色～にぶい黄橙色砂、しまりやや甘い、1～2㎜粗砂多、2㎜以上粗砂少
5　浅黄橙色～黄橙色砂(細砂)、しまりややあり、下辺に暗灰色～灰黄色シルト砂
6　浅黄橙色～黄橙色粗砂、しまり(やや)甘い、1～3㎜多、3㎜以上少
7　浅黄橙色砂(やや細かい)、7層の下部に(暗)灰黄色シルト砂が入る
8　にぶい黄橙色粗砂、(かなり粗い)、しまり甘い、1～3㎜多、3㎜以上もやや多い(9～11層は一連の粗砂主体ラミナ堆積)
9　浅黄橙色～にぶい黄色砂＋粗砂混合
10　浅黄橙細砂主体(＋粗砂少し)の堆積、しまり9・11層よりややあり
11　浅黄色～にぶい黄色粗砂、1～3㎜多、3㎜以上も若干あり、しまり(やや)甘い
12　浅黄橙色砂、(やや細かい)、＋やや粗い砂少し、中間に灰(暗灰黄)色シルト砂が、水平にラミナ状に入る、上下層よりしまりややあり
13　浅黄橙色粗砂(かなり粗い)、しまりかなり甘い、1～3㎜多、3～6㎜もやや多い
14　浅黄橙色～にぶい黄橙色粗砂、しまり甘い、1～3㎜多、3㎜以上少
15　浅黄橙色～黄橙色砂、1㎜以上粗砂、若干、上下層よりしまりややあり
16　にぶい黄橙色粗砂(かなり粗い)、水分含む(湿る)、1～3㎜多、3㎜以上も多い

Ⅱ区調査区壁面土層E

1　黒褐色土、耕作表土、現代ガラ含む
2　明黄ベージュ色マサ土盛土、しまりあり
3　黒褐色シルト土、しまりありやや堅い、耕作土か、粗砂・レキ・ガラ少し含む、炭粒あり、近代以降(19～20C)
3'　カクラン気味、しまり甘い
4　暗褐色シルト土、しまりややあり、暗灰色粗砂・シルト含む
5　暗黄褐色～暗褐色砂質シルト、しまり甘い
6　粗砂を多く・レキを少し含む混合土、暗褐色シルト土＋(にぶい)黄色～明黄褐色砂・粗砂、レンガ他近代ガラ含む、18C以降の陶磁器片
7　8層に似るがわずかに濁った浅黄橙色砂、8層よりしまりやや甘い、にぶい黄色(～にぶい 黄褐色)砂わずかに含む
8　浅黄橙(～浅黄)色砂＋粗砂わずか、しまりややあり(、7～8層は漸移的)
9　やや粗い明黄褐色(～明橙色)砂、自然の炭粒が入る、粗砂1～2㎜大ややや多、3㎜大以上わずか、8層よりしまりやや甘い

Ⅱ区1面下土層B(カクラン壁面)

1　浅黄色～浅黄橙色砂、3層よりやや粗いがやや細かい砂
2　浅黄橙色～にぶい黄橙色砂・粗砂、1～3㎜大多い砂、しまりやや甘い
3　浅黄橙色砂、(やや細かい砂)、粗砂わずかに含む、軟らかいがややしまる
4　中間に暗褐色砂(シルト砂)が帯状入る(しみ状)、浅黄橙色砂・細砂(ラミナ)
5　水平ラミナ、粗い(1～2㎜大多)浅黄橙色砂主体80%、一部1ミリ以下浅黄橙色砂ラミナが入る
6　しまりやや甘い、浅黄色～浅黄橙色砂70%＋粗い黄橙色砂
7　11層に近い、かなり粗い(浅)黄橙色砂主体＋やや細かい浅黄橙色砂30%、しまり甘い
8　10層とほぼ同じ、浅黄橙色～浅黄橙色砂、しまり10層より甘い
9　8・10層＋(にぶい)黄橙色粗砂(1～3㎜大)40%、
10　水平ラミナ堆積、浅黄橙色(～浅黄色)砂(やや細かい)＋やや粗い砂少し、しまりややあり
11　かなり粗い浅黄橙色砂、1～3㎜大多、3㎜以上大粗砂も含む、しまり甘い(、11'　層は酸化鉄マンガンで褐色化)
12　やや粗い浅黄橙色砂～にぶい黄(黄橙)色砂、水分含む(湿り気あり)
13　浅黄橙色～にぶい黄橙粗砂、1～3㎜大多い

Ⅱ区調査区壁面土層C

1　表土、黒灰褐色土、ガレキ・バラス・レンガ片・コンクリガラ含む
2　暗褐色シルト(・砂)、ガラ・レキ少、耕作土か?
3　暗褐色シルト・砂、しまりあり、ガラ・レキやや多く含む
4　3層＋レキ多(暗褐色砂＋レキ・ガラ)
5　暗黄褐(～暗褐)色砂＋にぶい黄褐色砂20%、しまりあり、黒色土少ブロック含む、ビニル片あり現代層
6　暗褐色砂(～暗黄褐色砂)＋にぶい黄褐色10%、しまりあり、黒色、シルト土ブロック少し
7　(浅)黄橙色砂20～30%、＋暗褐色～暗黄褐色砂60%以上＋黒褐色砂少し、水平～斜めラミナ堆積層、しまりややあり
8　暗褐色砂70%＋にぶい黄橙色砂10～20%＋黒色砂10%、しまりややあり、6～8層は近現代
9　粗砂・小レキ・炭粒・焼土少し含む、暗褐色砂主体、しまりあり、水平ラミナ、にぶい黄褐色砂ラミナ少し入る、近代層か
10　暗褐色砂(粗砂含む)＋暗黄褐色砂30%(＋にぶい黄色砂)、近世層か
11　(にぶい褐色)～暗褐色砂(やや粗砂含む)、10・11層間(11層上部)に赤褐色砂(焼土砂層)あり(＋にぶい黄色砂)、近世層か(12～14層は近世墓覆土か)
12　暗褐色～暗黄褐色砂(＋黄褐色～黄橙色砂ラミナ少し入る)、しまりあり
13a　にぶい黄褐色砂～暗黄褐色砂60%＋浅黄橙色砂20%＋暗褐色砂少し、しまり(やや)甘い
13b　暗褐色砂＋にぶい黄褐色砂・にぶい黄橙色砂、しまりやや甘い
14　暗黄褐(～暗褐)色砂(＋浅黄橙褐色砂少し)、炭粒含む、しまり(やや)あり
15　にぶい褐色～暗褐色砂、しまり(やや)あり(15～16層は漸移的(15層がやや暗い)、いずれも遺物包含層)
16　暗黄褐色～(にぶい)褐色砂、しまり(やや)あり、15層より黄色気味
17　にぶい黄色砂(～黄橙色砂)30%＋にぶい黄褐色～暗黄褐色砂、17層以下は中世か
18　にぶい黄褐色(にぶい汚れた黄褐灰色)砂、しまりややあり、(にぶい)黄橙色砂少し含む18層から20層に向かって黄橙色砂が多くなる
19　にぶい黄褐色砂＋浅黄橙褐色砂少し(＋にぶい褐色砂微量あり)
20　浅黄色～にぶい黄色砂＋にぶい黄灰褐(～暗黄灰色砂)汚れ、しまり(やや)甘い
21　(浅)黄橙色砂(やや細かい砂)、ややしまりあり(20層より)
22　黄橙色～淡橙色粗砂、しまり甘い

表2　Ⅱ区壁面・1面下柱状土層図（Fig.7）注記

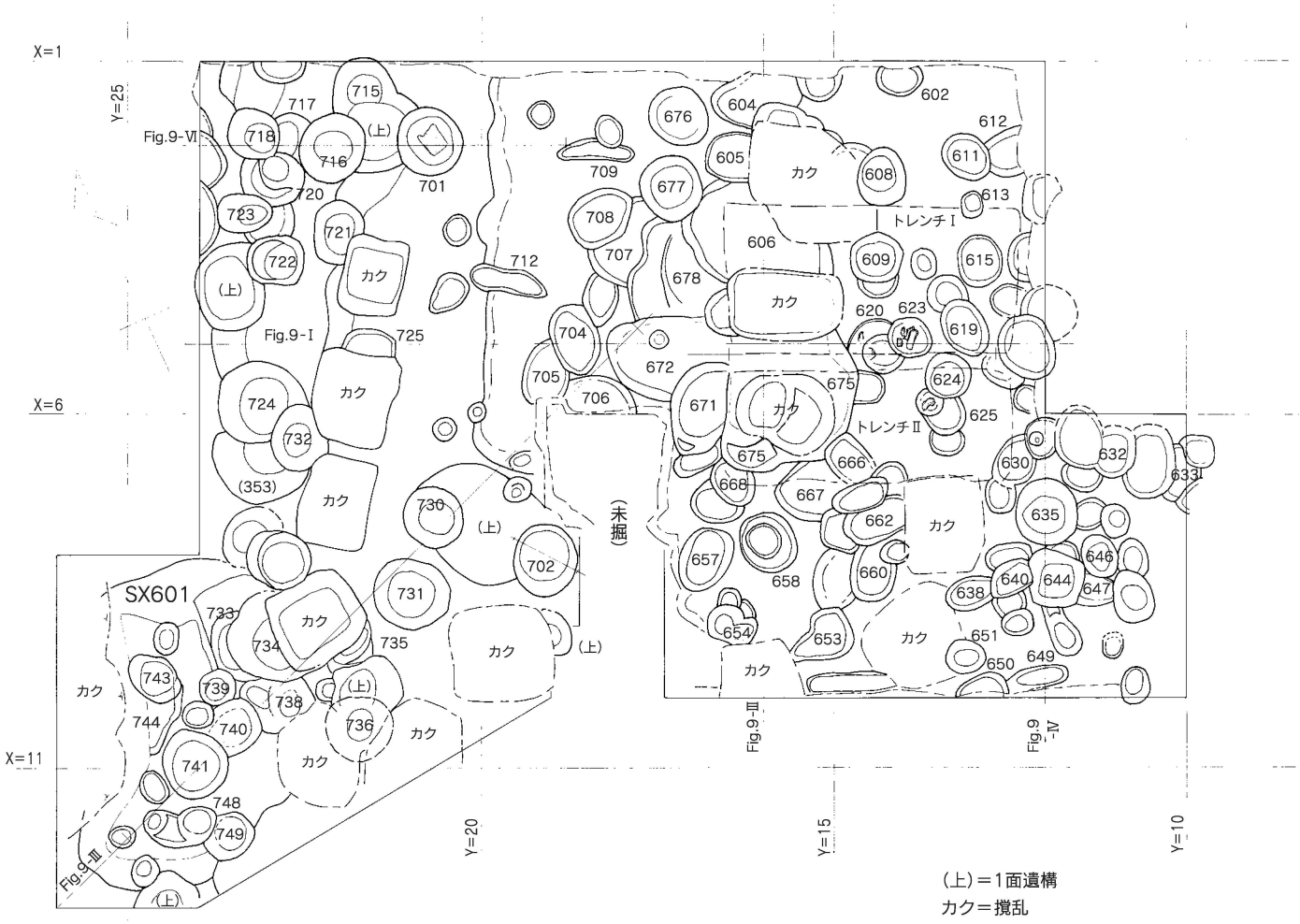


Fig.8　Ⅰ区西半１面下（２面）検出遺構平面図（1/100）

連するものかもしれない。いずれにしても、詳細な報告が期待される。

Ph.2　発掘調査作業状況（Ⅰ区西半，南西から）

60・62次および１次11ブロックにあった近世墓地は、近現代まで続いた墓地であり、隣接する妙徳寺を菩提寺とし、同寺が管理していた墓地であるので同寺について触れておく。妙徳寺（妙徳禅寺）は、禅師栄西（臨済宗開祖）が宋より帰国（1191年）した後にまず住んだ寺という伝えがあり（『筑前国続風土記』）、12世紀末までに建立されていたらしい。開祖は葉上という僧とされるが、建立の詳細は不明である。一時期寺が中絶したらしいが、応永年間（1394～1412年）に天性という僧が中興したとされ（この頃曹洞宗となる）、筥崎宮との関係も強く、近世には「今山」という山号を称し、博多にあった妙光寺（明光寺）の末寺だったという（『筑前国続風土記附録』、『筑前国続風土記拾遺』）。このように、由緒ある寺院として妙徳寺が中近世にわたって箱崎南西部に存在しており、周囲の遺跡の様相との対照が今後の課題となろう（妙徳寺の歴史については、今田正昭1992『福岡寺院探訪』海鳥社、などを参照した）。

本報告の62次調査区は、西側の調査区全体の約2/3を**Ⅰ区**とし（最初に調査）、残り東側約1/3を**Ⅱ区**として調査した（Fig.4，折込Fig.5）。遺構検出面は、これをどう設定するかについて調査時にまず苦慮しており、その設定事情（層位）と**落込み遺構SX000**の存在について、以下詳しく触れておきたい。

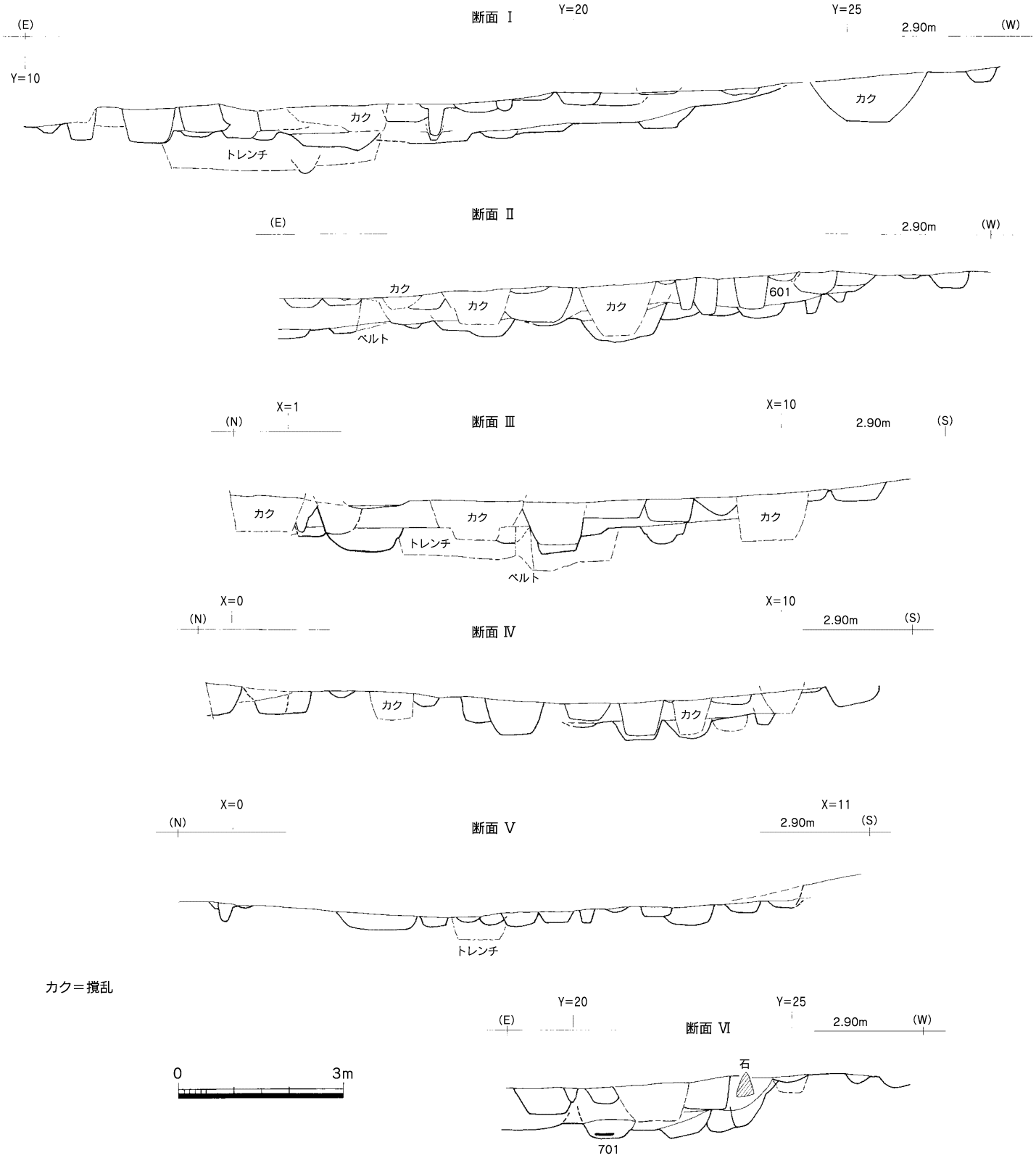


Fig.9　Ⅰ区断面図(Fig.5・6・8-Ⅰ～Ⅵ)（1/100）

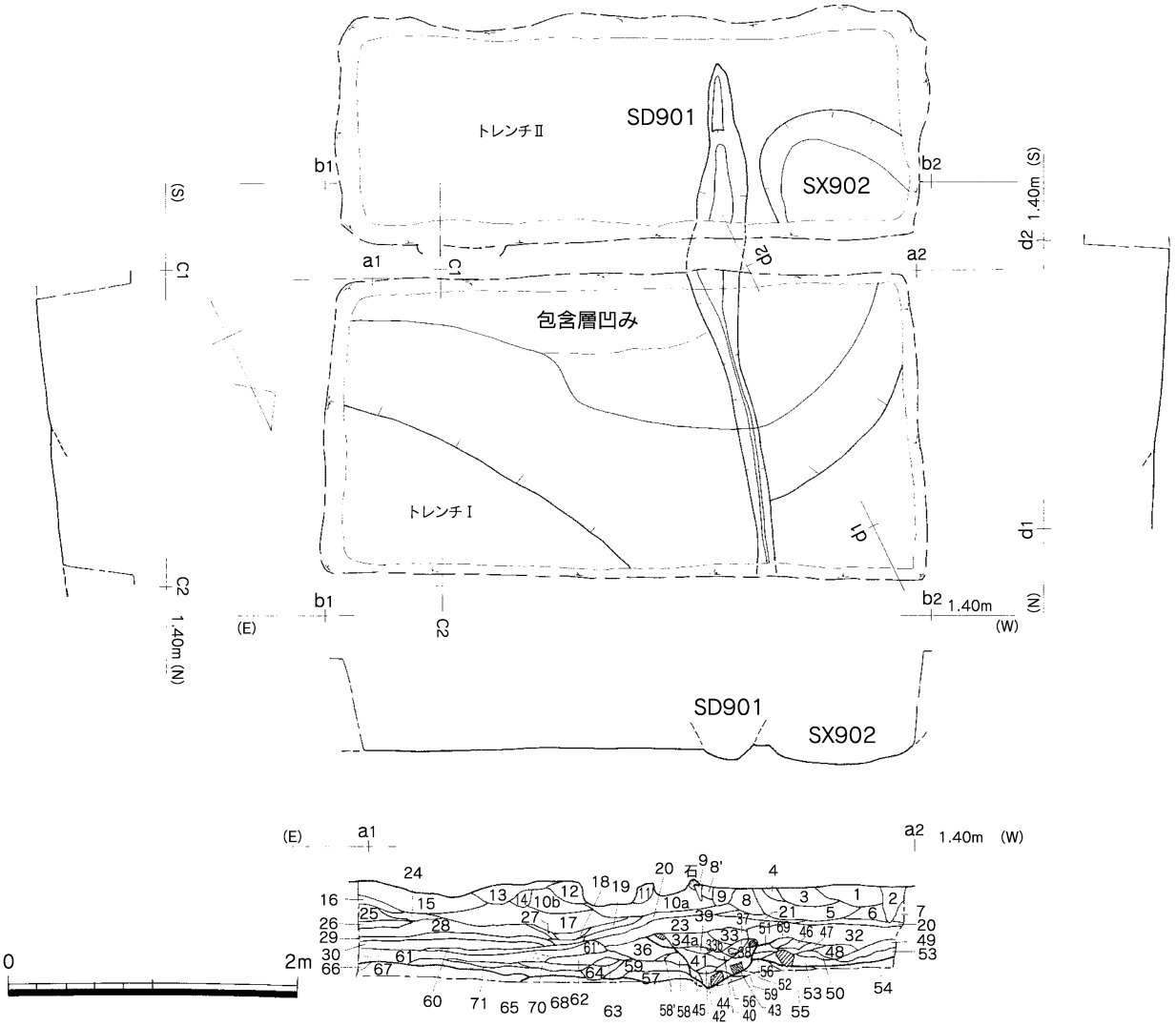


Fig.10　Ⅰ区西半中央２面下トレンチ実測図・土層図（1/50）

1　褐色砂（～にぶい褐色砂）、しまりあり、灰白（浅黄）色細砂10%、暗褐色砂一部（少し）含む
2　にぶい褐色（やや粗い）砂＋浅黄色砂60%、ややしまり甘い
3　にぶい褐色砂＋浅黄色砂＋浅黄灰褐（～にぶい黄褐灰）色粗砂50%、しまりややあり（1層より甘い）
4　褐色～暗褐色砂、しまりややあり＋にぶい黄褐色砂少し
5　明褐色（～にぶい黄橙褐色）砂＋灰白色～浅黄色砂30%、全体に粗砂やや含む、しまりやや甘い
6　にぶい褐色～（明）褐色砂＋灰白色～浅黄色砂20%＋黄橙色砂10%、しまりやや甘い
7　褐色～にぶい褐色砂＋灰白色砂10%＋（浅）黄橙色砂10%
8　にぶい褐色砂（やや粗砂）＋黄橙色砂10%＋浅黄色砂10%＋暗褐色砂少し
8'　褐色～暗褐色砂＋灰黄色～浅黄白色砂少し、しまりやや甘い
9　8層～8'層＋灰白色～浅黄色砂多（60%）
10a　にぶい黄褐色～にぶい黄色砂・粗砂若干含む、しまりやや甘い、灰白色砂斑状10%、10b層より褐色気味の土層
10b　にぶい褐色砂（10a層より明るい）、浅黄色砂20%以上
11　灰白色～浅黄色砂・粗砂60%＋にぶい褐色砂20%＋（浅）黄色～黄橙白色砂20%、やや粗くしまり甘い砂層
12　やや細かく、にぶい黄色砂＋にぶい黄色粗砂30%＋灰白色～浅黄色砂30%、しまり甘い
13　粗砂主体、（にぶい）明褐色砂・粗砂、しまりやや甘い～ややあり
14　13層＋褐（～暗褐）色粘質シルト少し（13層よりやや明るく黄褐色気味）＋浅黄色砂30%
15　にぶい黄褐色砂（・粗砂20～30%）＋にぶい（浅）黄（～にぶい黄橙）色砂、しまりややあり／甘い
16　鉄分やや沈澱あり、しまりあり、明褐色～橙褐色砂・粗砂＋にぶい黄色砂、上面に褐色砂あり
17　（15層よりやや暗い）にぶい黄褐色砂＋にぶい黄橙（～浅黄橙）色砂、しまりややあり、粗砂10～20%
18　しまり甘い、にぶい黄褐色砂＋浅黄色砂・粗砂50%
19　浅黄色砂・細砂＋浅黄褐色砂（・粗砂）40%
20　少ししまりあり、にぶい黄橙色～黄橙褐色砂、上面に暗褐（灰）色～暗褐色砂入る
21　しまりあり、褐色砂（～にぶい橙褐色砂）、下辺に橙色砂シルト（鉄分沈澱）
22　（下辺は21層と同じ鉄分沈澱、橙色砂層が薄く入る、）にぶい褐色～暗黄褐色砂、しまりあり
23　暗灰褐色（黒灰褐色砂含む）砂～暗褐灰色砂（・シルト砂）＋にぶい（浅灰黄～）灰黄色砂30%＋にぶい黄褐灰色砂10%（一部）しまりあり
24　25層より黄橙色気味、黄橙色～にぶい黄橙色砂（粗砂少し）、しまりやや甘い
25　浅黄色～にぶい黄灰（～浅黄灰褐）色砂・粗砂、しまり甘い
26　（やや鉄分沈澱か、）明黄橙色～にぶい黄橙色砂（・粗砂）、上面と一部に（暗）褐色砂含む
27　浅黄色～浅黄橙色細砂
28　29層とおよそ同じ層、炭粒含む、29層より少し明るい
29　28層とほぼ同じ（28層より少し暗い）、浅黄橙色砂＋浅黄色砂、（全体に粗砂主体）、しまり甘い（28・29層間はにぶい灰褐色砂の間層が一部あり）
30　にぶい褐灰色～にぶい黄灰褐色砂＋にぶい黄（～黄褐）色砂（水平ラミナで混合）、水平ラミナ堆積、全体に粗砂主体、しまり甘い
31　にぶい灰褐色砂（・粗砂）＋浅黄色細砂40%、しまり甘い
32　23層に近い、暗灰褐（～黒灰褐）色砂（一部シルト砂）＋灰黄色～灰色砂20%＋浅黄色砂10%以下、炭粒を含む、しまり（やや）あり
33　暗褐色～黒褐色砂・シルト＋にぶい灰黄色砂・粗砂10%＋褐色砂（酸化鉄・マンガン沈澱）10%＋レキ混入、しまりあり
34a　にぶい褐色～褐灰色砂＋灰白色～灰色砂30%＋暗褐色砂10%、しまり甘い
34b　34ａ層より暗い、暗褐灰色砂＋にぶい黄灰褐色砂30%＋にぶい黄色砂70%、しまりやや甘い
35　灰白色砂・細砂＋レキ混入＋暗褐灰色砂少し
36　（暗）灰黄色砂40%＋（暗）灰褐色砂・粗砂（上半に多い）、粗砂30%＋灰色砂20%
37　暗褐色シルト・砂＋暗灰黄褐色砂少し、しまりあり、有機物・レキ混入
38　暗褐色砂・シルト＋レキ混入、しまりややあり、黄灰褐色砂少し、有機物も含む
39　暗灰褐色砂＋黄橙色砂・粗砂＋黄灰色砂の混合ラミナ堆積
40　暗褐色～暗褐灰色砂主体、にぶい黄色砂・橙色砂少し、しまりややあり
41　暗褐（灰）色砂＋灰黄色砂＋にぶい橙色砂（・粗砂）＋灰色砂の混合ラミナ堆積（暗褐灰色砂が主体に＋灰色砂と橙（～黄橙色）砂多く混じる）しまり甘い
42　暗褐色有機質シルトブロック＋暗褐色砂＋にぶい灰黄色～にぶい黄褐色砂
43　暗褐色～黒褐色シルト（有機質泥土）＋浅黄色砂・にぶい暗褐灰色砂・にぶい橙色砂ガラ混じる＋レキ、しまりやや甘い・やや粘質
44　黒褐色粘質シルト（有機質含む）＋にぶい灰黄色砂少し、レキ入る、しまりやや甘い
45　しまり甘い、暗褐色砂＋浅黄色～にぶい灰黄色砂30%以上
46　浅黄色～灰白色細砂＋暗灰褐色砂（・シルト）、しまり甘い
47　暗褐灰色シルト砂20%＋暗黄褐色砂50%＋にぶい黄色砂20%、しまり甘い
48　しまり甘い、暗褐（～黒褐）色シルト（・砂少し）＋にぶい黄色～黄灰色砂（粗砂多）＋暗黄灰褐色砂20%
49　しまりかなり甘い、浅黄色砂主体＋にぶい（暗）灰黄色砂30%＋暗褐色砂20%
50　48層とほぼ同じ＋（鉄分沈澱）橙褐色砂入る、しまりやや甘い
51　しまり甘い、暗褐色～暗褐灰色砂＋浅黄色砂40%＋褐色砂20%
52　しまりかなり甘い、暗灰褐色砂＋浅黄色砂60%ラミナ堆積
53　レキ多く混入、粗砂主体、暗褐灰色砂50%（黒い感じ）＋橙褐色～黄褐色砂30%以上
54　にぶい黄色～黄灰（～浅黄灰褐）色砂（粗砂若干含む）、しまり甘い
55　54層（にぶい黄灰色砂）に鉄分沈澱、橙褐色砂少し＋暗褐色（～暗灰色）シルト砂ブロック入る
56　灰色～灰黄色砂・粗砂＋（鉄分沈澱）橙褐色砂（粗砂含む）＋暗灰色（～灰青色）細砂少し
57　しまりかなり甘い、54層と同じ（にぶい黄色～黄灰色砂）
58　58層上部に暗褐色（シルト～）砂多い（黒褐色に近い）、58'層は暗褐色砂＋にぶい褐（～暗褐灰）色砂＋にぶい黄灰色砂少し、しまりややあり
59　59　灰白（～浅黄）色砂＋にぶい灰褐（～浅暗灰褐）色砂40%、しまり甘い
60　薄い厚みの層、酸化鉄沈澱か、にぶい黄橙色～黄橙色砂・粗砂、西側は細砂多く東側は粗砂多い（、東側はにぶい黄褐色～にぶい黄橙色砂）
61　しまり甘い、にぶい黄色砂（粗砂主体）
61'　（61層西側）61層の中で明るい色、にぶい灰黄色砂主体＋にぶい黄灰褐色・浅黄色砂多＋にぶい淡褐色砂少し
62　にぶい黄褐色砂＋黄灰色砂＋にぶい褐色砂（粗砂混じり）の水平ラミナ混合層（61・62層間に暗褐色砂少し含む）
63　しまりやや甘い、にぶい黄褐灰色～浅黄灰褐色砂、酸化鉄沈澱あり
64　にぶい褐色～褐灰色砂（・シルト砂）＋浅黄色砂20%、泥質シルト含む、しまりやや甘い～ややあり
65　粗砂、浅黄橙色砂＋にぶい黄灰色砂（＋にぶい褐灰色シルト砂少し）、しまり甘い
66　にぶい褐灰色シルト・砂＋にぶい黄灰褐色～にぶい黄色砂、しまりやや甘い
67　粗砂多い、にぶい黄灰色砂＋（浅黄～）浅黄橙色砂＋にぶい黄灰褐色砂
68　浅黄灰色～浅黄橙色砂（粗砂少ない）＋鉄分沈澱橙色砂、暗褐色砂ブロック微量
69　暗黄褐色砂50%＋にぶい黄色砂30%＋黒褐色シルト少量、しまりややあり
70　下部に酸化鉄沈澱する黄褐（～橙褐）色シルト砂＋（暗）褐色砂（・シルト少）＋にぶい黄灰褐色砂（・粗砂）
71　70層から続く、（暗褐～）にぶい褐色砂（・シルト少）＋にぶい黄灰褐色砂・粗砂

表3　Ⅰ区西半中央2面下トレンチ土層図（Fig.10）注記

Ph.3　Ⅰ区調査終了状況（西から）

Ⅰ区の表土掘削は西側から東側に向かって行った。最も西側では、近現代の盛土層、近世の包含層を除去したGL－90㎝前後の標高2.2～2.4mで砂丘砂となり遺構検出面としたが、調査区西端から4～5m以東では同じ高さでは砂丘砂上面とはならず、中近世遺物を包含しつつ近世（～近代？）の甕棺をはじめ無数の土坑が検出できる包含層（暗灰褐色砂質土～暗黄灰色砂）が検出された。この層の下に砂丘面が落込むものと考えられたが、その上の当該包含層は中世遺物も多量に含まれ、この時点では中世の遺構面でもある可能性も考えられたため、この上面を少し下げたレベルを遺構検出面（Ⅰ区西半１面）とした（Fig.９参照）。このレベルを検出面としたのは、調査区の任意座標上のy=12前後以西であるが、検出面の標高は西側（y=24前後）では2.0m前後、東側では1.6m前後である。なお調査区南辺は比較的高く砂丘面を遺構面とし、y=12以西では1.9～2.1mで砂丘面となり、南から北へも砂丘が落ち込んでいる。また調査区北側壁際は1.7～1.8mであり、調査区中央が最も低く、この包含層上面（１面）は北側にも立ち上がることが分かった。次にy=12前後より東側（Ⅰ区東半）の表土掘削時には、Ⅰ区西半の遺構検出と攪乱掘削作業を始めており、Ⅰ区西半で表土剥ぎを止めた包含層上面層では近代以降の掘り込みが多く残ること、中世遺物も僅かに含む可能性があるが、検出遺構の大半は近世遺構（および近代以降の攪乱）であると判断されたことから、調査期間などを考慮して、Ⅰ区東半ではやむを得ず重機掘削の深度をさらに下げて砂丘上面を遺構検出面とした（Fig.9参照）。したがって、「Ⅰ区東半１面」はⅠ区西半１面の大部分とは層位が異なり、「Ⅰ区西半中央」に設定した「２面」（後述）とほぼ同一層位となっている。**Ⅰ区東半**の検出面（砂丘上面）標高は、中央部で1.1～1.2m前後、Ⅰ区東端では標高1.7m、北辺では1.6～1.8m（Ⅰ区北東端は2.0m）、南辺はやはり高くなり1.7～1.9mとなる。

このように、Ⅰ区の大半は東側（Ⅱ区SX830が東端となる）、南辺、西側の砂丘上面が高く、これらに囲まれた中央が大きな落込み状（**SX000**とする）になっていることが判明した（**Fig.4**）。さらにⅠ区東半北辺でも砂丘層上面が立ち上がり始めるので、この落込みは東西27m、南北14mないしそれ以上の範囲となる（北側は、隣接する60次まで延びるものか不明だが、62次北辺よりも少し延びるものと予想する）。

このSX000は自然地形とすれば、砂丘の中での落込みとしては不自然であり、人為的遺構（掘り込み）

Ph.4　ST02（左）～ST05（右）近世甕棺墓検出状況（東から）

Ph.5　ST12（左）・ST11（右）近世甕棺墓検出状況（南東から）

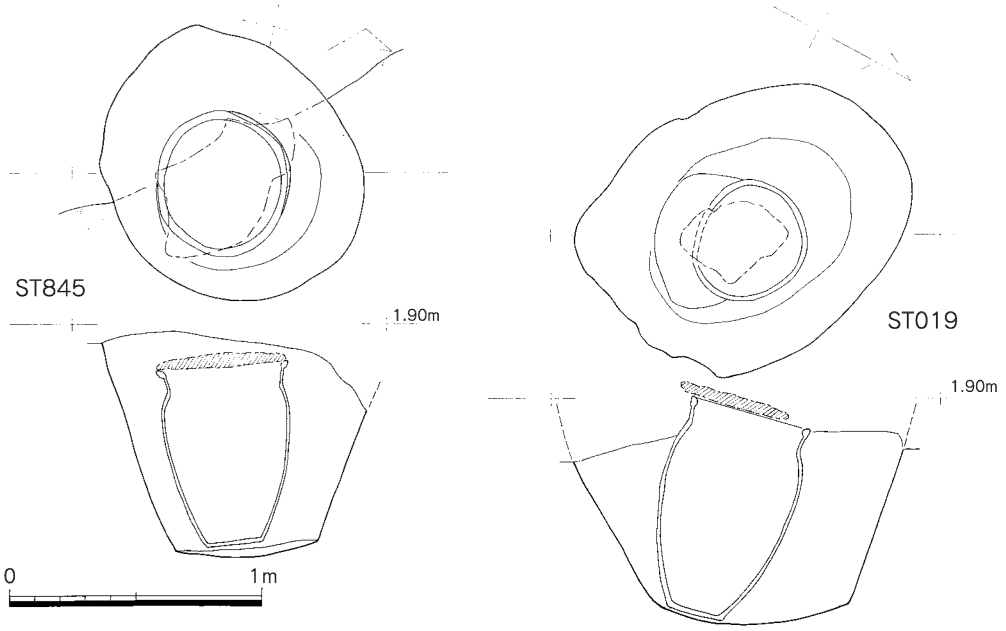


Fig.11　近世甕棺墓ST019,ST845実測図（1/30）

の可能性が高いと考えられる。掘り込み上面の層位が不明確である難点があるが、この遺構の東端と考えられ、埋没後の近世遺構の掘り込みが少なくプライマリーな部分が多い**SX830**（後述）の出土遺物を参考にすると（Fig.40）、12世紀後半前後以降に形成された可能性がある（Fig.40－5の土師器坏は13世紀末～14世紀初めの可能性があり、埋没開始の下限を示す）。SX830をその一部とするSX000を大きな掘り込み遺構と考えた場合、周囲が砂地であり遺構縁辺の埋没は早いであろうから、SX830出土遺物は埋没初期の時期を示す可能性がある。後述のように**Ⅰ区下部トレンチ**（東半１面下、西半２面下）中に13世紀前半の遺物が僅かに含まれ、その上部（Ⅰ区基盤の河川堆積層上部）に風成砂が堆積して砂丘が成長する一定期間があり、その後の13世紀後半～末に掘り込まれて形成されたと見ておきたい。掘り込みとした場合はその性格は不詳であるが（ちょうど中世都市箱崎が大きくなる時期であるので、一案として他地点の埋め立て・整地のための土砂取り場であったという可能性もある）、その後の埋没過程で中世遺物を含む堆積（包含層形成）があり、埋没過程で少数の中世遺構も形成され、埋没がかなり進行した近世前期以降にいたって近世墓地が展開したものと考えられる。近世墓の分布はこのSX000におよそ一致しており（SX000外にも近世墓は展開するが、分布数が激減する）、後代の土地区画に影響を与えるような地形の凹みであったのであろう。SX000を人為的遺構の可能性が高いとしたが、あるいは砂丘の縁辺が自然の作用で浸食された可能性も想定しておくべきかもしれない。その場合、ちょうど地下

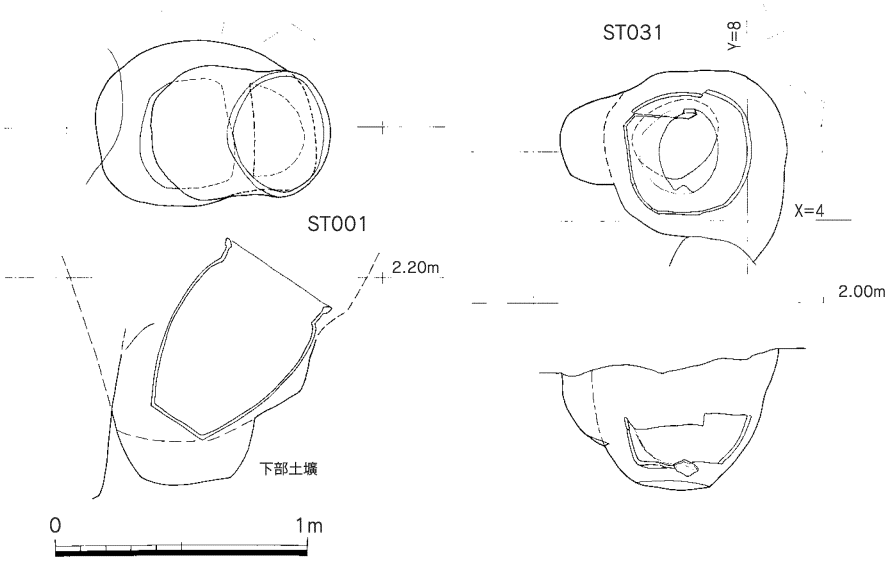


Fig.12　近世甕棺墓ST001,ST031実測図（1/30）

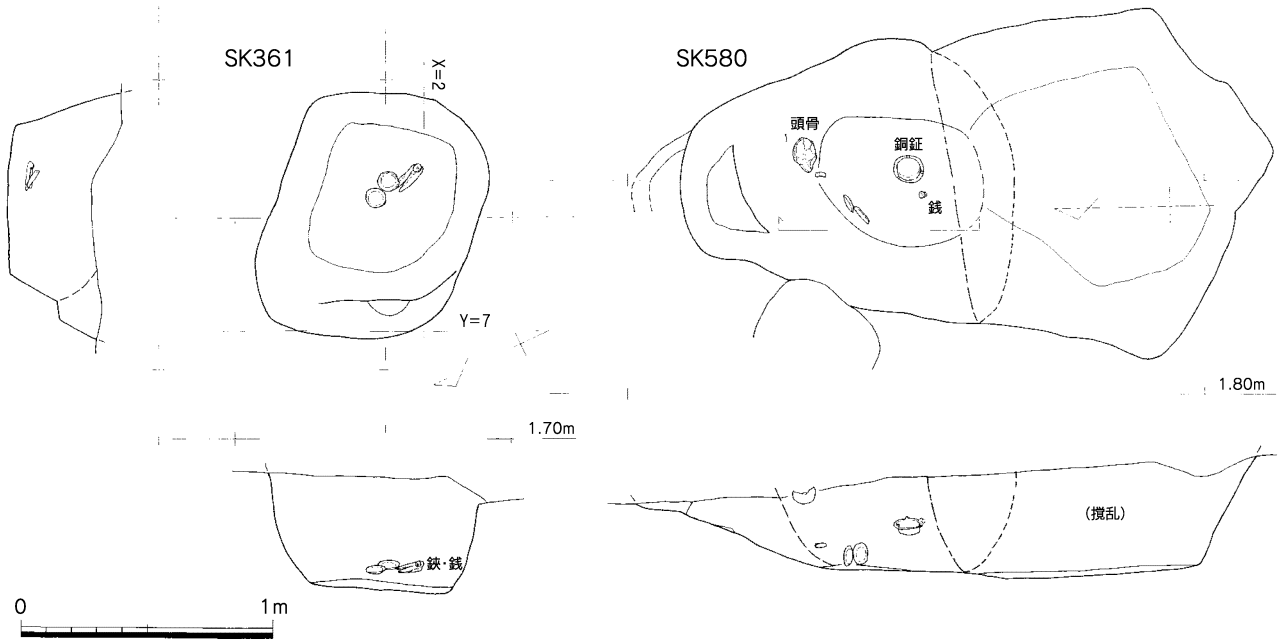


Fig.13　近世土壙墓SK361,SK580実測図（1/30）

鉄建設（１次調査）ライン（このライン自体は建設時の任意のものである）の西側に沿うような形で一定幅が北西側から浸食されたことになろう。しかしその場合の自然的要因が不明であり、その可能性は低いと考えておく（地質学的な地層観察をしていないのでこの判断は不安もある）。またSX000ついては、隣接する60次に続いているものかどうかも問題があり、その様相によってもその性格が判断されよう。

次に**Ｉ区西半**であるが、上記のSX000の範囲内で、大半が近世遺構であった範囲について、グリッドを設定してＩ区東半調査面と同じレベルまでさらに下げたのが**「Ｉ区西半（中央）２面」**である（Fig.8、「1面とのレベル関係はFig.9参照)。この面でも近世遺構が多かったが、中世遺構も検出している（中世遺物も多くなっている）。この範囲（面）での地山砂は、Ｉ区西側・南辺・東辺で認められる風成砂丘というよりは、一部レキを含んだり、粗砂を含んだりする複雑な堆積で、基盤は河川堆積と考えられる（Fig.10)。Ｉ区東半の１面下ではレキはほとんど含まないが、一部に粗砂層がみられ、やはり基盤は河川堆積であろう(Fig.6)。Ｉ区西半２面検出中に、「地山」砂中から一部に遺物の出土が認められたので、中央に広めにトレンチを設定し、土層を観察した（Fig.10)。自然の凹み（古河川の埋没過程か）の上に小溝が検出されたが（**SD901**)、人為的な溝であるかは不明である。遺物もあまり認められず、この面（トレンチ下部）での調査面設定は行っていない。なお自然埋没過程の混入と思われるが、「２面」下部の砂層中に、主に12世紀後半までの遺物があり（Fig.41－2～7)、一部に13世紀前半がある（Fig.41－1)。同様にＩ区東半１面下トレンチ中でも13世紀代の可能性がある遺物が僅かに含まれ（Fig.41－30)、遺構出土の混入可能性を完全には排除できないが、現状では13世紀前半までにＩ区部分の基盤層が形成されたとみておきたい。

次に反転後の**Ⅱ区**（調査区東半）であるが、近現代盛土層、近世包含層を除去した砂丘上面を遺構検出面とした（Fig.7)。SX000の東端であるSX830の外縁線内外に近世墓が若干分布する他は、Ｉ区と異なり近世墓をはじめとする近世遺構の分布は少なく、明らかに近代以降と考えられる攪乱が多い他は、遺構の比較的多くは中世であった（主に中世前期)。Ｉ区／Ⅱ区の境界は、調査時の偶然であるが近世墓地の分布に明確な差があり、明瞭なコントラストをなす（折込Fig.5、PL.1)。また、検出した中世遺構の密度も東側隣接地の55次Ｉ区に比較して薄く、これは後世の土地区画ごとの土地利用による削平度合の差異によるものであろう（Fig.3)。Ⅱ区の検出面レベルは（砂地が軟らかく、実際の砂丘上面より検出作業時にレベルがかなり下が

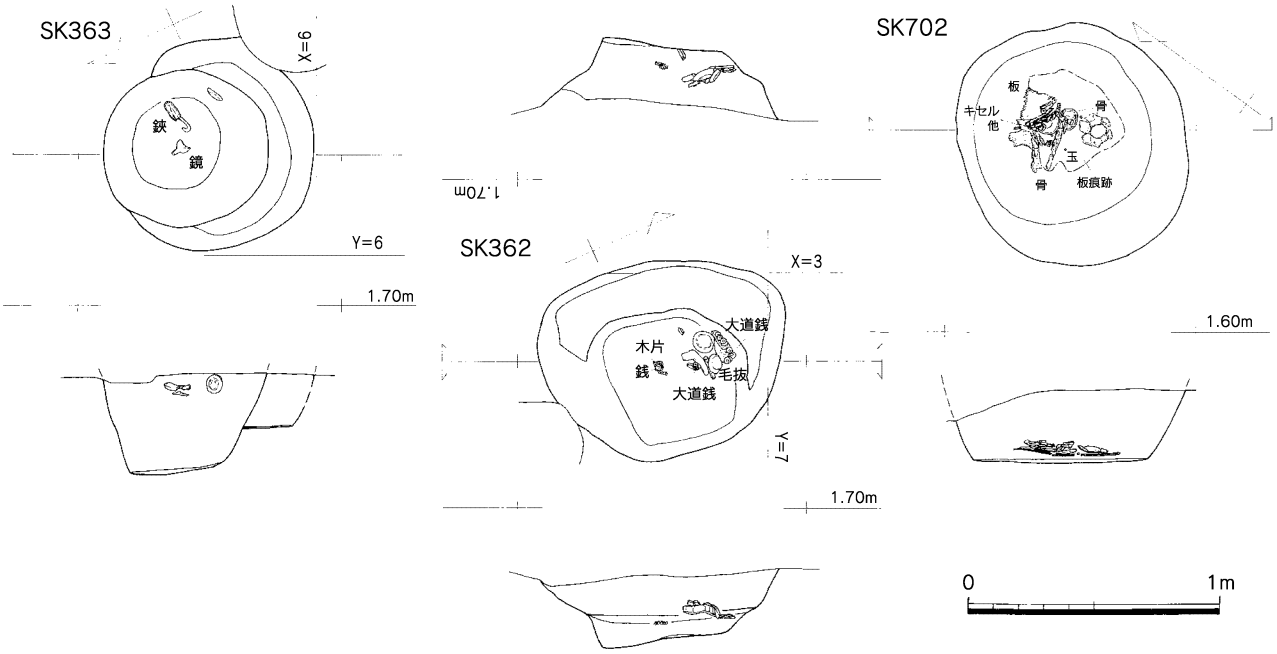


Fig.14　近世土壙墓SK363,SK362,SK702実測図（1/30）

ってしまっているが、そのレベル）、西辺で1.8～2.0m、東辺で2.1～2.4mである。東側の砂丘上面レベルがやや高い、もしくは削平度合がやや少ない状況と考えられる。

2．調査の経過と概要

1）調査の経過

発掘調査の開始は、年度当初は2008年6月中を予定していたが、墓地移転工事（前年度末に行われた60次調査区の敷地に墓地を改葬・移転）の工程の都合により、再協議の結果7月中より行うことになった。

調査は、2008年7月15日よりⅠ区（対象地西半）の重機による表土掘削から行った（～7月18日）。改葬された近現代の墓がある表土層より深く存在する陶棺（甕棺）を含む近世墓が多く検出された。無数の遺

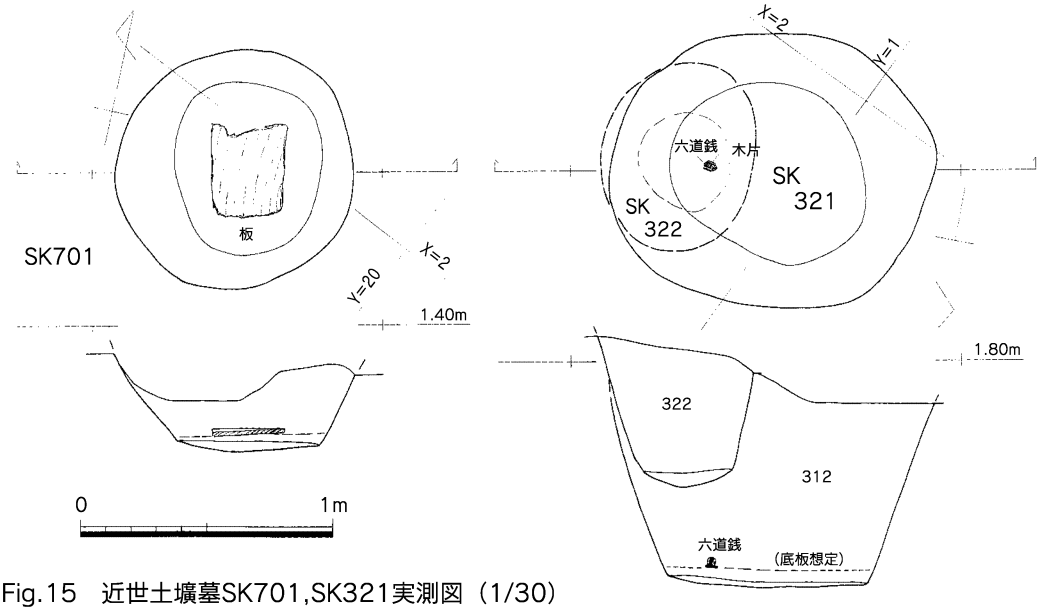


Fig.15　近世土壙墓SK701,SK321実測図（1/30）

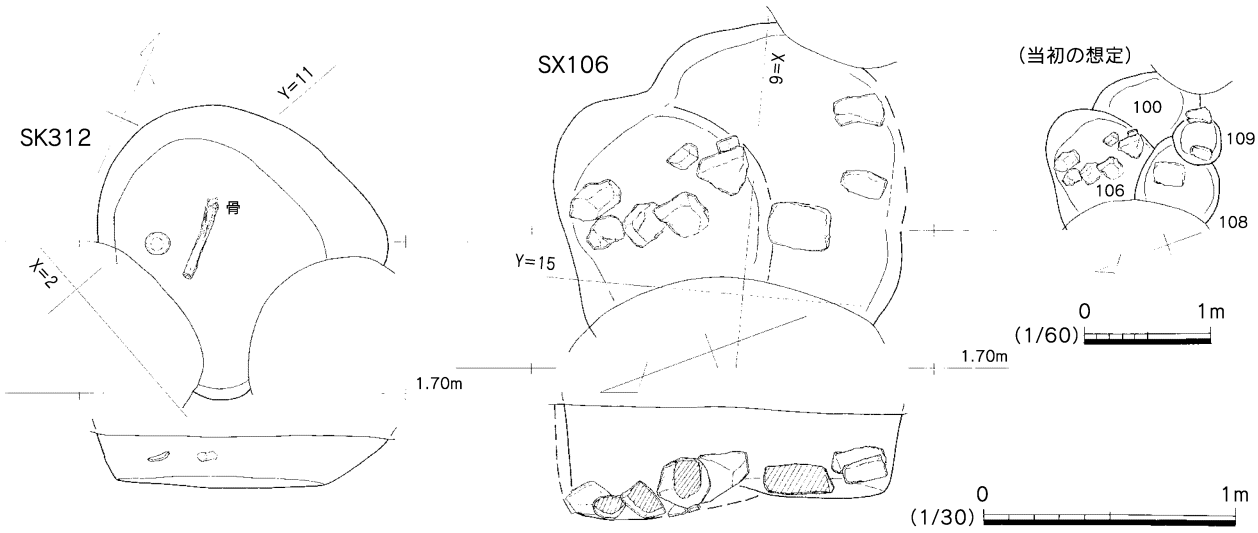


Fig.16　近世土壙墓SK312,SX106実測図（1/30）

構があり、遺構検出や遺構掘削にかなりの手間ひまをかけることになった。8月に入り、台風の接近や、特に「ゲリラ豪雨」が度々あった。遺構面が砂地で脆く、そのたびに雨で調査区の壁や遺構が崩れ土砂が流失して掘削部分に溜まってしまうことがあり、遺構の再掘削を含む復旧作業や土砂流失や崩落の防止作業に時間を割くことが多くなった。これにより全体の調査工程に大幅な遅れが生じてきたため、当初計画の9月末での調査終了が困難な情勢となった。これを承け関係部局と協議し、10月中頃まで調査期間を確保することで合意を得た。9月初めまでに大半の遺構を掘削し、9月9日にⅠ区の全体写真撮影（空撮）を行った。１面の図化記録作業を9月10日前後まで行い、その後にⅠ区西半２面や下部トレンチの調査を行った。９月18～19日に重機による反転掘削を行い、Ⅱ区（対象地東半）の調査を開始した。Ⅱ区の遺構密度はⅠ区に比べ著しく低く、近世墓の密集も無く、作業は迅速に進んだ。10月上旬にはⅡ区の調査作業はほぼ終了し、10月3日に全体撮影（空撮）を行った。記録作業を終えた後、Ⅱ区の埋め戻しを10月9～10日に行った。その後、遺物洗浄を現地にて行い、10月15日に機材を撤収して発掘調査を終了した。

２）調査の方法と概要

（１）調査の方法

調査は表土掘削と近世包含層の一部の掘削は重機で行った。以下の掘削作業は人力で行った。調査区の杭打ち（任意座標設定）と国土座標移動、対象地周辺測量は光波測量機を用いた。遺構の実測は手作業で行い、調査区内に割り付けた1/20図の作成を基本とし、一部の個別遺構について1/10図ないし1/5図を作成した。その他、調査区壁やトレンチの土層図を作成した。また近世遺構については、明らかに近世の遺構のみである遺跡の場合には、重要なもの以外はふつう調査対象としないため近世遺構は必ずしも調査対象にしなくてもよいという話もあったが、本調査においては、面的層位的に中世遺構と明確に分離できないこと（掘ってみないと分からない）、近世遺構および包含層にも中世遺物が多量に入っていること、さらに六道銭や銅製品・鉄製品などの副葬品の出土状況が良好に遺存する土壙墓が認められ、地域の歴史上重要な部分があると判断できることから、結果的に調査の対象としている（先行する隣接の60次調査も同様の理由で調査対象としている）。ただし、その掘削（調査）の精粗や調査対象とするか否かや遺物取り上げについては個別遺構ごとに取捨選択している（特に甕棺）。近世遺構の大半を占める近世墓の扱いであるが、甕棺（陶棺）については事前協議に基づいて以下のようにしている（隣接する60次調査もほぼ同様である）。甕棺墓に多く遺存していた人骨については、妙徳寺が工事を発注している石材業者に引き取ってもらい、同寺で荼毘・

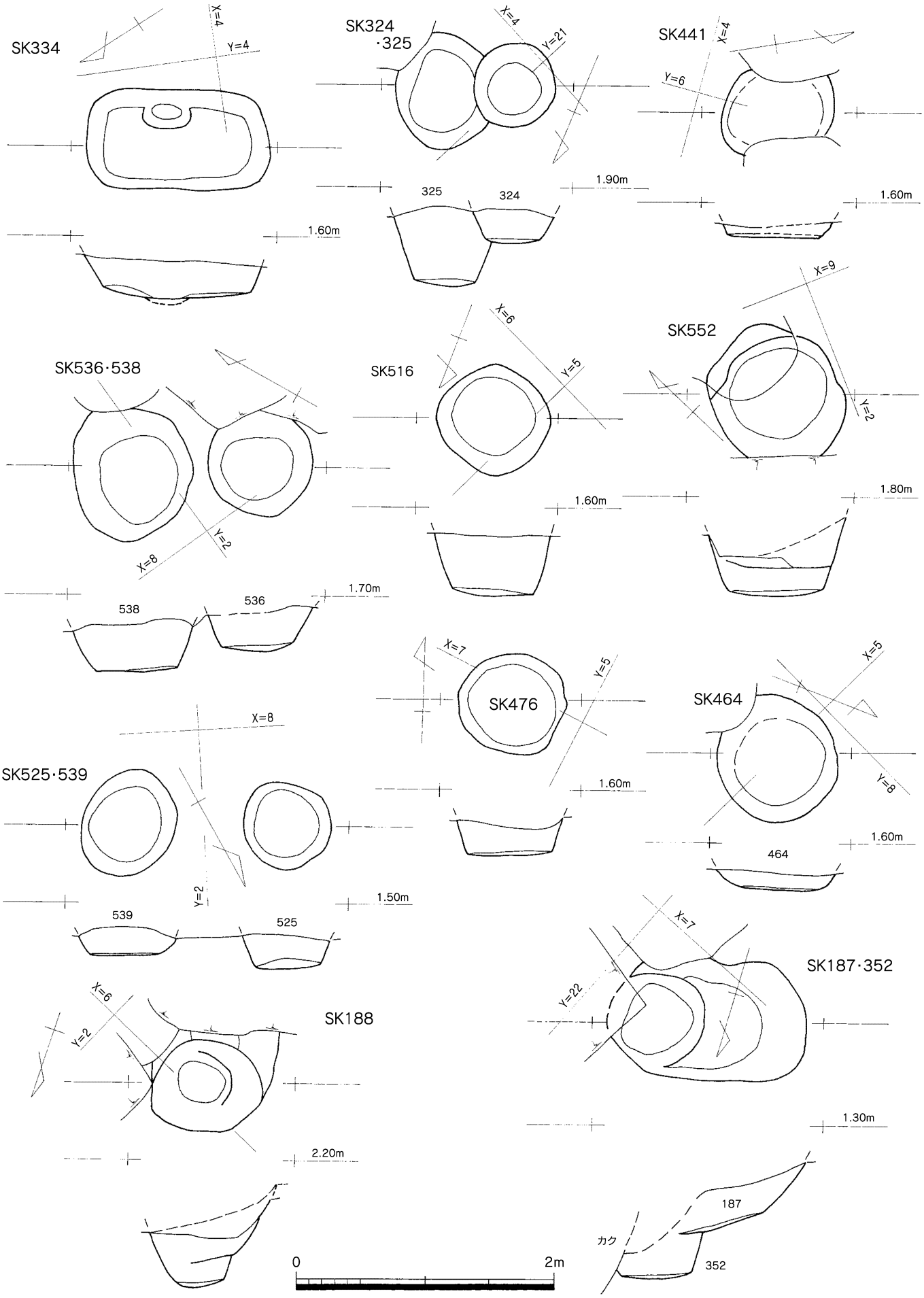


Fig.17　近世土坑実測図(1)(1/40)(SK334,SK324·325,SK441,SK536·538,SK516,SK552,SK525·539,SK476,SK464,SK188,SK187·352)

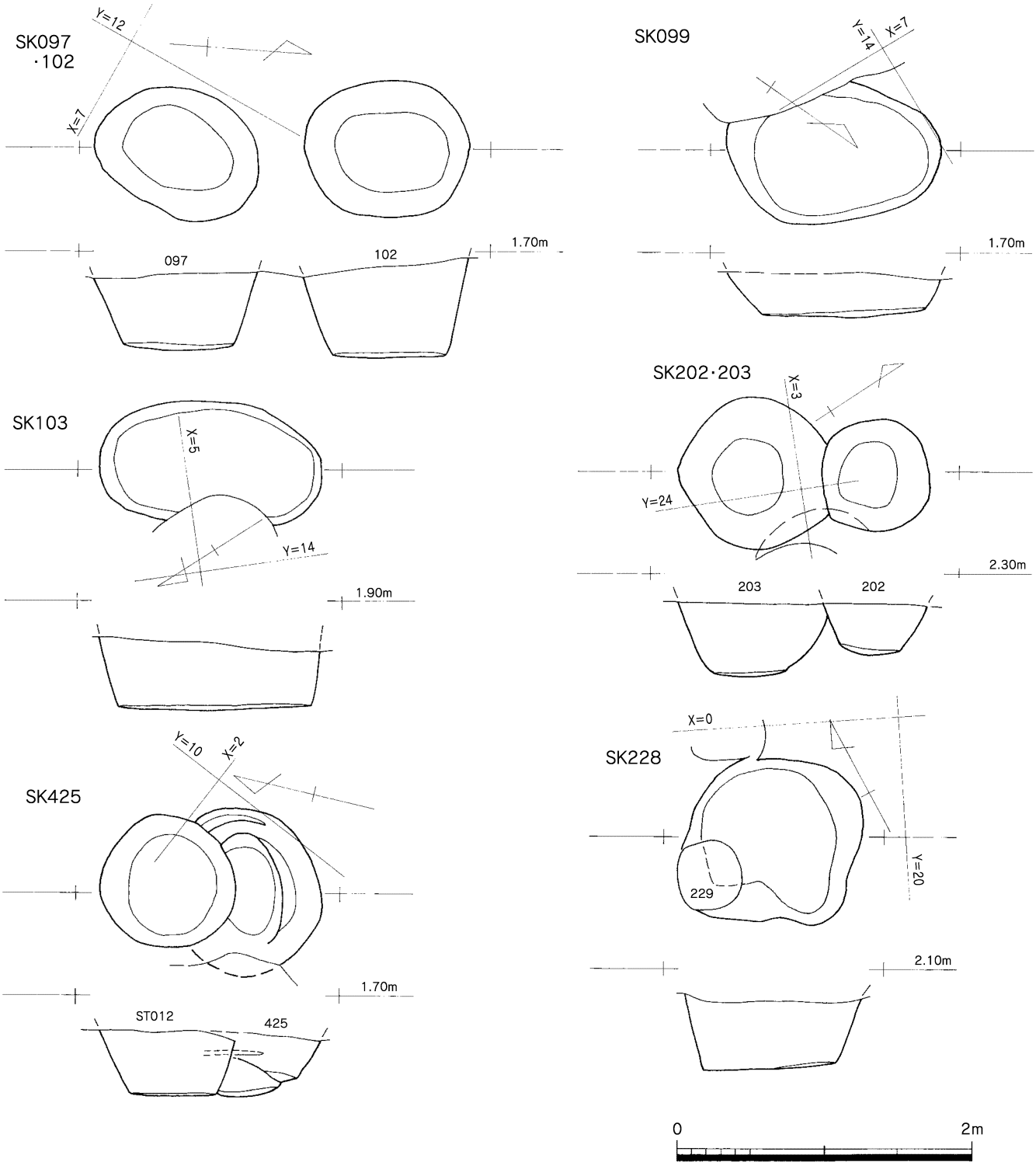


Fig.18　近世土坑実測図(2)(1/40)(SK097·102,SK099,SK103,SK202·203,ST012·SK425,SK228)

供養していただいている。また甕棺（陶棺）自体も、遺存が特に良い数個体を遺物として取り上げた他は、これも事前協議に基づき同業者に処分をしていただいていることを断っておく。また人骨については、主に甕棺内から出土して現場で明確に人骨と判断できたものは上記のように取り扱ったが。それ以外については、ひとまず遺物（動物遺存体）として取り上げた後に、分類・報告している。

（2）調査の概要

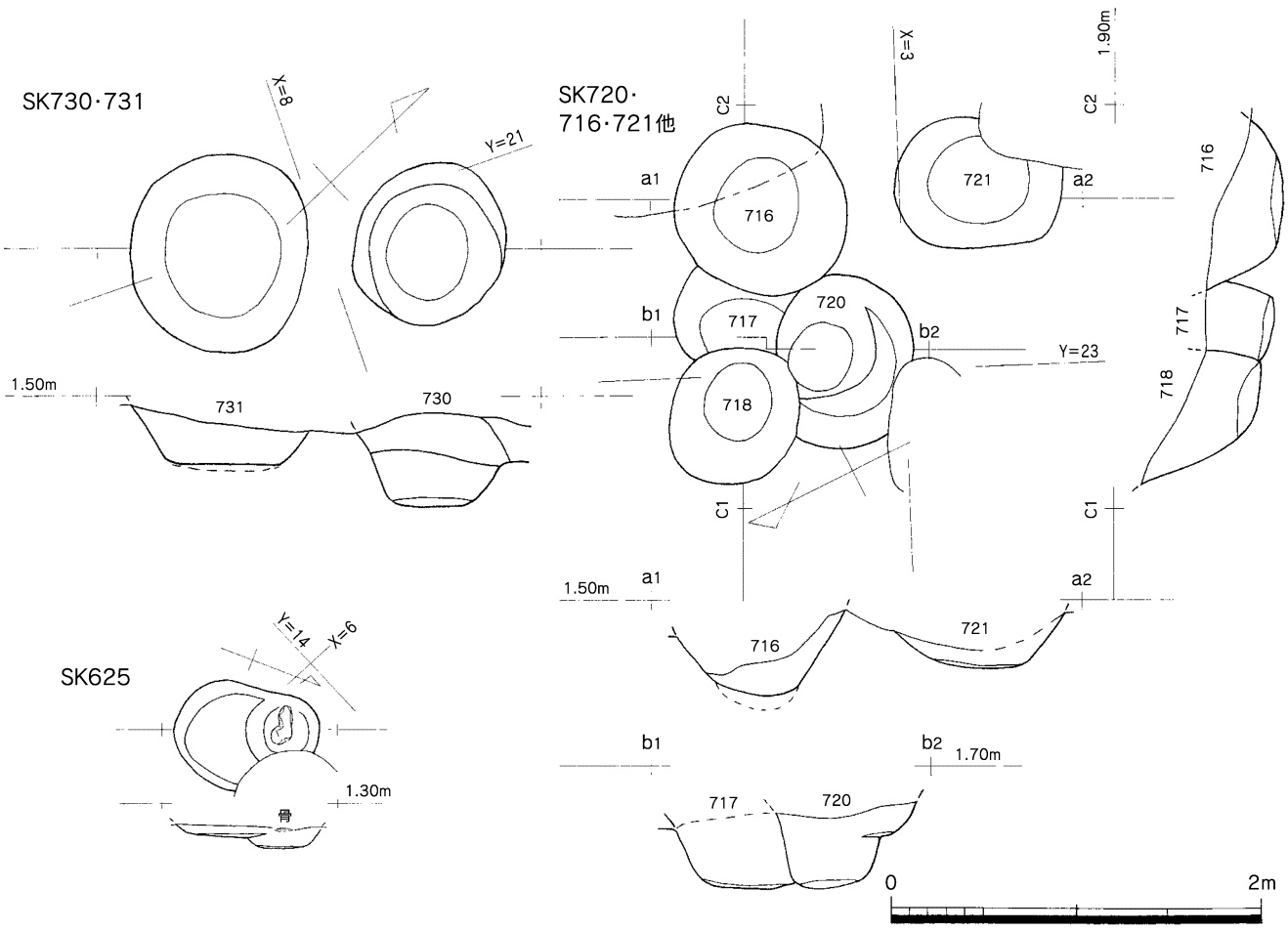


Fig.19 （中世～）近世土坑実測図（1）(1/40)(SK730·731,SK716·718·720·721,SK625)

調査区西側2/3の**Ⅰ区**ではきわめて濃密な遺構群を検出した。Ⅰ区は大半が近世遺構、とりわけ近世墓が大部分を占め、遺構の重複が激しい。新しいもの（18世紀末以降一部近代前期か）は肥前系陶器の甕棺墓だが（少なくとも40基前後）、これらに切られる無数の土壙墓群がある。甕棺（陶棺）は下半部や底部しか残らないものも多く、一部併行する時期も想定されるが、総体として相対的に土壙墓群より新しい傾向が考えられる。土壙墓（桶棺）には銅銭（六道銭）や銅鉦・和鏡・煙管などの銅製品、和鋏・毛抜・刀子などの鉄製品を副葬するものも見られた。土師器皿のみを副葬するものも多く（完形小皿2枚のものが多い）、ごく一部は陶磁器容器類を副葬する。副葬品が明確でない遺構は中世遺物も含まれるため、近世と中世の遺構を画然と分離することは難しく、近世墓以外にも不明確ながら中世の土壙や柱穴も僅かにあるようである。**Ⅰ区西半２面**でも、上面で不明であった近世土壙墓を検出した。下面検出遺構の多くも近世遺構だが、中世遺構が確実に存在する。**Ⅰ区東半**は1面での調査のため、近世墓（大半が土壙墓）と少数の中世遺構が密集して混在している。近世墓は、調査区の西端と北端では分布が急に疎らとなり、砂丘の黄褐色砂上面が高くなる位置（落込みSX000の周縁部）になると近世墓の分布が激減している状況である。**Ⅱ区**では近世墓はごく僅かとなり、近代以降の撹乱が多いが、遺構密度が薄くなる。中世遺構としては溝2条や井戸1、土壙墓1、土坑1、柱穴などを検出した。溝は平行して走行し、道路側溝の可能性もある。土壙墓や井戸は12世紀後半～13世紀前後か。柱穴は調査区北東部に多い。Ⅱ区西端には、Ⅰ区の落込みSX000の立ち上がりが検出された。

遺物は、12世紀以降の中世から近世までの土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器などのほか、銅製品（銅銭、和鏡、煙管、銅鉦など）、鉄製品（和鋏、毛抜、刀子、釘など）、木製品（近世墓桶棺の底板遺存）、動物遺存体（現場で判別できなかった人骨片を含む）、ガラス玉などがあり、

総量パンケース50箱分が出土している。

3．検出遺構

1）近世甕棺墓（Fig.11・12）

近世後期以降の甕棺墓（陶棺）は、40基前後（攪乱に甕棺片が集中して廃棄されたものを含む）検出した。甕棺墓の分布には（Fig.4）、列状に分布するものや2棺並立のものがあるなど（Ph.4・5）、何らかの墓域設定の法則がある可能性もある。多くは上半部が欠失していたり（Ph.4･5）、底部のみの遺存のものも多い。上から下まで残っていた甕棺（一部欠損を含む）は5基のみであり、そのうち**ST12**（Ph.5）を除く4基を廃棄せずに取り上げている。甕棺墓は多くの場合土壙墓を切っており、その逆の確実な例がないため、少なくとも近世幕末までの間においては、総体として土壙墓→甕棺墓の変遷が考えられる（一部併行する可能性はある）。取り上げた4基の甕棺（**ST845,ST019,ST001,ST031**、Fig.11･12）は、1基が土師質の甕棺であるが（ST031）、他の3基は肥前系陶棺であり、その編年的位置から18世紀後半でも末頃を上限とし、19世紀前葉頃までのものであろう（近世甕棺編年は下記文献を参考とした。下村智1994「北部九州の近世墓に使用される棺甕について」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室　龍田考古会）。これら3基（およびST012）は、遺存状況や墓壙深度から本調査区で比較的古い甕棺と考えられるが、逆に言えば他の甕棺の時期もこの頃を上限とするであろう。周辺地域では、博多部では17世紀中頃から、それ以外では17世紀末～18世紀前葉から甕棺葬が一般化するとされるが（下村智1994）、本調査地点での甕棺葬の採用は比較的遅いと考えられ、箱崎地区全体に一般化できるかという問題もあるが、何らかの地域的歴史背景が存在するであろう。以下、各甕棺について記述する。

ST845（Fig.11，PL.11－1）　Ⅱ区北西側で検出。棺蓋は、木蓋は遺存しないが、その上の板石が遺存していた。径110㎝、深さ90㎝の墓壙が遺存し、陶器甕（Fig.30）はほぼ直立して埋置している。

ST019（Fig.11，PL.10－7）　Ⅰ区東半で検出。ST845と同様に棺蓋の板石が遺存する。110×140㎝、深さ70㎝の墓壙が遺存する（墓壙上部は不明）。陶器甕（Fig.29）は15°傾いて埋置されている。

ST001（Fig.12，PL.10－5）　Ⅰ区西側で検出。墓壙上半は不明で、下半部の70×90㎝、深さ45㎝の墓壙が遺存する。これより下部の凹みは別の古い土壙墓であろう。陶器甕（Fig.28）は35°傾いて埋置されている。銅銭3枚と和鋏・毛抜が出土している。

ST031（Fig.12，PL.10－6）　Ⅰ区西半中央で検出。墓壙上部から棺底部の一部まで攪乱が入り、棺上半は破片となって落込み、棺底部の一部が欠損する。攪乱は改葬の掘削であろうか。棺甕は他と異なり土師質である（Fig.31）。棺甕はほぼ直立して埋置されている。銅銭（寛永通寶）4枚が出土。

なお上記の棺甕そのものについては、「4．出土遺物」の項で報告する（Fig.28～31）。

2）近世土壙墓（Fig.13～16、およびFig.17～20）

Ⅰ区において無数の近世土坑を検出したが、その大部分は土壙墓であろう。しかしながら「墓」と確実に推定できるものはその一部である。以下、人骨片が出土したもの、六道銭・鉄製和鋏・鉄製毛抜など近世墓の副葬品として通有な遺物の出土や（完形土師器小皿のみでは不確実とした）、棺桶（棺板）の痕跡がみられたもの等について土壙墓として報告する。また遺構は非常に多いので、副葬品が出土していたり、遺構の遺存度が良好なものを中心に取捨選択した一部についてのみ報告した（Fig.4の遺構は主に報告遺構を抽出して掲載した）。また以下の近世（および中世）の土坑・土壙墓については、紙幅の都合上、遺構の平面形や法量（規模・深度）の記述を省略する（図を参照）。多くの土壙墓は円形ピット状ないし逆截頭円錐形であり、これは木桶墓であった可能性高いが（A類）、一部に平面が長方形ないし隅丸長方形基調で比較的浅く底面も広いものがあり、これらは屈伸葬の木棺墓であった可

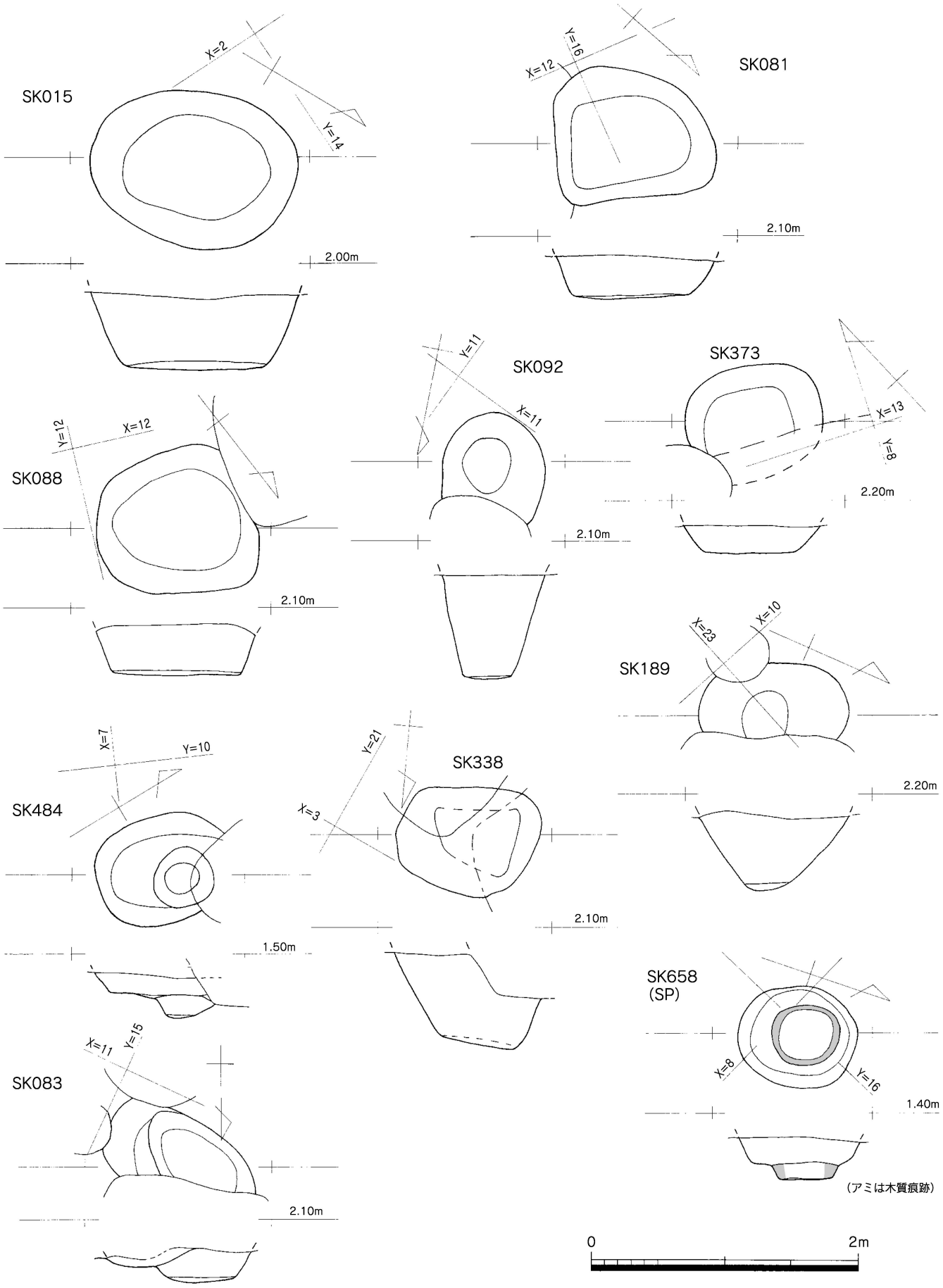


Fig.20　(中世～)近世土坑実測図(2)(1/40)(SK015,SK081,SK088,SK092,SK373,SK484,SK338,SK189,SK083,SK658)

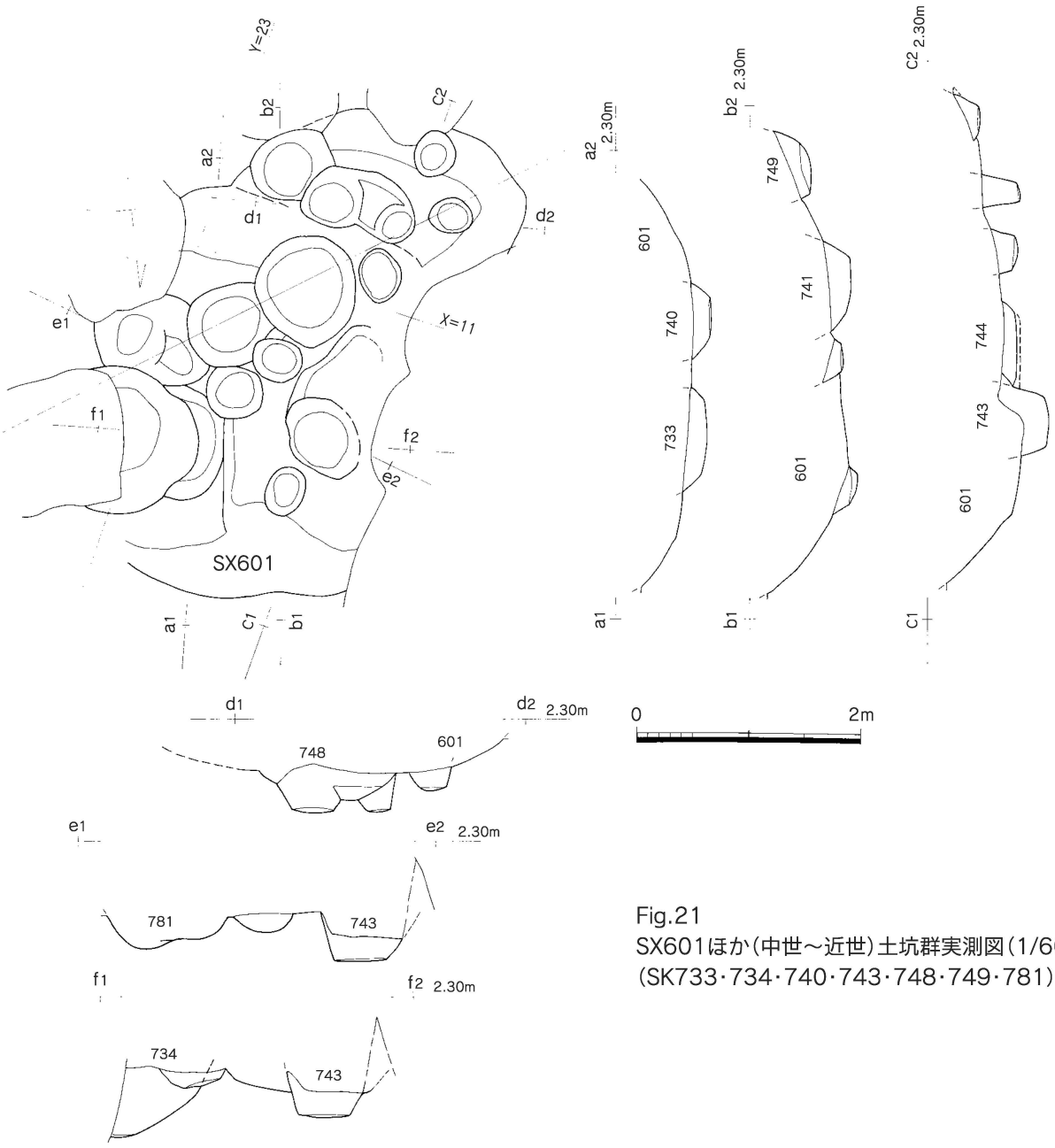


Fig.21
SX601ほか(中世～近世)土坑群実測図(1/60)
(SK733･734･740･743･748･749･781)

能性がある（B類)。A類には2段掘りのものもある。なお土師器坏・皿の分類と編年については、中世のみならず近世まで見通した編年案である楠瀬慶太2007を参照した（楠瀬2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相－博多遺跡群の土師器編年－」『九州考古学』第82号、以下「楠瀬編年（分類)」とする)。

SK361（Fig.13左、PL.11－2)　遺物出土状況から土壙墓とした（A類)。土師器小皿は（Fig.34－23,24)（楠瀬2007の「坏B7」だが本報告では径8.5㎝前後以下の「坏B7･8」は小皿と

Ph.6　SE801井戸側桶組出土状況（東から）

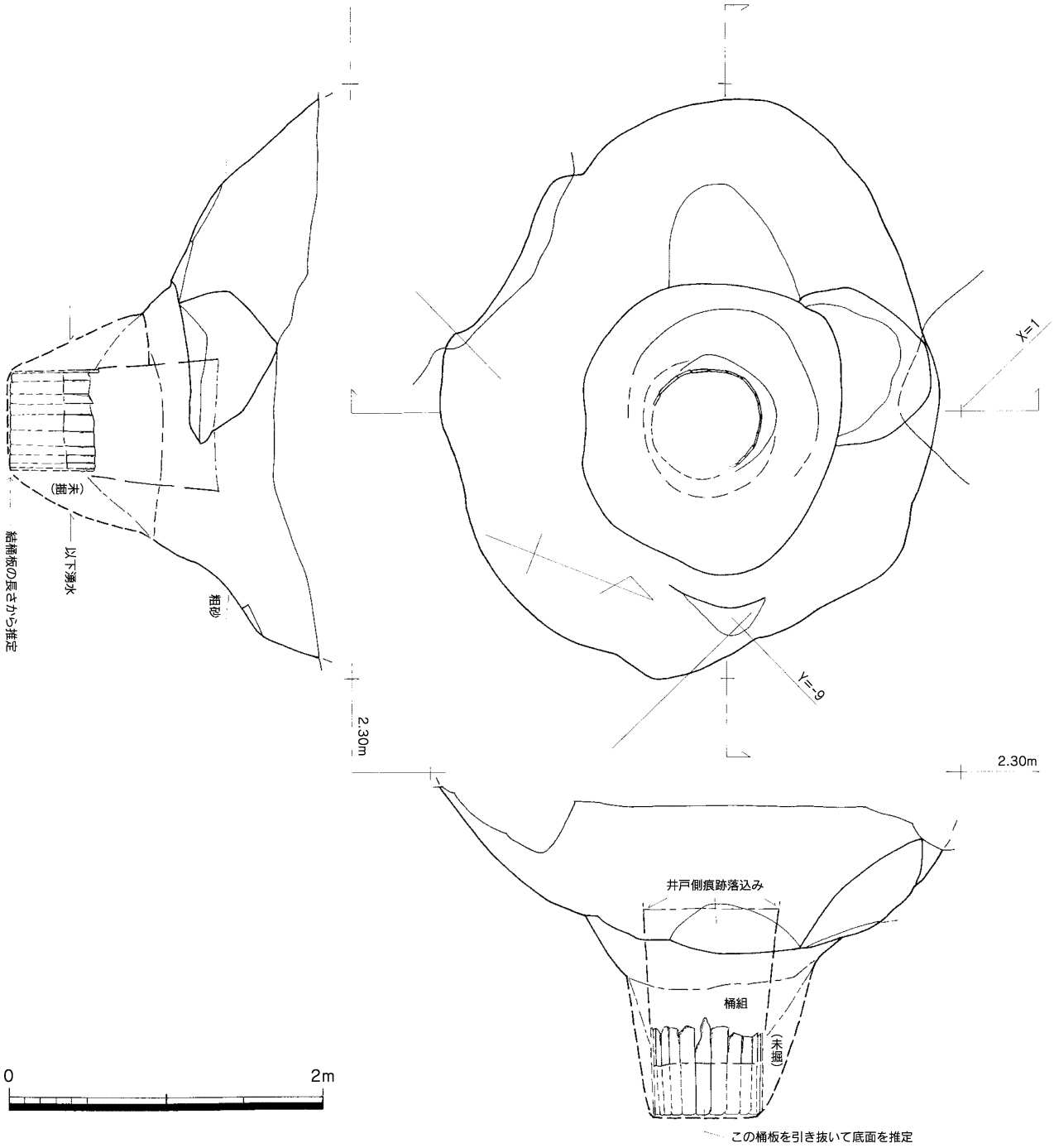


Fig.22　井戸SE801実測図（1/40）

する)、18世紀（楠瀬編年Ⅷ期）であろう。その他、和鋏（Fig.45－4)、銅銭2枚（銅銭は表7・8参照、以下同じ）などが出土した。

SK580（Fig.13右、PL.2－4,5)　副葬品と言える遺物の出土と上層にヒト頭骨が出土し（他に種不明の長骨（表10）があるが人骨だろう）、土壙墓であろう（A類？)。南側は近代の攪乱。土師器（Fig.36－24,25)は、18世紀（Ⅷ期）である。その他、仏具の打楽器である銅鉦（Fig.46－3)、銅銭6枚が出土した。

SK363（Fig.14左、PL.3－3)　遺物出土状況から土壙墓であろう（A類)。出土遺物（Fig.34－26,27)のうち小皿の型式から18世紀であろう。銅銭（宋銭）2枚のほか、未図化だが和鋏が出土している。

SK362（Fig.14中、PL.2－3)　副葬品と考えられる出土遺物が多く、土壙墓であろう（A類)。土

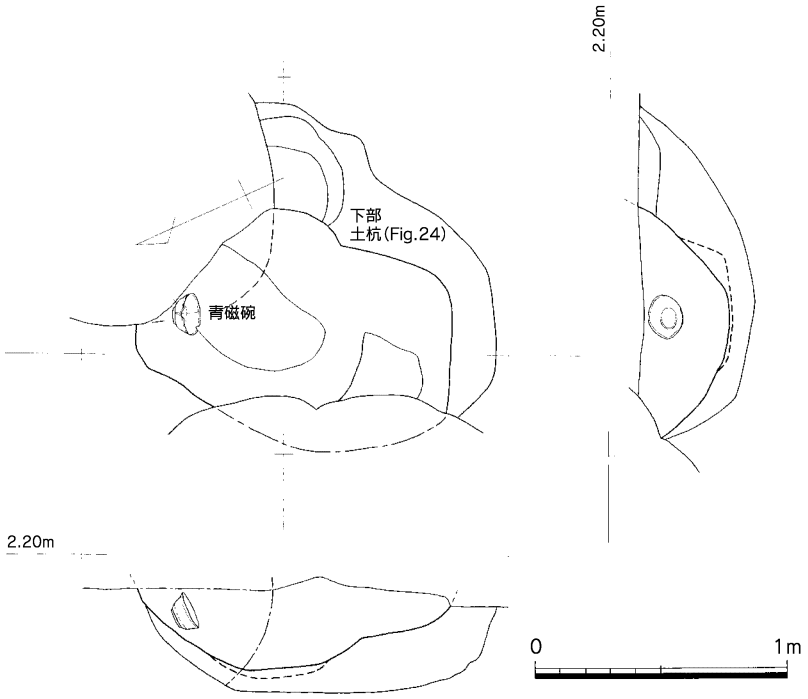


Fig.23　中世土壙墓SK837実測図（1/30）

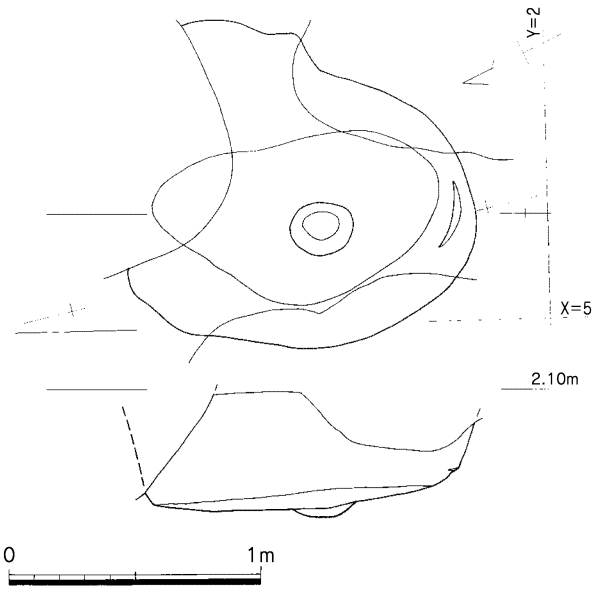


Fig.24　中世土壙SK837下部遺構実測図（1/30）

師器小皿（Fig.34－25,35）は18世紀代であろう。その他、和鏡（柄鏡）（Fig.46－4）、銅銭計18枚（全て寛永通寶）や、櫛が錆着した和鋏１、毛抜１（いずれも未図化）が出土している。

SK702（Fig.14右、PL.3－1,2）　副葬品と考えられる出土遺物が多く、土壙墓であろう（A類）。最下層に木桶底板の木質痕跡（金属器にも棺材遺存付着）があり、人骨片が認められた。出土遺物（Fig.36－4～8・47－5）の土師器小皿の様相は、他の土壙墓よりやや古く、17世紀末～18世紀前半（楠瀬編年Ⅶ期末～Ⅷ期初め）であろう。下層面での検出と矛盾しない。土壙下層で和鋏・煙管・銅銭・櫛が錆着したもの（Fig.47－1,2）、銅銭6枚などが出土した。下層に落ち込んだ土師器小皿の直上にウマないしウシの骨があるが、この意味（副葬？儀礼？）は不明である。

SK701（Fig.15左、PL.11－4）　Ⅰ区西半２面で検出。桶棺底板が遺存していた。土壙墓A類。土師器小皿（Fig.36－3）は18世紀代か。銅銭6枚（寛永通寶5枚）は六道銭であろう。

SK321（Fig.15右、PL.11－3）　SK（SP）322が覆土を切る。出土遺物（Fig.34－1,2・38－1）の小皿は17世紀後半～18世紀（Ⅶ～Ⅷ期）か。その他、毛抜1、最下層で銅銭9枚（底板木質遺存付着）、他に銅銭3枚がある。深いので井戸とも考えたが、六道銭があり土壙墓A類である。

SK312（Fig.16左）　両端が欠損する35㎝長の長骨が出土しヒトの大腿骨と認識できたので、土壙墓と判断した（B類？）。出土遺物（Fig.33－36）の皿（坏Bか）はⅦ期（17世紀後半）であろう。

SK（SX）106（Fig.16右）　調査時は、複数の土坑・ピットの重複と判断して掘削し、図面も作成したが（Fig.16最右）、いずれも角礫が下部にあり、複数の遺構とするとその配置に矛盾があり、墓とする積極的な遺物は無いが、周囲の遺構との関連からも、底面に配石を有する土壙墓と判断したい。

以下は出土遺物などから整理中に土壙墓と判断したものである（Fig.17～20）。

SK334（Fig.17左列上段）　16世紀頃の粉青沙器（Fig.34－15,16）があるが、完形の肥前系陶器塊（にぶい橙色胎土に黒褐色釉）（Fig.51－1，PL.12－12）は17世紀前半～中葉（肥前Ⅱ期）の型式でありこれが伴い、年代の上限となる。六道銭（銅銭6枚銭種不明）や、未図化だが刀子片（?）1、釧状鉄製品1が出土し、土壙墓Ｂ類である。

SK325・324（Fig.17中列上段）　SK324が325を切る。**SK325**の土師器（Fig.34－8～10）のうち小皿は18世紀代（Ⅷ期）か。銅銭6枚、および和鋏・毛抜（銅銭付着）が出土した（Fig.45-1,2）。**SK324**出土の土師器坏（Fig.34－11,12）は、楠瀬編年では不明確だが、18世紀末以降の甕棺ST019出土土師器（Fig.32－7･8）の形態に繋がる型式で、18世紀末頃の坏とみておく。銅銭6枚が出土。両土坑ともに六道銭が出土し、土壙墓Ａ類とする。

SK441（Fig.17右列上段）　SK362などに切られる土壙墓（Ａ類？）。土師器坏・皿（Fig.35－5,6）の法量は18世紀代（Ⅷ期）より大きく、17世紀後半～末（Ⅶ期）に属するか。銅銭6枚があり、六道銭であろう。

SK536・538（Fig.17左列2段目）　**SK536**は寛永通寶を含む六道銭4塊（計25枚）があり、種不明の肋骨を出土し（人骨か？）、土壙墓Ａ類であろう。一方、**SK538**は銅銭が宋銭1枚で、底径が広い土師器小皿などがあり（Fig.35－21～23）、近世ではなく中世（楠瀬編年Ⅳb期？）の可能性もある。

SK552（Fig.17右列2段目）　寛永通寶4枚があり、六道銭とすれば近世土壙墓であろう（Ａ類）。

SK476（Fig.17中列3段目）　土師器小皿（Fig.35－11,12）は「坏B8」（楠瀬分類）とすれば、18世紀（後半？）か。銅銭6枚（寛永通寶1枚）は六道銭であろう。土壙墓Ａ類。

SK188（Fig.17左列下段）　土壙墓Ａ類。土師器坏・皿（Fig.36－27,28）は、底径が小さくなる型式で、ST019出土土師器とも類似し、楠瀬編年では不明確だが19世紀前半（Ⅸ期）の可能性がある（28は型作りの可能性もある）。銅銭1枚のほか、和鋏1と毛抜1（Fig.45－7）が出土している。

SK097（Fig.18左列上段）　寛永通寶6枚と宋銭1枚が出土し、六道銭と考えられ、土壙墓であろう（Ａ類）。出土遺物（Fig.33－1～6）のうち、5･6の小底径の小坏がありST019の小坏（Fig.32－7･8）に繋がる型式と思われ、18世紀末かそれ以降（19世紀初頭頃？）の年代が推定される。

SK099（Fig.18右列上段）　銅銭6枚があり、銹着して銭種不明だが六道銭であろうから近世土壙墓と判断する（Ｂ

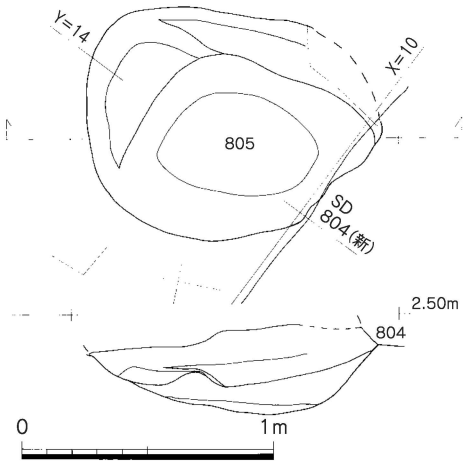


Fig.25　中世土坑SK805実測図（1/30）

Ph.7　SD802土層断面①（西から）

Ph.8　SD802土層断面②（東から）

Ph.9　SD803土層断面（西から）

Ph.10　SD804土層断面（西から）

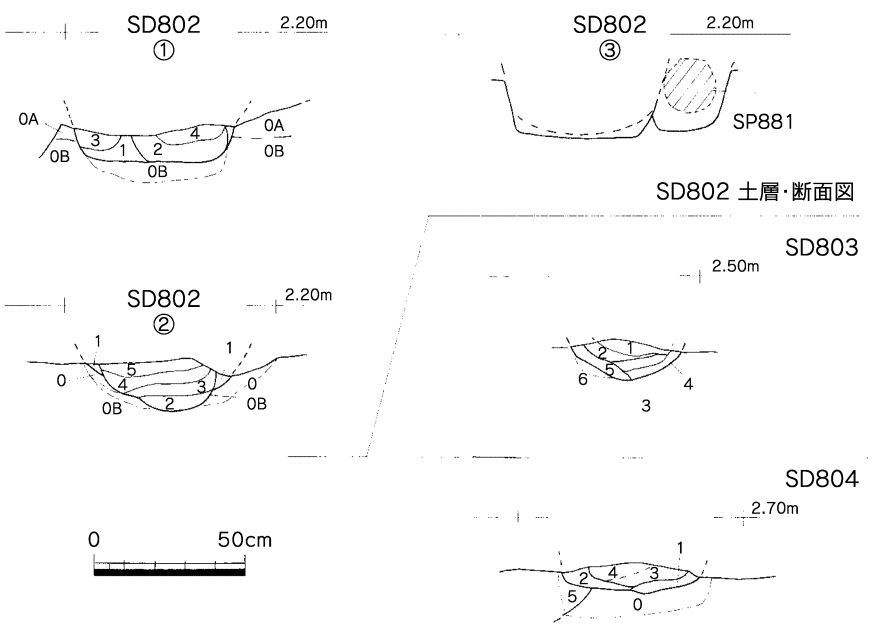


Fig.26　SD802,SD803,SD804土層図・断面図（1/25）

SD802土層①
0A　地山砂、ややにぶい（浅）黄橙色砂・粗砂、1～2㎜大少し、しまりややあり
0B　地山砂、明黄橙色砂・粗砂、ＯＡ層より粗い、1～2㎜大多い、2～3㎜大少し、しまりやや甘い
1　ＯＢ層に近い明黄橙色粗砂（ややにぶい色）、にぶい黄褐色砂汚れわずか、しまり甘い
2　ＯＡ層に近い（ややにぶい）黄橙色砂・粗砂、にぶい黄褐色砂わずか、炭粒含む、しまり甘い
3　（やや暗い）にぶい黄橙色～にぶい黄褐色砂・粗砂、やや暗い黄褐色砂混じる、しまりやや甘い
4　にぶい黄褐色砂＋暗黄褐色砂少し＋にぶい黄橙色砂少し、しまりややあり
5　しまり甘い、暗黄褐色砂（～にぶい暗褐色砂）＋黄橙色砂、側溝板の痕跡か？

SD802土層②
0　地山砂、明黄褐色～明黄橙色砂、風成砂か、しまりやや甘いＯ層下部　浅黄色～浅黄橙色砂・粗砂、しまりややあり
1　Ｏ層＋にぶい黄褐色砂の汚れわずかに、しまり甘い
2　（ややにぶい）浅黄橙色砂、少し濁る（にぶい黄褐色砂わずか）、しまりややあり
3　ややにぶい黄橙色砂＋にぶい黄褐色砂少し、しまりやや甘い
4　にぶい黄褐色（～黄灰褐色）砂＋（浅）黄橙色砂
5　やや暗く、にぶい黄褐色～黄灰褐色砂＋にぶい黄色砂、炭粒含む

SD803土層③
1　にぶい黄褐色砂＋暗黄褐色砂、ラミナ互層（粗砂ラミナ入る）、＋暗褐色砂少し含む、炭粒あり
2　暗黄褐色砂30%＋暗褐色（暗黄褐色気味）砂50%＋にぶい黄褐色砂20%、1･3層より暗い
3　暗黄褐色～にぶい褐色砂＋にぶい黄色～黄褐色砂15%
4　５層より暗い、にぶい黄褐色砂＋暗黄褐色砂斑状20%以上、少し粗砂入る
5　ややにぶい（浅）黄橙色（～黄褐色）砂＋暗黄褐色砂斑状20%未満、少し粗砂入る
6　ややにぶい（浅）黄橙色～ややにぶい黄色砂、少し粗砂入る（2㎜大以下）、風成砂か？しまり４･５層よりあり

SD804土層④
0　浅黄橙色～明黄褐色砂･細砂、風成砂地山
1　やや濁った黄橙色（～浅黄橙）色砂＋にぶい黄褐色砂（３層砂）少し（しみ状に入る）
2　にぶい（淡）褐色砂斑状主体＋（にぶい）黄色～黄橙色砂40%
3　にぶい黄色～黄橙色砂＋暗黄褐色～にぶい褐色砂斑状60%
4　暗黄褐色～暗褐色砂＋にぶい黄色（～暗黄）色砂20%
5　にぶい黄橙色～にぶい黄色砂＋にぶい褐色（～にぶい黄褐色）砂斑状30%、（４層より濁り･混じり少ない）

表4　SD802,SD803,SD804土層図・断面図（Fig26）注記

類？）。ヒトの頭蓋骨片が出土している。

SK103（Fig.18左列中段）　寛永通寶5枚があり、六道銭であろう。土壙墓Ｂ類とする。完形土師器（Fig.33－7,8）は、「坏B7」としては径の大きいもの（7）を含み、Ⅷ期のうちⅦ期に近い18世紀初頭前後か。

SK425（Fig.18左列下段）　陶器甕棺ST12に切られる。出土遺物（Fig.35－2～4）のうち土師器小皿から18世紀代であろう。寛永通寶5枚があり、六道銭であろう。土壙墓Ａ類とする。

SK228（Fig.18右列下段）　土師器小皿（Fig.34－36）は18世紀代（Ⅷ期）であろう。銅鈴（Fig.46－2）があり、副葬品と考えられ、土壙墓Ａ類とする。SP227で種不明の長骨片が出土するが、SK228に伴う人骨か。

SK731（Fig.19左上）　銅銭4枚や和鋏・毛抜・櫛が錆着したものがあり（Fig.45－6）、副葬品であろう。土師器小皿（Fig.34－37）は「坏B7」であろうが、底部形態はⅦ期に近い。土壙墓Ａ類。

SK720（Fig.19右）　Ⅰ区西半２面。銅銭6枚を出土。完形の土師器小皿があり（未図化）、18世紀代であろう。SK720が近世土壙墓Ａ類ならば、重複するSK716やSK718(Fig.19右)も同様であろう。

SK721（Fig.19右）　六道銭として寛永通寶5枚がある。土壙墓Ａ類。完形の土師器小皿があり（未図化）、18世紀代か。その他、和鋏・毛抜・櫛が錆着したものがあり（未図化）、副葬品であろう。

SK015（Fig.20左列上段）　完形の土師器小皿は小底径で器壁が薄く（未図化、Fig.32－7･8に類似）、18世紀末～19世紀初頭か。和鋏・毛抜・櫛と銅銭3枚が錆着して出土している（Fig.46－1）。

SK658（Fig.20右列下段）　中央下部がピット状となる。下部検出時にピット縁部に木質痕跡があり、何か木枠のようなもの（曲物？）があった可能性がある。上段部の土壙状部分から和鋏が出土し、上部は近世土壙墓であろう。一方、下部ピットは海獣（イルカ）類の骨が出土し、古い別遺構の可能性がある（中世か？）。出土遺物（Fig.35－34～36）のうち、土師器小皿（34）は18世紀代か。

SK281（Fig.51）　近世甕棺ST006に切られる。土師器小皿と肥前系陶器塊が完形で出土し（Fig.51－2･3）、副葬品の可能性が高い。ただし六道銭など他の副葬品は無い。土壙墓とすればＢ類。灰白色

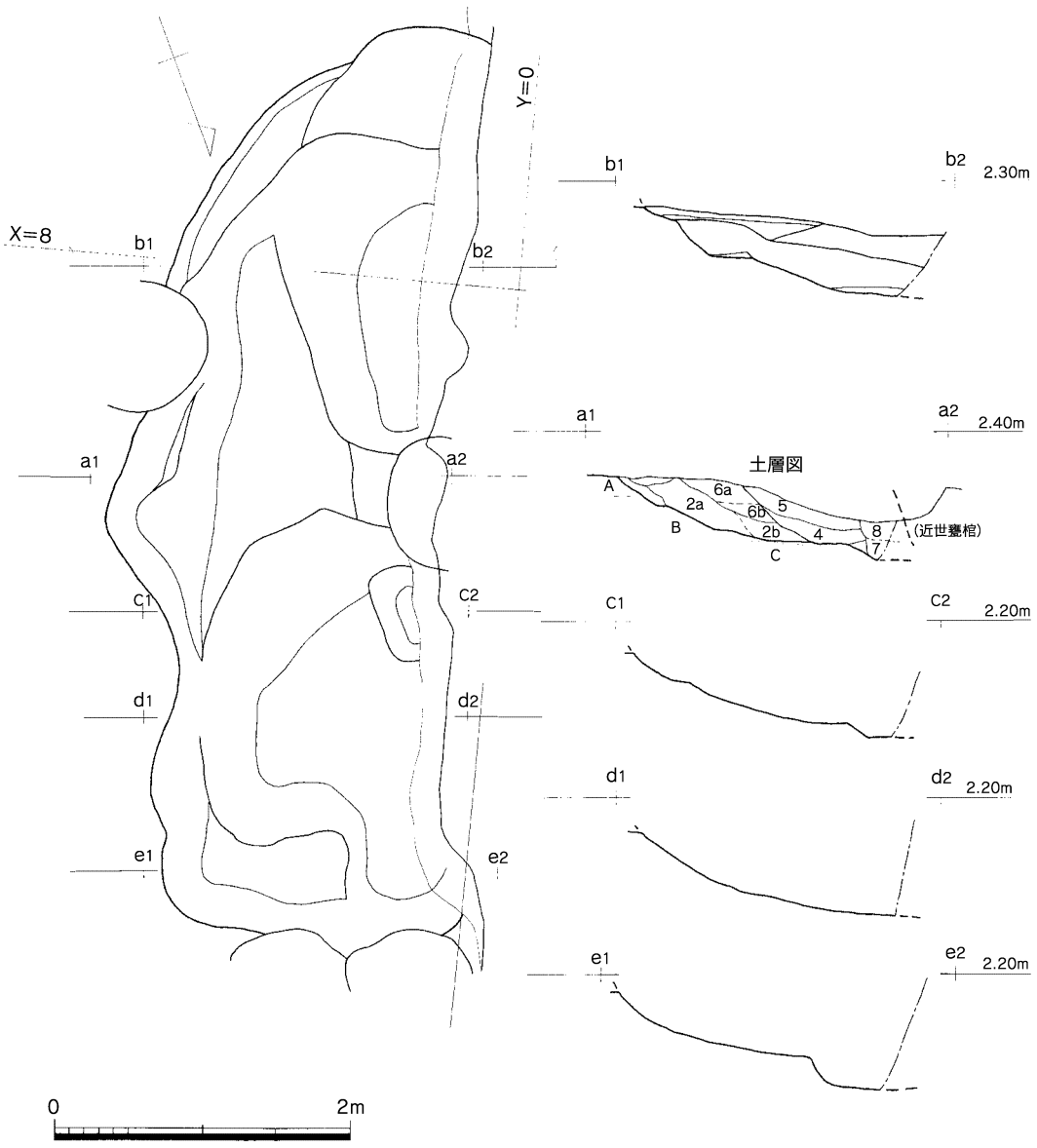


Fig.27　落込みSX830実測図・土層図（1/50）

の陶器埦（畳付は露胎）は端反り気味で肥前Ⅱ期（17世紀前半～中葉）であり、この年代が上限となる。土師器小皿は楠瀬編年Ⅶ期（17世紀後半）の「坏B7」だろう。近世墓群中では初現期の遺構か。

３）近世土坑（土壙墓であるか不確実なもの）

以下は近世の土坑であるが、その可能性も十分あるが、土壙墓とするには根拠不足なものである。

SK516（Fig.17中列2段目）　完形の土師器小皿が出土し（Fig.35－16～18）、18世紀代の「坏B7」であろう。副葬品とすれば土壙墓の可能性がある。

SK525（Fig.17左列3段目右）　出土した完形の土師器小皿は（Fig.35－19,20）、楠瀬編年Ⅷ期の「坏B8」か、Ⅶ期の「皿ＢＩ2」ないし「ＢＩ3」であろ

A　浅黄橙色～明黄褐色砂（細砂＋砂、粗砂わずか）、風成砂か
B　A層よりややにぶい浅黄褐色砂・粗砂、1～2㎜大砂（やや粗砂）主体、一部3～5㎜大（以上）粗砂含む
C　B層よりにぶい（浅）黄橙色（～にぶい黄橙色）砂・粗砂、1～3㎜大主体、（大粒粗砂はB層より少ない）
（B・C層は河川堆積か）
1　にぶい（やや暗い）黄橙色粗砂（2層よりやや明るく黄橙色砂気味）、1～2㎜大主、3～8㎜大粗砂も多い、A・B層よりしまり甘い
2　にぶく暗い黄橙色粗砂
2a　2ｂ層よりさらに暗い、黄橙色～にぶい黄色（～にぶい黄褐色）砂・粗砂、炭粒をやや含む、1～2㎜大主体、3～4㎜大やや多、5㎜大以上わずか、1層よりややしまる
2b　2ａ層よりやや明るい、1層よりやや暗い、にぶい浅黄橙色～にぶい黄色砂・粗砂、1層よりややしまる、炭粒わずか含む、粗砂は2ａ層よりやや少ない、1～2㎜大主体、3～4㎜大少
3　1層とほぼ同じ
4　やや明るくややにぶい黄橙色砂、若干粗砂を含む、2～4㎜大粗砂少し、しまり2層より甘い
5　4層より暗い、にぶい黄褐色～にぶい黄橙色（10YR）砂・粗砂、2ａ層より暗い、しまりやや甘い、1～2㎜大主体、3～4㎜大少、5㎜大以上わずか
6a　2ａ層よりやや暗い、5層に近い、やや暗い黄橙色～暗黄色（～やや暗い黄褐色）砂・粗砂（7.5YR）、2ａ層よりしまりややあり、5層よりしまりややあり、1～2㎜大主体、3～4㎜大若干、5㎜大以上少し
6b　6ａ層と2層の漸移層、6ａ層よりやや明るい黄橙色砂を含む、砂の質は2ａ層とほぼ同じ
7　8層より淡くにぶい色、にぶい黄橙色（～やや暗い黄橙色）砂＋やや粗砂、1～2㎜大主体、3㎜大以上少し、しまり少ない
8　5層よりやや暗い、やや暗い黄橙色～やや暗くにぶい黄橙色砂・粗砂、粗砂3㎜大以上含む、しまり5・7層より甘い、7・8層間に炭粒あり
9　にぶい浅黄橙色砂、しまり（やや）甘い、他より明るい

表5　落込みSX830 土層図（Fig27）注記

う。近世の土坑と思われる。

SK740（Fig.21）　大型土坑**SX601の下部**で検出した。種不明の骨片があり、近世土坑（土壙墓？）の可能性がある。その場合はSX601上部から掘り込みがあったのであろうが分からなかった。その他、SX601下部の検出遺構のうち、**SK734**も近世土坑（土壙墓？）の可能性がある。出土した土師器小皿（Fig.41－31）は近世（楠瀬編年Ⅷ期）に下る可能性がある。

Ph.11　発掘調査作業状況（Ⅱ区，東から）

４）時期不詳（中世～近世）の土坑

以下は中世の可能性がある土坑であるが、近世である可能性も否定できないものが多い。遺物が小片のみであったり（近世遺物があっても小片なら混入かもしれない）、遺存度が高い遺物が土師器皿のみの場合（中世と近世に似た法量・形態が存在することがある）、時期が限定できない場合が多い。

SK539（Fig.17左列3段目左）　出土遺物（Fig.35－28,29）は中世前半期のものがあり、中世の可能性もあるが、周囲遺構との関係からすると近世土坑の可能性を排除できない。

SK464（Fig.17右列3段目）　15～17世紀の足釜片（Fig.35－1）がある。宋銭があるが1枚で、六道銭とは言えない。またSK464に切られる**SK463**は遺物（Fig.35－9,10）から中世の可能性がある。

SK187・352（Fig.17右列下段）　２段掘り状になっているが、おそらく上部の**SK187**が近世土坑で、下部の**SK352**は中世土坑であろう。出土遺物（Fig.34－19～21）は下部SK352に伴うか。

SK102（Fig.18左列上段）　出土した土師器小皿（Fig.33－9,10）は、18世紀（Ⅷ期）の「坏B7」の可能性があるが、中世（Ⅳb～Ⅴａ期）の可能性も排除できない。土壙墓かどうかも定かではない。

SK202・203（Fig.18右列中段）　SK202がSK203を切る。**SK202**からは宋銭が出土し、中世後半と考えられる土師器坏が２点出土している（未図化）。近世の可能性を排除できないが、中世としておく。**SK203**は掘り込みもやや深く、口禿の白磁埦（Fig.33－21）が出土し、13～14世紀頃であろう。

SK730（Fig.19左列上段右）　Ⅰ区西半２面で検出。隣接する近世土壙墓SK731より明らかに深い掘削であり、これを掘削時の地表面の差と考えれば中世土坑の可能性もあるが、詳細不明である。

SK625（Fig.19左列下段）　Ⅰ区西半２面。**ウマの顎骨**を出土。柱穴か。中世に遡る可能性がある。

SK081（Fig.20右列上段）　青磁片２点（Fig.32－27,28）があり、底径がやや広い土師器小皿片もあり、中世（13世紀代）の土坑であろう。ただし種不明ながら骨片があり、土壙墓の可能性はある。

SK088（Fig.20左列2段目）　時期不詳だが、出土した瓦片（Fig.44－6）は中世の可能性が高い。

SK092（Fig.20中列2段目）　東播系須恵器の捏鉢片がある（Fig.32－20）。13世紀頃か。

SK373（Fig.20右列2段目）　青磁埦があり（Fig.34－28）、これが伴えば12世紀後半頃である。

SK484（Fig.20左列3段目）　下部にピット状の凹みがある土坑。土師器小皿（Fig.35－13）は、中世前半期（Ⅱb～Ⅲb期）の可能性がある。

SK338（Fig.20中列3段目）　SK218（近世か）と攪乱181の間で検出。遺物は小片が多いが、近世に下る遺物は含まれておらず、中世の可能性が考えられる。

SK189（Fig.20右列3段目）　出土した土師器小皿（Fig.33－15）はⅣb～Ⅴa期の法量・形態の可能性があるが、Ⅷ期（18世紀代）の坏B7の可能性も排除できず、時期が限定できない。

SK083（Fig.20左列下段）　2段掘り状であるが、遺構の重複かもしれない。土師質の捏鉢があり

(Fig.32－19)、東播系須恵器の模倣ならば12～13世紀であろうが、遺構の時期を示すか不明である。

SX601（Fig.21、PL.9－1）　Ⅰ区西半２面で検出の**大型土坑**。攪乱で一部破壊され、調査区外に延びており全体は不明確だが、およそ4×5mの楕円形、すり鉢状断面をなす。下層ないし底面で複数の土坑やピットを検出したが、一部は上部からの掘り込みであろう。**SK734**は、土師器小皿（Fig.41－31）が18世紀代（Ⅷ期）の「坏B7」の可能性があり、近世土壙墓かもしれない。**SK733**と**SK743**からは龍泉窯系青磁が出土し（Fig.36－9,10)、これが伴うなら13世紀中頃～14世紀前半でありSX601以前となろう。SK601自体は、備前焼擂鉢（Fig.35－33）が14世紀後半～16世紀、青磁埦（Fig.36－1）は龍泉窯系Ⅳ類またはⅤ-2類（14～15世紀）であり、混入のおそれもあるが遺構の時期幅を示すと考えられ、落込み遺構SX000より新しい。その他、**SK740**からは種不明の骨片が出土した。

5）中世井戸

62次調査では井戸は1基のみである。本地点での井戸の少なさは箱崎の中世都市域の外縁部であることを示す。

SE801（Fig.22、Ph.6、Ph.11－6、裏表紙写真左上）　Ⅱ区で検出した。上面は3.2×3.8mの楕円形、検出面から80～100㎝で掘り方が狭まる。掘り方上半には構築（掘削）時のステップかとも思われる段がある。上面から70㎝強で井戸側の落込みを確認した。井戸側自体は最下部の1/2周のみ遺存した円形の桶組である（湧水がある最下部も半分の遺存であるのは、廃棄時に井戸側材を回収しているためか？)。周囲の地山砂が脆く崩落のおそれがあったので最下層は掘削していないが、桶材の長さから井戸の最下部レベルを推定して

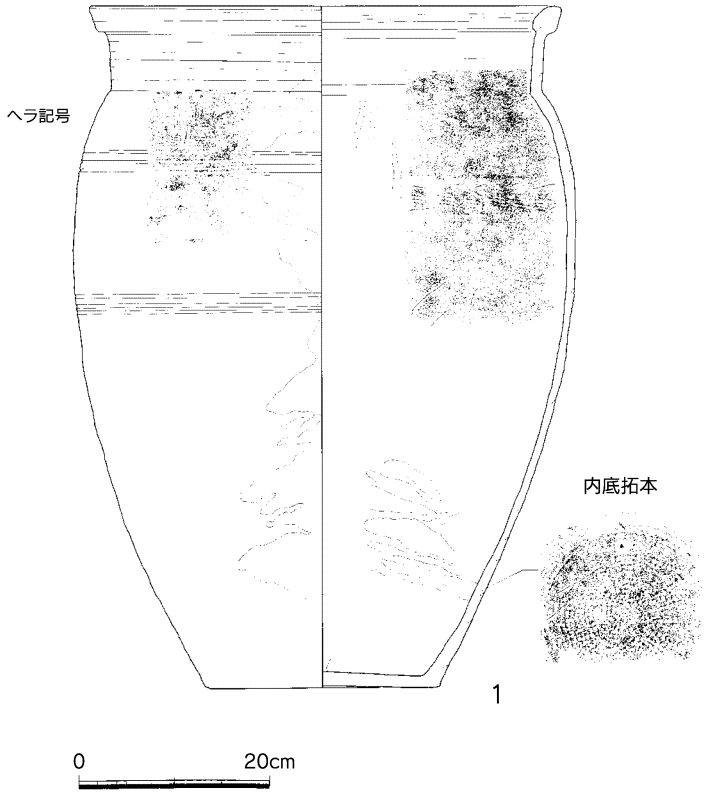


Fig.28　ST001陶器甕棺実測図（1/8）

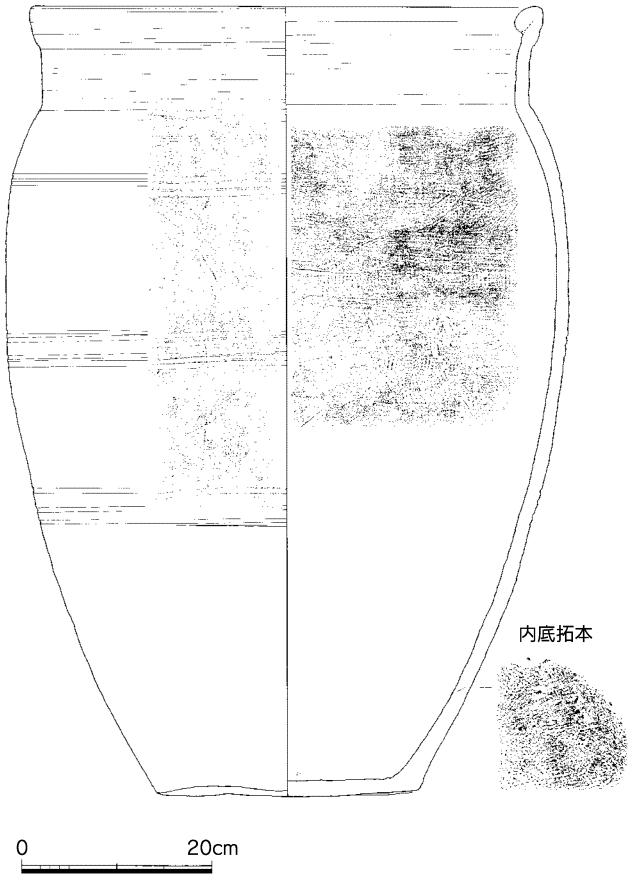


Fig.29　ST019陶器甕棺実測図（1/8）

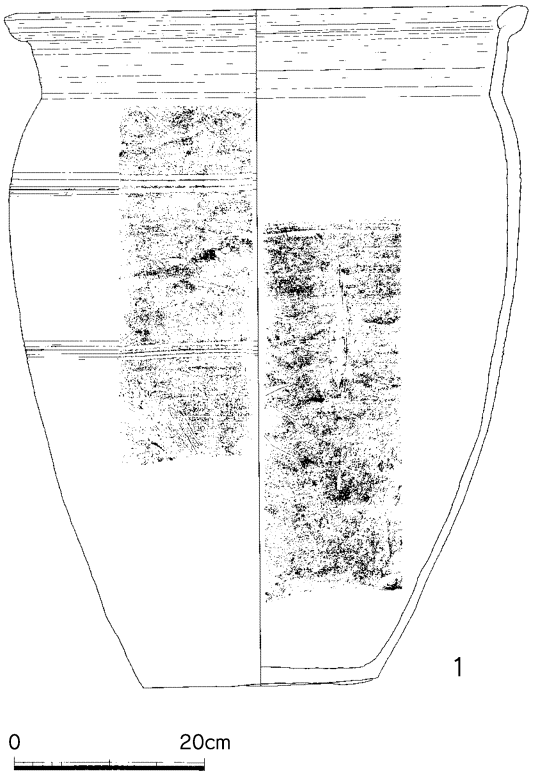


Fig.30　ST845陶器甕棺実測図（1/8）

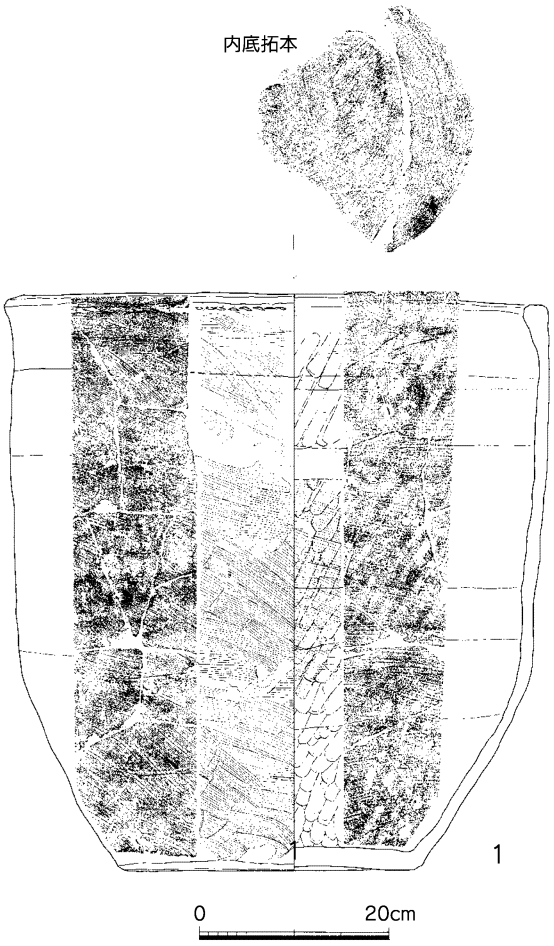


Fig.31　ST031土師質甕棺実測図（1/8）

いる。最下層は調査時も湧水が認められた。

中世前半期の土器・陶磁器（Fig.36－23,37－1～11,38－2～4ほか）、中世の瓦片（Fig.44－1～3ほか）、鉄製品（長釘か）が出土している。井戸側落込み確認以下は、掘り方と井戸側内の遺物を分けて取り上げているが、いずれも12世紀中頃～後半のものが含まれる。ただし掘り方には12世紀前半までの遺物が一定量あり微妙な時間差を示すか（13世紀後半の陶器壺Ｖ類であるFig.38－4は掘り方出土とあるが、井戸側落込み確認前の上層出土の可能性がある）。

6）中世土壙墓および土坑

SK837（Fig.23、PL.11－5）　Ⅱ区西側で検出した75×135㎝前後の不整楕円形土坑。完形の青磁埦が出土し、副葬品と考えられる。掘り方が2段状であり、本来は中央の深くなる部分に木桶（木櫃）があったと思われ、青磁埦は棺外副葬であろう。青磁埦は12世紀後半の型式（Fig.36－18）。他に青白磁の合子蓋（Fig.36－19）などがある。SK837の調査後に周囲と下部がさらに掘削できたが、**下部にあった別土坑**であろう（Fig.24）。土師器坏片があり（Fig.36－17）、12世紀中頃～後半と考えられる。

SK805（Fig.25）　Ⅱ区東側で検出。90×130㎝前後の土坑。掘り方途中で北・東側がテラス状になる。遺物は破片のみだが、中世土師器鍋片があり（Fig.36－20）、13～14世紀頃であろうか。

7）溝状遺構（中世～近世）

SD802（Fig.4･5、土層・断面図はFig.26、土層Ph.7･8、PL.10－1）　Ⅱ区南縁辺に沿って検出したＮ－57°－W前後の直線的な溝。幅50～80㎝の遺存で、深さ20㎝程度の遺存で、かなり削平されている。断面は逆台形ないしＵ字形となる。55次Ⅰ区のSD001から連続する溝。Ⅰ区では近世の遺構・包含層のため不明確であったが（以下Fig.5参照）、Ⅰ区東半のSK513,攪乱285の南側で僅かにSD802の延長らしき溝の痕跡があった。またⅠ区西半でもSK088から攪乱086にかけての南側にも同一線上の溝の痕跡があった。また落込みSX000の南辺はSD802の

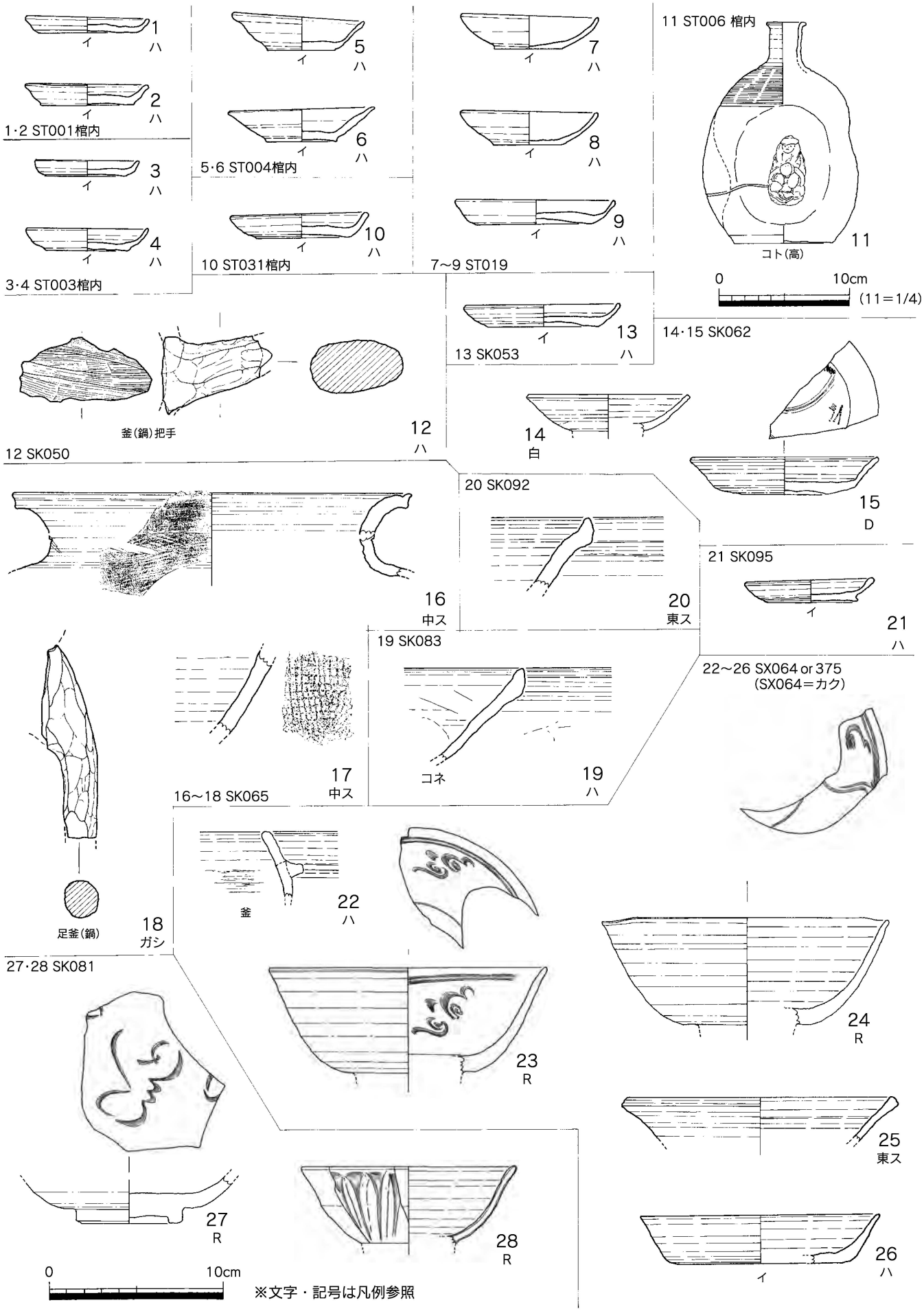


Fig.32　近世甕棺墓出土および遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅰ（1/3，一部1/4）

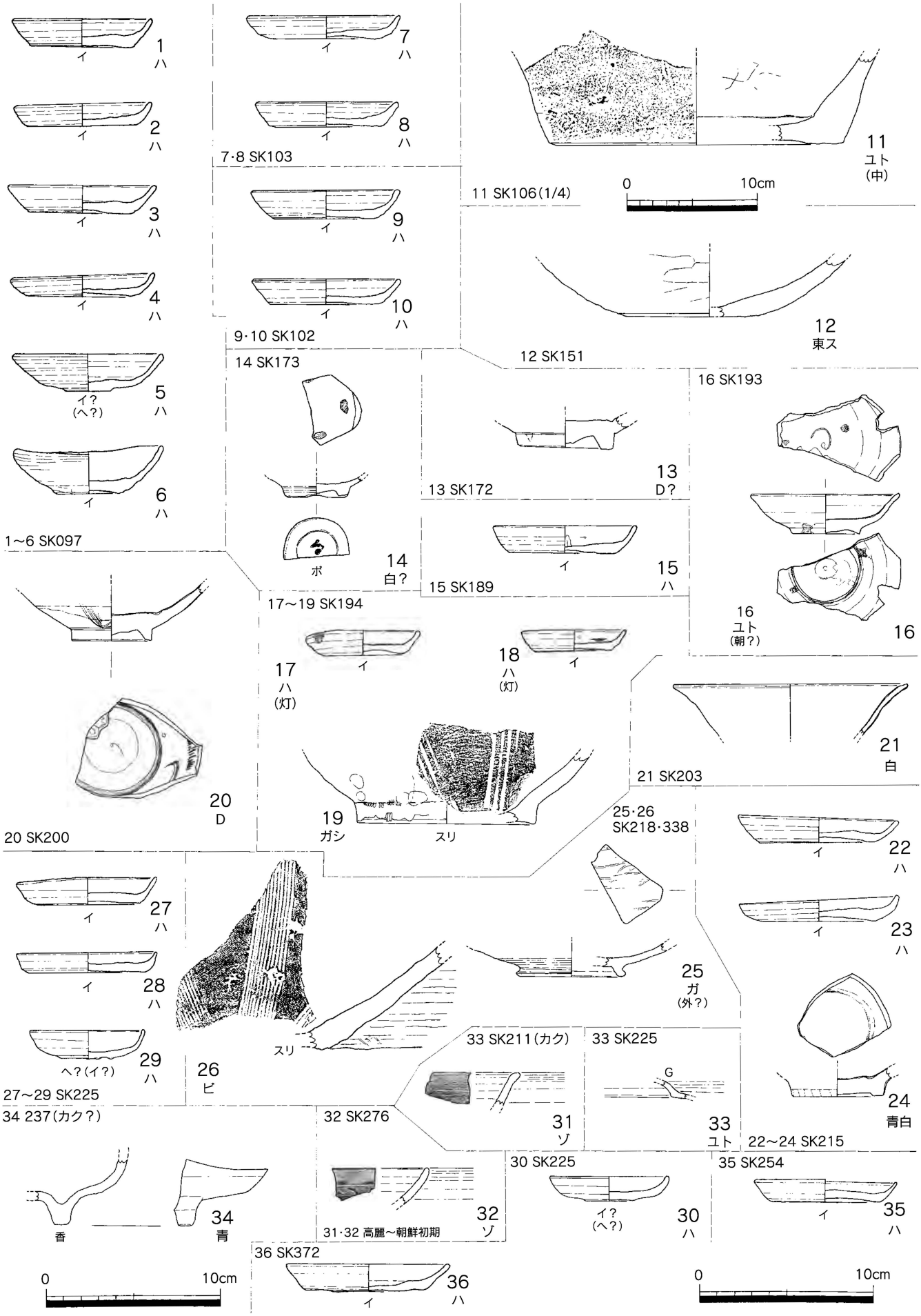


Fig.33　遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅱ（1/3，一部1/2・1/4）

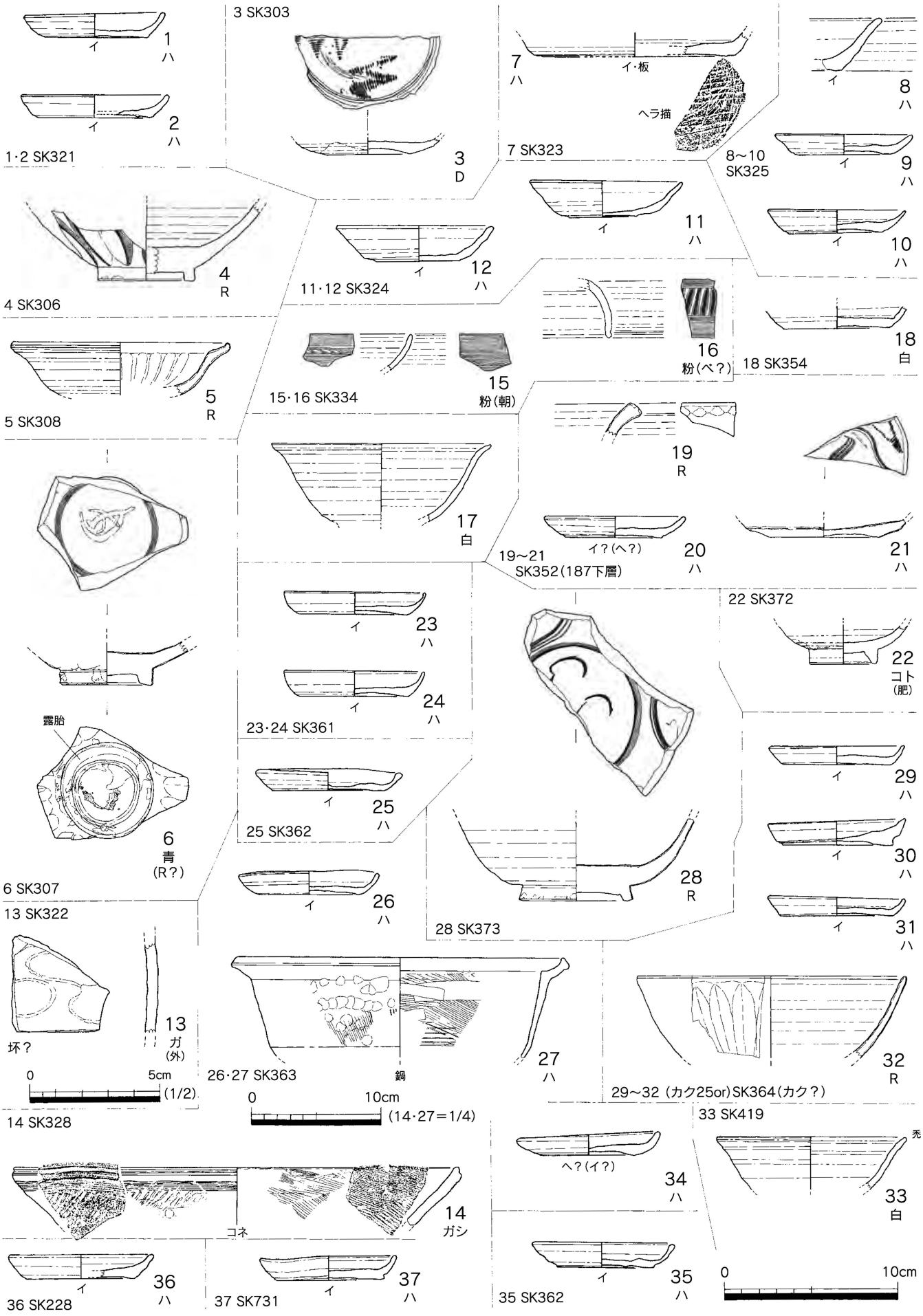


Fig.34　遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅲ（1/3，一部1/2・1/4）

延長ラインと関係があり、近世土壙墓の分布の大部分もこの延長線上を南限とする。SD802－Ⅱ区で**SP881**を切るが、SP881出土の四耳壺（Fig.36－15）が溝の上限を示す。SD802の出土遺物は、陶磁器類は12世紀代が多いが（Fig.39－1～3,6）、土師器小皿（Fig.39－4,5）はやや新しい13世紀後半～14世紀前半を含むか。土層から溝は掘り直しがある可能性があり、時期幅の存在がありうる。その他、Ⅰ区SK305（攪乱？）の南側にSD802の線上に接して平行する**SD307**があるが（Fig.5）、重複する**SX308**はSD802の延長の一部とも見られる。

SD803（Fig.5、土層はFig.26・Ph.9）　SD802と平行する溝。Ⅰ区（西側）とⅡ区（東側）は途切れているが、深くても15㎝しか遺存しないので、これは削平によるもので本来は同一であろう。55次Ⅰ区のSD002またはSD125から続く溝でろう。SD802と並列する道路側溝の可能性もあるが（PL.10－1）、SD803には18世紀代の遺物まで含む。中世溝の凹み（溝痕跡）を近世に再掘削したものか。

SD804（Fig.5、土層はFig.26・Ph.10）　Ⅰ区東縁でのみ検出。深くて10㎝しか遺存せず、削平が著しい。55次SD004の延長であろう。小破片が多いが12～13世紀の遺物があり、SD802と同時期。芯々5.5mで平行し、SD802とともに道路側溝かもしれない。

８）落込み状遺構（中世）

SX830（Fig.27、PL.3－4・11－7）　Ⅱ区西辺で検出。「基本層序」で触れた**落込みSX000**（Fig.4）の東縁部。立ち上がりは緩い斜面で途中がテラス（段）状となる。主に12世紀代の遺物を含むが（Fig.40－1～6）、土師器坏は13世紀後半～14世紀初頭（Fig.40－5）の型式を含み、掘削はその頃であろう。

４．出土遺物

１）近世甕棺（大甕）（Fig.28～31）

ST001（Fig.28、PL.12－1）は肥前系陶器甕。以下の肥前系陶器甕はいずれも「押川窯」系であろう。口径49㎝、器高72.5㎝、最大径53.2㎝。口縁部は内面に折り返し肥厚させる。体部外面はタタキ（縄文？）→ロクロナデ→ナデ、上位と中位に螺旋沈線帯と平行沈線帯がある。内面は粘土帯輪積痕が一部残り、タタキ（格子目当具）→ロクロナデ。内底はタタキをナデ消す。釉がけは、釉を横にして施釉後反転し、残り半分を施釉後、さらに口縁部を下にして立てている。下地が鉄サビの暗赤褐色で、にぶい赤褐色釉がかかる。下村智1994（前掲）のⅤｃ類だが、口縁部内面肥厚が内傾し、最も新しい一群だろう。18世紀末～19世紀初頭に下るか。なお取り上げなかった**ST012**の陶器甕は（Ph.5左）、同じⅤｃ類でも内面肥厚がさほど内傾せず、やや古い（18世紀後半の幅内）であった可能性がある。**ST019**（Fig.29、PL.12－2,3）は肥前系陶器甕。口径53.3㎝、器高83.6㎝、最大径59.6㎝、底径27.7㎝。いわゆる「ハンドウガメ」タイプで、口縁部が玉縁状に内面に肥厚する。体部外面は縄文タタキ→ロクロナデ→一部ナデ、中位2箇所と下位に螺旋沈線帯が、上位に平行沈線帯がある。体部内面はタタキ（格子目当具）→ロクロナデ。内底は格子目タタキを残す。外面は、鉄サビかけ→鉄釉流しがけ→ハケ状工具で釉のばしする。内面は鉄サビ→鉄釉ハケぬりである。下地鉄サビの暗赤灰色で、明赤褐色不透明釉がかかる。下村1994のⅢｄ類で、18世紀末～19世紀前半の型式か。ST001やST845より新しいと考えられる。**ST845**（Fig.30，PL.12－4,5）は肥前系陶器甕。口径54㎝、器高69.6㎝、最大径54.2㎝、底径25㎝。口縁部は内面に折り返し突帯状となる。底部はやや不安定な平底。体部外面は（タタキ→）ロクロナデ、体部中位と上位に螺旋状沈線帯がある。タタキ（格子目当具）→ロクロナデ。内底はナデ消す。内面は鉄釉の上から灰白色のナマコ釉上がり。下地はにぶい赤褐色で、暗赤褐色不透明釉がかかる。下村1994のⅤｃ類だが、ST001と同様に口縁部内面肥厚が内傾し、新しい一群だろう。**ST031**（Fig.31、PL.12－6～9）は、これのみ土師質である。甕というより大

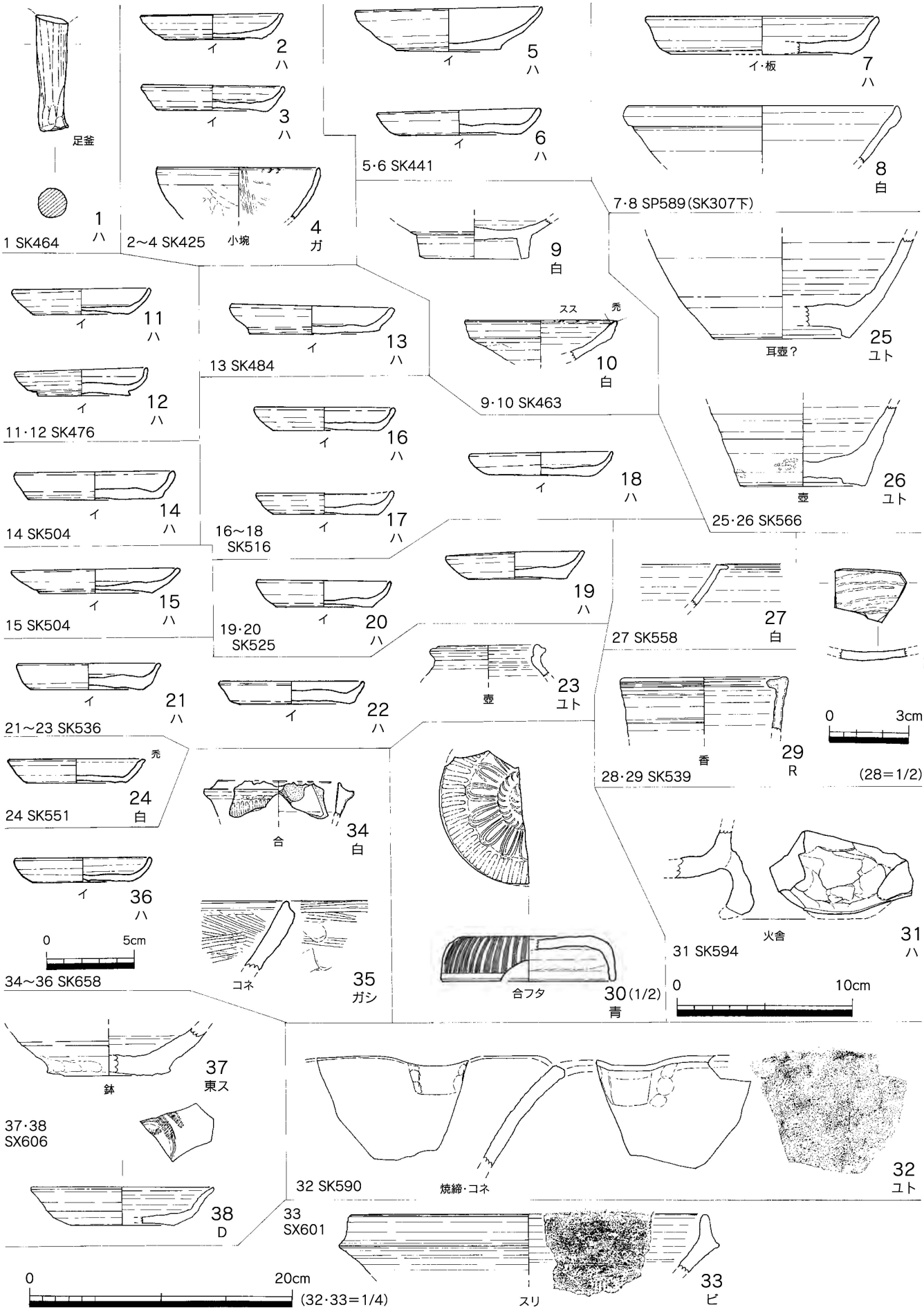


Fig.35　遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅳ（1/3，一部1/2・1/4）

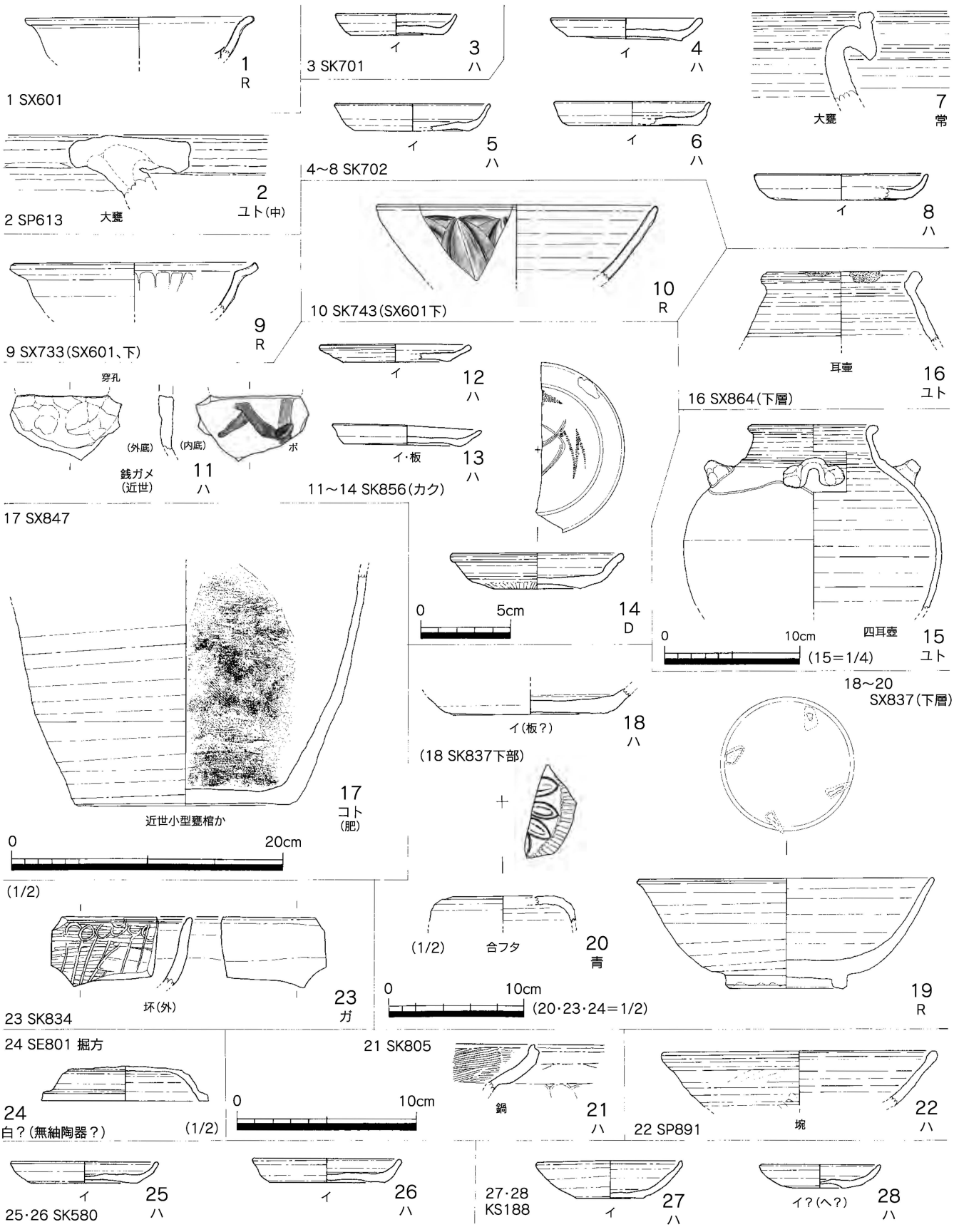


Fig.36　遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅴ（Ⅰ区東半２面・Ⅱ区遺構）(1/3, 一部1/2・1/4)

型深鉢状。口径57.1㎝、器高61.1㎝、底径33.0㎝。にぶい橙色～にぶい黄橙色。器壁の中央は褐灰色～にぶい灰色で、瓦質土器の焼成に近い。外面上位の一部に黒斑がある。内外面に粘土帯積上痕の

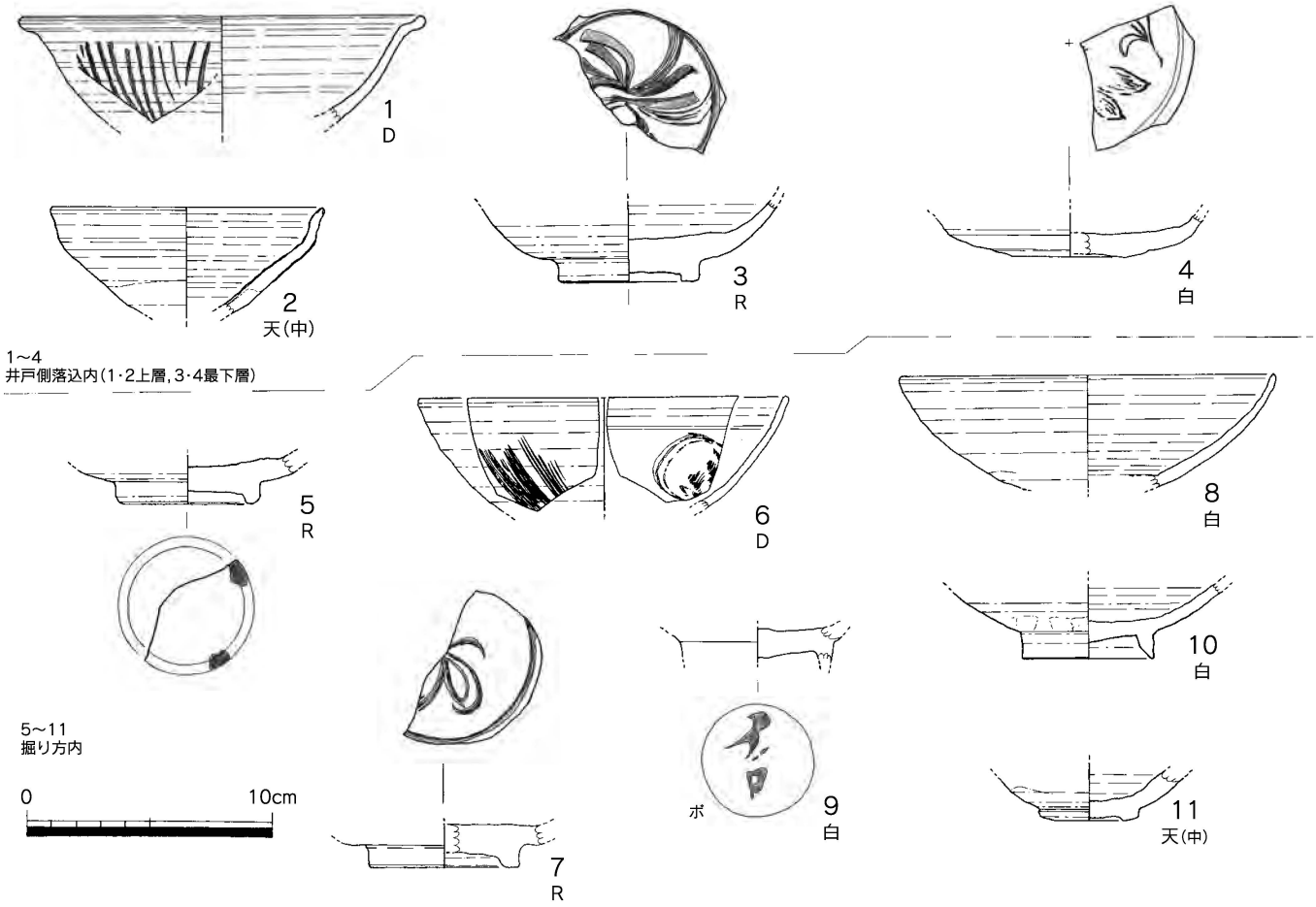


Fig.37　SE801出土陶磁器実測図Ⅰ（1/3）

凹凸が残り、外面体部上半や口縁部直下の積上痕はヘラで刻んだような明瞭な亀裂が残る。内外面ハケメ仕上げ、内面下位はハケメ→ユビナデ→中位以上ハケメ仕上げ。内底はハケメ。底部外面立ち上がりは横にケズリ。外底は回転糸切り（？）の後、ヘラ工具調整。口縁部は板状工具ヨコナデ。類例は少ないが、土師器小皿（坏B7）の年代観から18世紀代。調査区内の陶器甕より古いと予測する。

2）土器，陶磁器，瓦（Fig.32～44）

挿図中に基本的な遺物の種類などを下記の**凡例**のように略号で注記した。出土遺構も挿図中に示している。また遺構の報告において、出土遺物についてすでに記述している場合がある。そのため以下では紙幅の都合もあり、特記すべきものについてのみ部分的に記述する。なお近世陶磁器はあまり図化していない。遺構の多くは土壙墓と考えられるが、副葬品と推定できる完形品が近世陶磁器に少ない理由による。土師器坏皿は完形品が多く（２個一組が多い）、その場合副葬品の可能性が高く、図化しないと時期（型式）判別が難しいこともあり、その図化を優先した。一方、同じ遺構から出土した近世陶磁器片の検討が不十分となっており、今後の課題である。また中世遺跡が調査区にあったことを示すため、近世遺構出土の中世遺物も意図的に選択して図化していることを断っておきたい。

＜凡例＞（Fig.32～44,47,51）
「ハ」＝土師器・土師質土器／「イ」＝底部（回転）糸切り／「板」＝板目圧痕／「ヘ」＝ヘラ切り／「白」＝白磁／「青」＝青磁／「R」＝龍泉窯系青磁／「D」＝同安窯系青磁／「青白」＝青白磁／「染」＝染付（青花）／「天」＝天目／「ゾ」＝象嵌青磁（高麗～朝鮮）／**「粉」＝粉青沙器**（朝鮮、一部ベトナム）／**「G」＝緑釉／「黄」＝黄釉／「ユト」＝輸入陶器**（※特に注記がなければ中国産陶器）／**「中」＝中国陶器／「朝」＝朝鮮陶磁／「ライ」＝高麗陶磁／「焼締」＝焼締め陶器／「ベ」＝ベトナム陶磁／「コト」＝国産陶器／「肥」＝肥前系陶磁／「高」＝高取焼系陶器／「ガ」＝瓦器／「ガシ」＝瓦質土器／「備」＝備前焼／「常」＝常滑焼／「ス」＝須恵器／「中ス」＝中世須恵器／「東ス」＝東播系須恵器／「外」＝外来系**（※土師器・瓦器で他地域産搬入品）／**「合」＝合子／「耳」＝耳壺／「バン」＝盤／「香」＝香炉／「茶」＝茶入器／「禿」＝口ハゲ／「灯」＝灯明皿／「コネ」＝捏ね鉢／「スリ」＝擂り鉢／「ボ」＝墨書／「平」＝平瓦／「丸」＝丸瓦／「カク」＝攪乱**

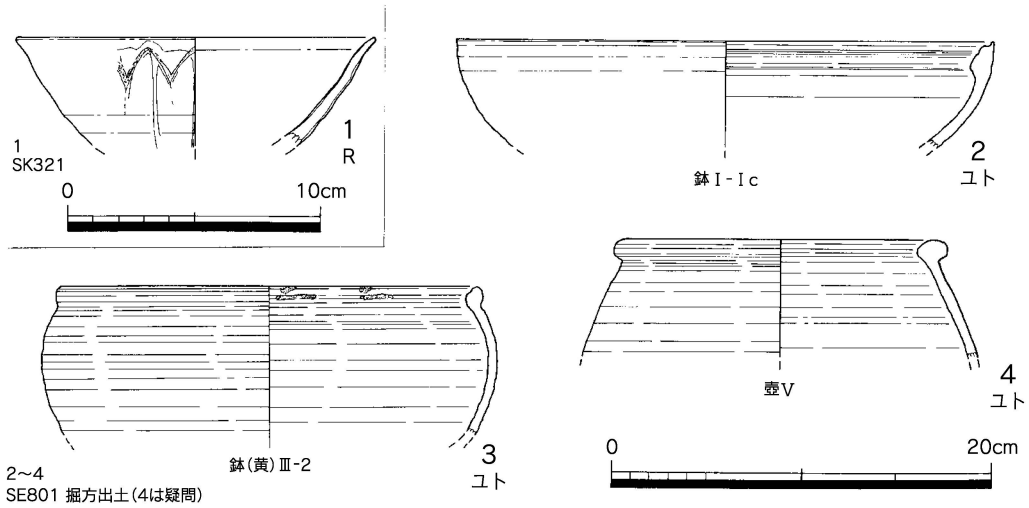
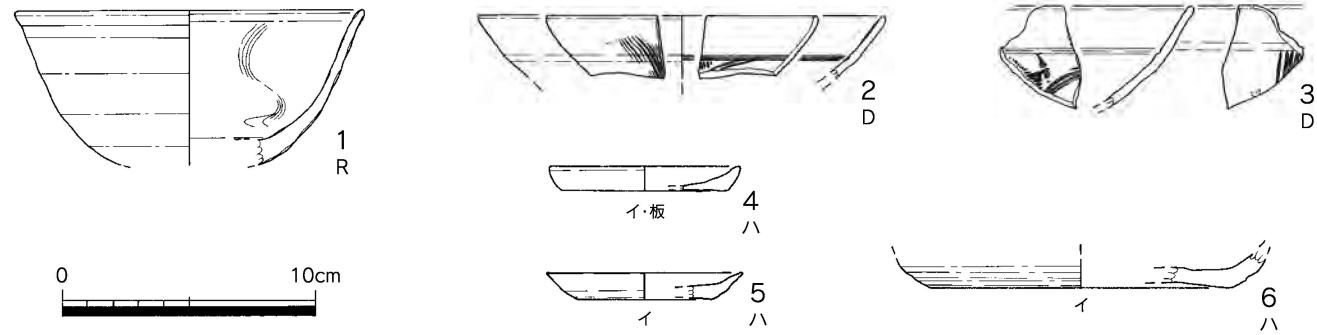


Fig.38　SE801出土陶磁器実測図Ⅱ（1/4),SK321出土陶磁器実測図補遺（1/3）



(5＝Ⅱ区出土,他はⅠ区出土)

Fig.39　SD802出土土器・陶磁器実測図（1/3）

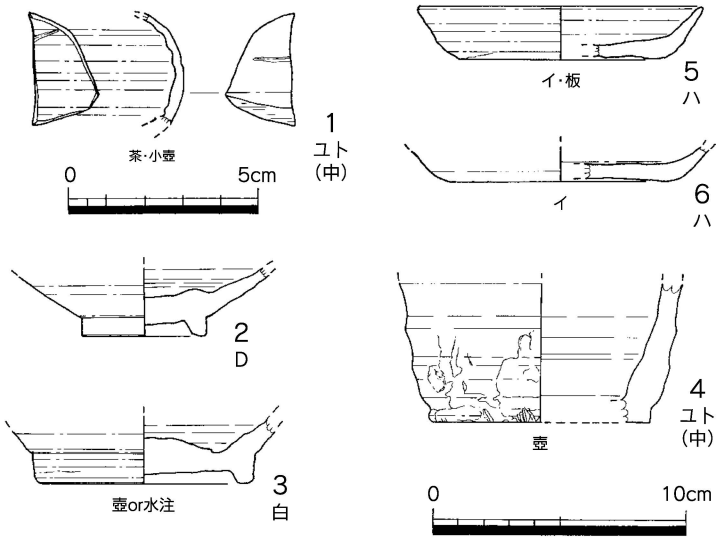


Fig.40　SX830出土土器・陶磁器実測図（1/3,一部1/2）

なお、土器・陶磁器の分類と編年は下記①～④を参照した。陶磁器は①（大宰府分類）を基本とし、②（博多分類）で補った。近世の肥前系などの国産陶磁器は③による。土師器坏皿類は、楠瀬慶太2007（前掲）を参照した（④）。

①　太宰府市教育委員会編2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集／②-a　福岡市教育委員会編1984「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　別冊／②-b　佐藤一郎1996「輸入陶磁器」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会／③　九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念

(Fig.32) 1～9の甕棺内出土土師器は18世紀後半(末）～19世紀前半。5～7が比較的新しいだろう。11は高取焼系の壺。人形状の浮彫あり。**22～26**は攪乱SX064とSK375出土だが、中世前半期の遺物が多く**SK375**は13世紀頃の可能性がある。**26**の土師器坏は13世紀後半。**(Fig.33) 14**の白磁小埦は邵武窯系で、明代（15世紀）のもの。**30**の土師器小坏は19世紀前半か。**(Fig.34) 7**は12世紀後半の土師器坏。**16**の粉青沙器はベトナム陶磁の可能性があるが不明。**29～31**は13世紀前半のセットで、攪乱以前の遺構が存在したか。

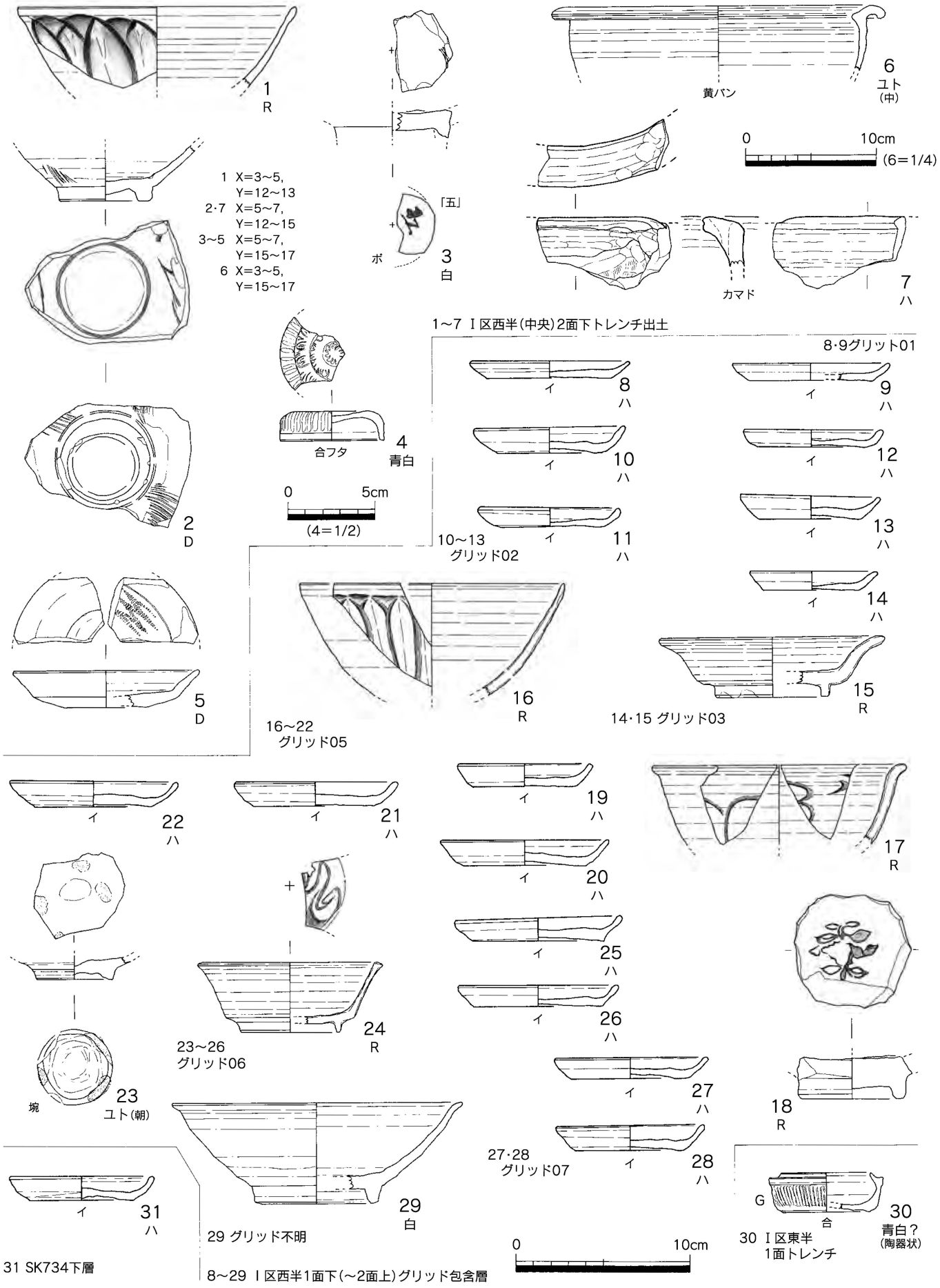


Fig.41　Ⅰ区１面以下トレンチ・包含層グリッド出土土器・陶磁器実測図（1/3, 一部1/4）

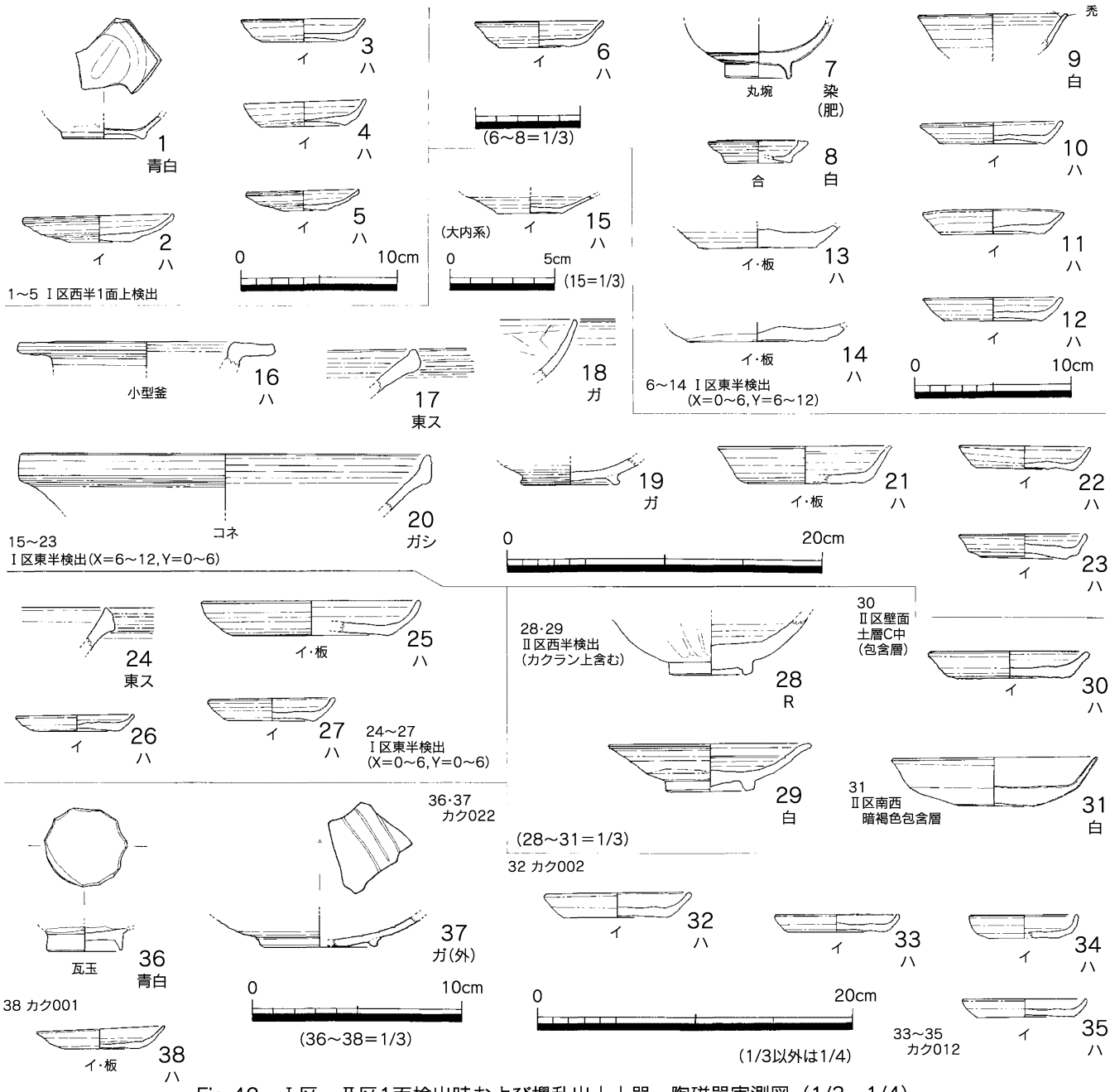


Fig.42　Ⅰ区・Ⅱ区1面検出時および攪乱出土土器・陶磁器実測図（1/3，1/4）

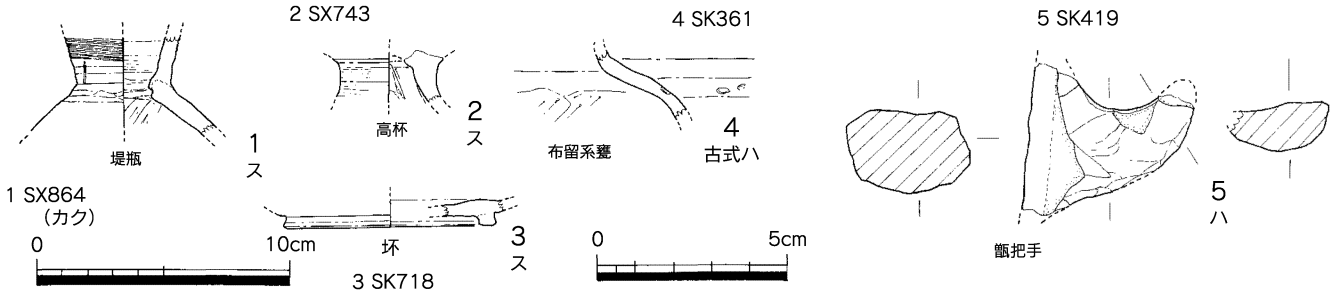


Fig.43　古代以前の土器実測図（1/3）

(Fig.35) 4は小型の瓦器埦、搬入か。**25・26**はいずれも13世紀代の陶器壺。**7・8**は12世紀代。出土遺構自体は近世の可能性があるが、中世遺物は同時期遺物がまとまって出土する傾向がある。**(Fig.36) 17**は陶器甕棺。**11**は土師器の銭瓶（貯金箱）の底部。近世。**24**は白磁の粗製品か。**(Fig.37)**

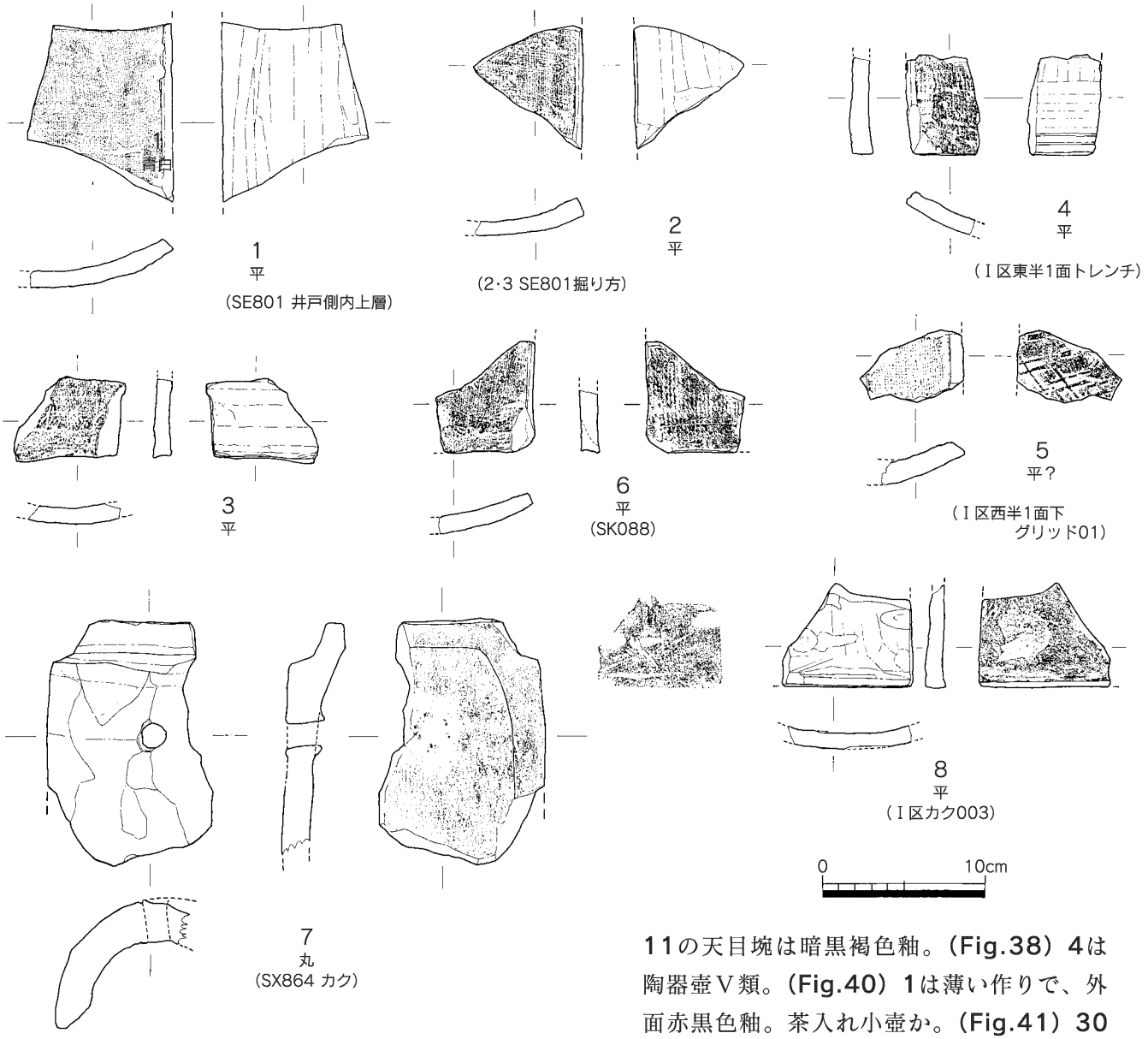


Fig.44　箱崎62次出土中世瓦実測図（1/4）

11の天目塊は暗黒褐色釉。**(Fig.38) 4**は陶器壺Ⅴ類。**(Fig.40) 1**は薄い作りで、外面赤黒色釉。茶入れ小壺か。**(Fig.41) 30**は緑釉陶器状であるが、青白磁の失敗品の可能性。**(Fig.43) 1～3の**須恵器のうち、**1**は7世紀、**2**は7～8世紀、**3**は8世紀。**4**は古式土師器の甕。**5**は7～8世紀の土師器。4･5は摩滅し、他も遺構に伴わない混入品であろう。箱崎遺跡の東側砂丘列から土砂とともに運ばれるなど、埋め立てに伴う客土中に含まれていたものか。**瓦類**は２箱程度出土し、中世瓦の一部を図示したが**(Fig.44)**、他に博多に多い**押圧文軒平瓦**が2片ある。瓦の出土は比較的少なく、妙徳寺の伽藍は調査範囲直近までは及んでいなかったとも考えられる。

３）金属製品（銅製品・銅銭，鉄製品ほか）

金属製品のうち、銅銭や鉄製品は互いに錆着して物理的に分離しがたいものもあり、また六道銭や複数種の金属製品が互いに絡み錆着しているものは、その状態に意義を見出してあえて分離していない場合がある。また和鋏や毛抜などが互いに錆着している場合、櫛や梳き櫛あるいは棺材の一部が錆着して木質が遺存する場合もある。**鉄製品**は一部を錆取り処理し、図示した**(Fig.45～47)**。鉄製品どうしや銅銭や櫛などと錆着している場合など、錆膨れにより外形線が不明なものが多く、Ｘ線写真も参照したが図は推定と模式図化部分が多い。鉄製品は図示したものや**表６**以外にも数多くある。近世土壙墓の副葬品となる**和鋏、毛抜、刀子**が他にもあるが、錆取り未処理のものは図化していない(報告

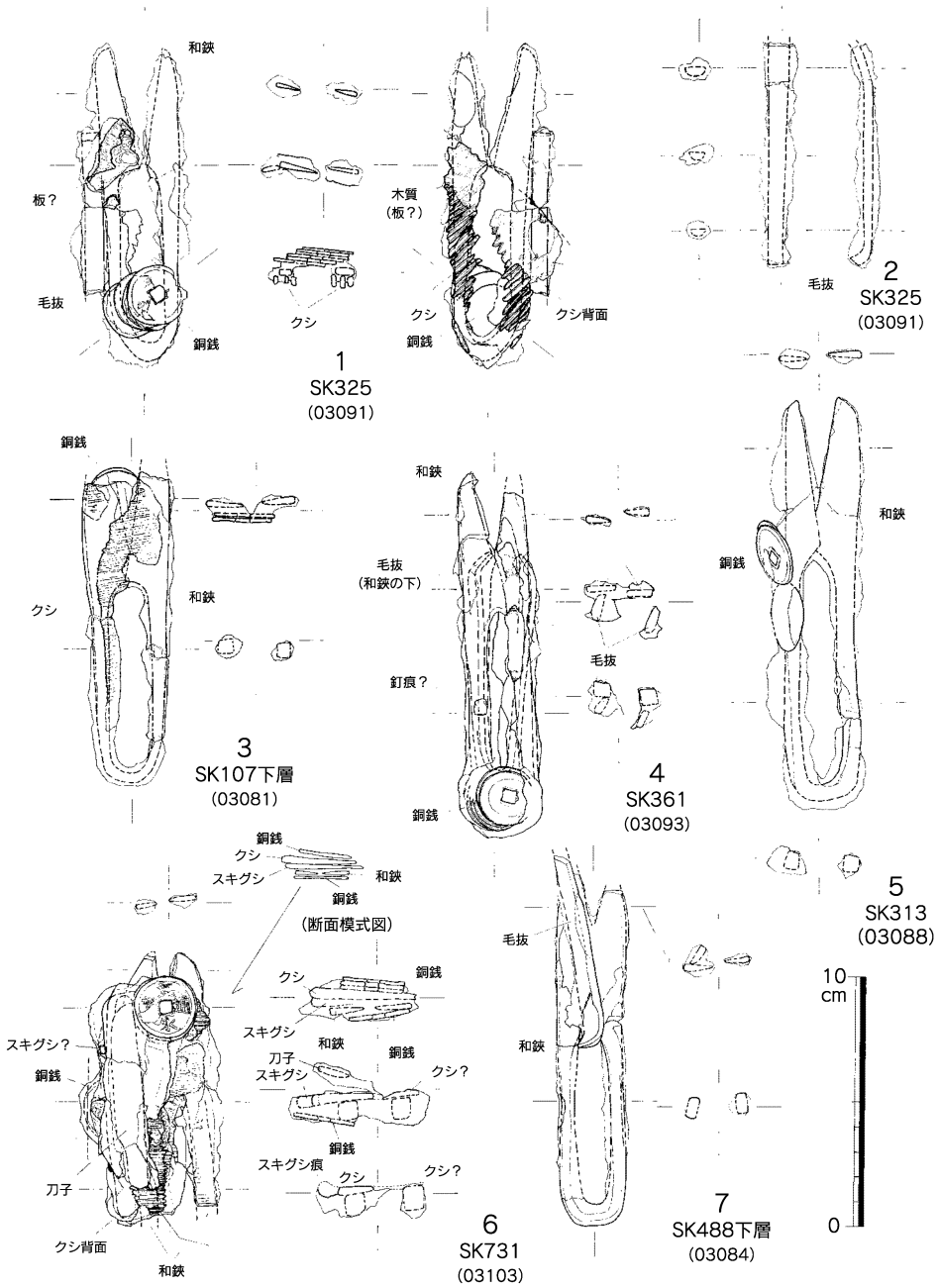


Fig.45　箱崎62次出土金属製品実測図Ⅰ（1/3）

遺構については、これらが出土している場合は記述した）。木桶（木樋）と関係する**鉄釘**も多くあるが、整理途上であり、今回は一切を割愛している。

銅製品は**表6**、**銅銭**は**表7・8**にまとめた。銅製品は**煙管**（キセル）（SK702のみ図化,Fig.46）以外の多くは図化した（Fig.47）。煙管は甕棺から多く出土し、比較的新しい時期に一般化する副葬品か。**銅鉦（臥鉦）**は仏具の打楽器で、鋳造品であろう（Fig.46－3）。脚（台）部が3箇所あるが一体鋳造か。ほぼ正円の体部である。**銅鏡（柄鏡）**は近世の**和鏡**で、中央に四菱文、その周囲に連弧文（六花文）がある（Fig.46－4）。X線写真により銘文が判明し、一部不鮮明（型崩れ？）だが、「天下一藤原作」（または「天王藤原作」？）と読める（PL.12－14）。表裏に布目痕跡あり。また近代の攪乱出土であるが、**金銅製の小佛像**（台座から頭部まで7.2㎝高）が出土しており、参考に紹介する（PL.4－11）。**銅銭**は（表7･8）、近世の**寛永通寶**が大半であるが（Fig.49）、一部に中国銭（14枚？）がある（Fig.48）。中国銭は全て北宋銭であり、同一種複数枚のセットで出土することはない。寛永通寶は**新寛永**（1697年以降）の字体が大部分だが、一部に**古寛永**（1636～1659年）の字体や、一般的な新寛永よりやや古い**「文」銭**（1668～1683年）のものがみられる。複数枚出土の場合、錆着して銭種不明のものも多いが、土壙墓への副葬（六道銭）は、一部が17世紀後半に遡る可能性も留保される。ただし、基本的には新寛永を含むのが大半であり、本遺跡では18世紀以降と見ておくのが確実か。枚数に異動ある場合もあるが、**六道銭**は文字通り**「六枚」セット**を基本とする場合が多い。さらに複数枚の銭塊の場合、周囲に布目痕（繊維痕）が認められることが一般的である。

4）有機質遺物

鉄製品（和鋏、毛抜ほか）などの金属遺物に錆着して、土壙墓の副葬品としての櫛、すき櫛（梳櫛）があり、また棺材痕跡の木質が付着遺存する場合がある。陶器甕棺内や近世土壙墓の一部（**SK701**の

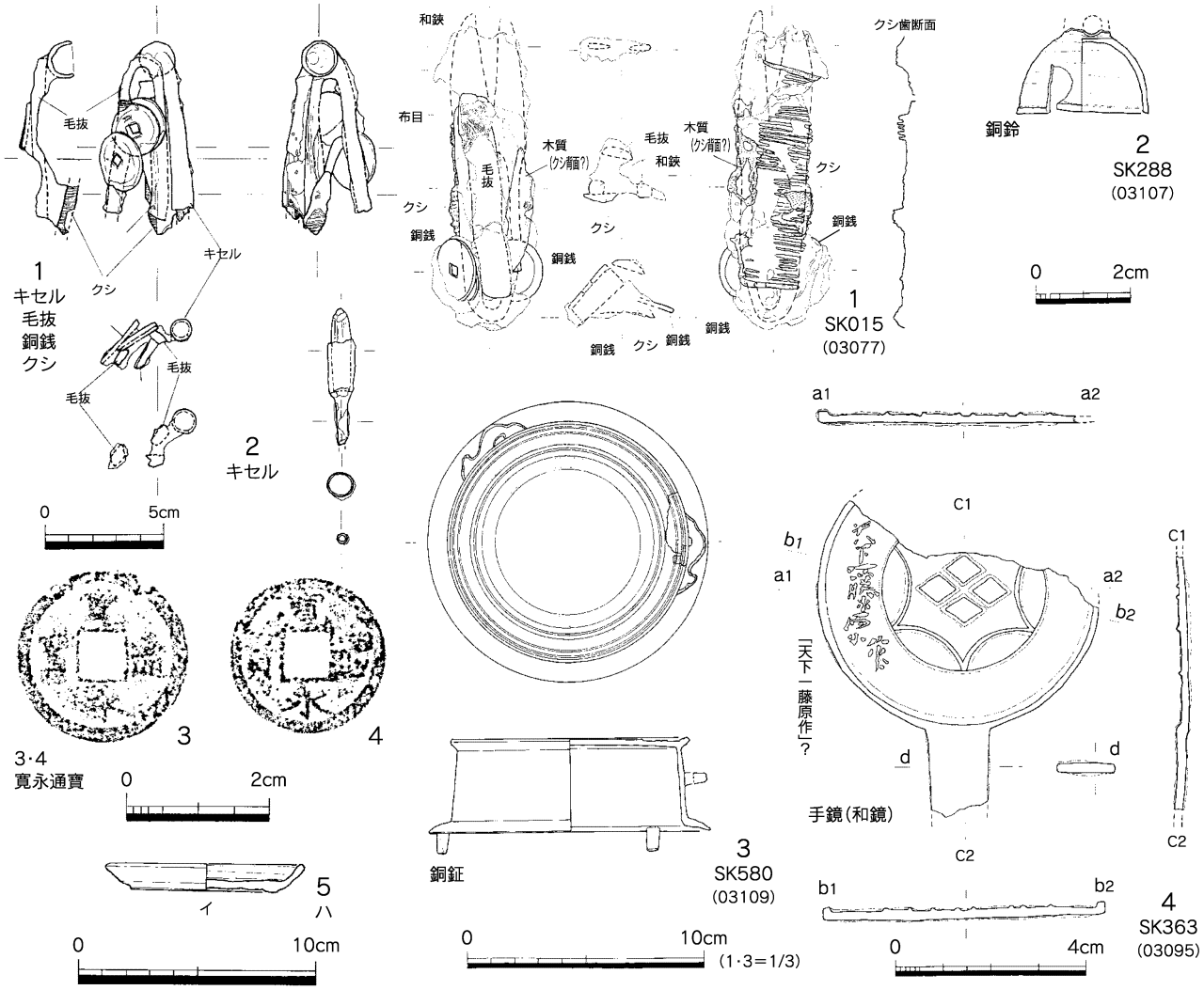
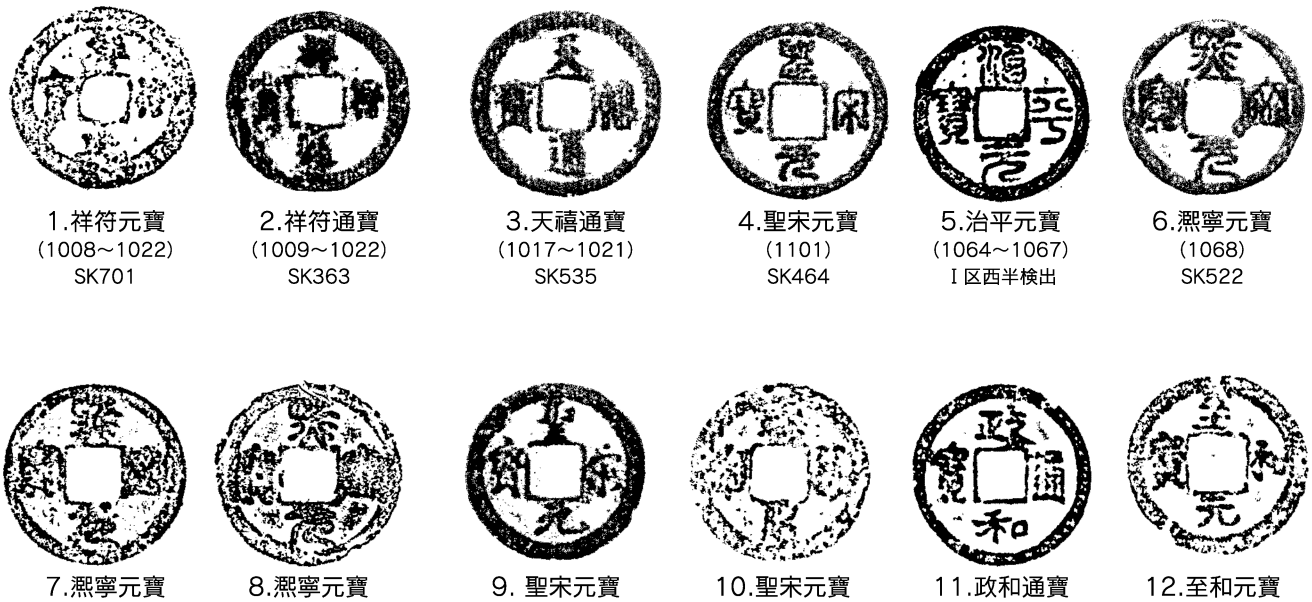


Fig.47 SK702出土金属製品・土器 (1/3, 銅銭は1/1)

Fig.46 箱崎62次出土金属製品実測図Ⅱ (1/3, 銅鈴・銅鏡は2/3)



1.祥符元寶
(1008～1022)
SK701

2.祥符通寶
(1009～1022)
SK363

3.天禧通寶
(1017～1021)
SK535

4.聖宋元寶
(1101)
SK464

5.治平元寶
(1064～1067)
Ⅰ区西半検出

6.淳寧元寶
(1068)
SK522

7.淳寧元寶
SX601

8.淳寧元寶
Ⅰ区1面上
(X=0～6, Y=0～6)

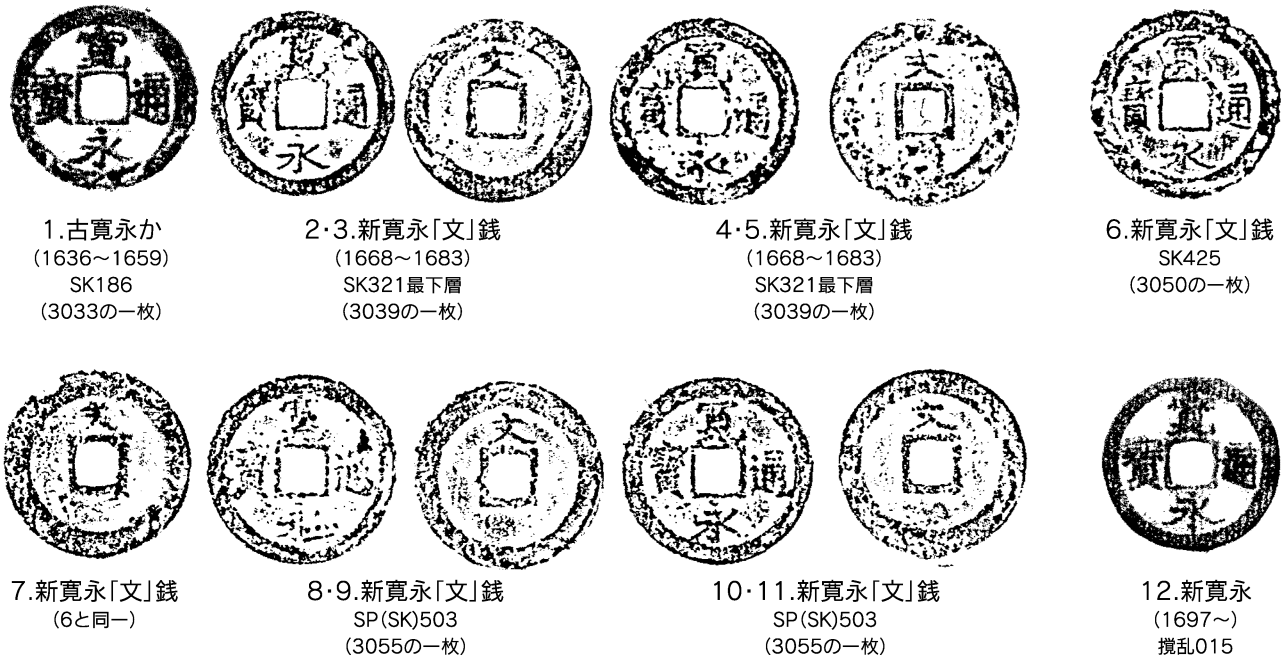
9. 聖宋元寶
SK202

10.聖宋元寶
SK538

11.政和通寶
(1111～1117)
Ⅰ区廃土

12.至和元寶
(1054～1055)
SK464

Fig.48 箱崎62次出土中国銭貨拓影 (1/1)



1.古寛永か
（1636～1659）
SK186
（3033の一枚）

2･3.新寛永「文」銭
（1668～1683）
SK321最下層
（3039の一枚）

4･5.新寛永「文」銭
（1668～1683）
SK321最下層
（3039の一枚）

6.新寛永「文」銭
SK425
（3050の一枚）

7.新寛永「文」銭
（6と同一）

8･9.新寛永「文」銭
SP(SK)503
（3055の一枚）

10･11.新寛永「文」銭
SP(SK)503
（3055の一枚）

12.新寛永
（1697～）
撹乱015

Fig.49　箱崎62次出土近世銭貨拓影（1/1）

遺物番号	遺構名	挿図または写真	種類	銭付着	櫛付着	備考	X線写真
3077	SK015	Fig.46-1	鉄製和鉄＋鉄製毛抜	3	○	布目	有
3106	SK097		針金状銅製品				
3081	SK107(下層)	Fig.45-3	鉄製和鉄＋鉄製毛抜＋鉄釘	3	○	SK107上中層は撹乱、下層は遺構か	有
3082	SK110		鉄製毛抜	6		寛永通寶x5付着	有
3083	SK170		鉄製和鉄＋鉄製毛抜	3		銭に布目	有
3107	SK181	Fig.46-2, PL.4-10	銅製鈴				
3084	SK188(下層)	Fig.45-7	鉄製和鉄＋鉄製毛抜	1		寛永通寶x1付着	有
3085	SK203		キセル(銅製煙管)				
3086	SK225		キセル(銅製煙管)				
3108	SK228		針金状銅製品				
3089	SK321		鉄製和鉄	3			有
3090	SK324		鉄製毛抜	6		寛永通寶x6付着	有
3091	SK325	Fig.45-1･2	鉄製和鉄＋鉄製毛抜	6?	○		有
3092	SK341(下層)		板状鉄製品	6		寛永通寶x6付着、布目	有
3093	SK361(№03)	Fig.45-4	鉄製和鉄＋鉄製毛抜	2		毛抜は大型	有
3094	SK362(№07)		鉄製和鉄	1		寛永通寶x1付着	
3095	SK363(№01)	Fig.46-4, PL.4-1･2	手鏡(銅製柄鏡)			X線写真PL.12-14	有
3096	SK363		キセル(銅製煙管)				
3097	SK415		鉄製和鉄	5	○	布目	
3099	SK476		キセル(銅製煙管)				
3100	SK477		キセル(銅製煙管)				
3109	SK580	Fig.46-3, PL.4-5	銅鉦(臥鉦)			仏具(楽器の一種)	
3102	SK702 (№16･17･19)	Fig.47-1, PL.4-9	キセル(銅製煙管)＋鉄製毛抜	5	○	寛永通寶x2付着	有
3122	SK702(下層)	Fig.47-2	キセル(銅製煙管)				
3103	SK731	Fig.45-6	鉄製和鉄＋鉄製毛抜	4?	○		有
3072	ST001(甕棺墓)		鉄製和鉄＋鉄製毛抜			和鉄は小型	
3073	ST002(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)			布目	
3074	ST007(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)				
3075	ST009(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)				
3076	ST010(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)	5		寛永通寶x4	有
3078	ST023(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)	6		寛永通寶x2	有
3079	ST024(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)				
3080	ST028(甕棺墓)		キセル(銅製煙管)			2個体	
3104	1面上 (x=0～6,y=0～6)		キセル(銅製煙管)				
3105	1面上 (x=0～6,y=0～6)		キセル(銅製煙管)				
3112	撹乱001 (ST013-ST017間)	PL.4-11	不動明王像 (鍍金小仏像)			近代以降か	
3088	撹乱014(SK313)	Fig.45-5	鉄製和鉄	3			有
3087	撹乱016(SK285)		キセル(銅製煙管)				
3110	撹乱SK869(Ⅱ区)		針金状銅製品				

表6　箱崎62次出土金属製品一覧表(銅製品関連のみ､銅銭のみは除く)

底板など）に、蓋材や木桶底板などの棺板材が遺存していたものがある。その他、銅製品（銅鏡、銅銭)、鉄製品の一部（和鋏＋毛抜など）に布目痕（繊維痕）が残るものが少なからずあり、六道銭などのこれらの**副葬品の多くは麻布袋などに入れられて埋納**していた可能性が高い。

遺物番号	遺構名	挿図または写真	枚数	銅銭の種類と各枚数	備考	出土状態
3077	SK015		3	判読不能3	布目	他の遺物と付着(未分離)
3020	SK016		5	寛永通寶4＋判読不能3		塊状(分離処理)
3025	SK078		1	判読不能1		
3026	SK097		7	寛永通寶6＋｢□□元寶｣1		6枚塊状(分離処理)
3027	SK099		6	判読不能6	繊維痕	塊状(未分離)
3028	SK103		1	寛永通寶1	古寛永含むか	
3029	SK103		4	寛永通寶4	SK103は合計5枚	3枚塊状(分離処理)
3081	SK107(下層)		3	判読不能3		他の遺物と付着(未分離)
3082	SK110		6	寛永通寶5＋判読不能1	新寛永＋古､｢文｣銭	他の遺物と付着
3030	SK162		6	判読不能1＋寛永通寶5		塊状(未分離)
3031	SK162		6	判読不能6	SK162は合計12枚	塊状(未分離)
3083	SK170		3	判読不能3	銭に布目痕	他の遺物と付着(未分離)
3033	SK186	Fig.49-1(寛永)	6	寛永通寶2＋判読不能4	古寛永含むか	塊状(未分離)
3032	SK186？ (SK353上層？)		1	寛永通寶1		破片
3084	SK188(下層)		1	寛永通寶1		他の遺物と付着(未分離)
3034	SK202	Fig.48-9	1	聖宋元寶1		
3035	SK223		6	寛永通寶6		塊状(分離処理)
3036	SK269		1	｢□□通□｣破片1		破片
3037	SK274		6	寛永通寶6		塊状(分離処理)
3038	SK280		5	寛永通寶5＋判読不能4		塊状(未分離)
3089	SK321		3	判読不能3	古寛永含むか	他の遺物と付着
3039	SK321 (最下層､図･写真)	Fig.47-2～5	9	寛永通寶3＋判読不能6	｢文｣銭含む	塊状(未分離)
3040	SK323		6	寛永通寶6	繊維痕	塊状(分離処理)
3090	SK324		6	寛永通寶6	｢文｣銭含む、新寛永主体	他の遺物と付着(未分離)
3091	SK325		6?	判読不能6？		他の遺物と付着(未分離)
3041	SK334		6	判読不能6		塊状(未分離)
3092	SK341		6	寛永通寶6	布目痕	他の遺物と付着
3093	SK361(№03)		2	判読不能2	鉄製毛抜(大型)に付着	他の遺物と付着(未分離)
3042	SK362		6	寛永通寶6	繊維痕	4枚塊状(分離処理)
3043	SK362		1	寛永通寶1		
3044	SK362(№01)		4	寛永通寶4	古寛永含むか	
3045	SK362 (№03･05･06の中)		1	寛永通寶1	新寛永	
3046	SK362(№07)		5	寛永通寶5	新寛永	塊状(分離処理)
3094	SK362(№07)		1	寛永通寶1	新寛永	他の遺物と付着(未分離)
3047	SK362(№09)	PL.4-8	1	判読不能1(｢元｣？)		
3048	SK363	Fig.48-2	2	祥符通寶1＋｢□治通□｣1		
3097	SK415		5	判読不能5	布目痕	他の遺物と付着(未分離)
3098	SK424		13	判読不能13		10枚塊状(未分離)
3050	SK425	Fig.49-6･7	5	寛永通寶5	｢文｣銭含む	塊状(分離処理)
3051	SK441	PL.4-7	6	寛永通寶2＋判読不能4	繊維痕	塊状(分離処理)
3052	SK447	Fig.48-12	1	至和元寶1		
3053	SK464	Fig.48-4	1	聖宋元寶1		
3054	SK476		6	寛永通寶1＋判読不能5	繊維痕	塊状(未分離)
3055	SK503	Fig.49-8～11	6	寛永通寶6	｢文｣銭含む	塊状(分離処理)
3056	SK522	Fig.48-6	1	熙寧元寶1		
3057	SK535	Fig.48-3	1	天禧通寶1		
3058	SK536		25	寛永通寶1＋判読不能24	各5･2･4･14枚の塊	4つの塊状(未分離)
3059	SK538	Fig.48-10	1	聖宋元寶(？)1		
3060	SK549		6	判読不能6		塊状(未分離)
3061	SK552		4	寛永通寶4	古寛永含むか	塊状(分離処理)
3062	SK580		6	判読不能6		塊状(未分離)
3063	SX601 (Ⅰ区南西1面下)	Fig.48-7	1	熙寧元寶1		
3064	SK609		2	寛永通寶2	｢文｣銭含む	塊状(未分離)
3065	SK701	Fig.48-1	6	寛永通寶5＋祥符元寶1	新寛永か	塊状(分離処理)

表7　箱崎62次出土銅銭一覧表Ⅰ

遺物番号	遺 構 名	掲図または写真	枚数	銅銭の種類と各枚数	備　考	出土状態
3101	SK702	Fig.47-3･4	2	寛永通寶2	新寛永2	土師器小皿の中
3102	SK702(№16・17･19)		3	判読不能3		他の遺物と付着(未分離)
3066	SK702(板材付着，№23)		1	判読不能1	棺材付着	
3067	SK720		6	判読不能6		塊状(未分離)
3068	SK721		5	寛永通寶5	新寛永5か	塊状(分離処理)
3103	SK731		4?	判読不能4？		他の遺物と付着(未分離)
3076	ST001		5	寛永通寶4＋判読不能1	寛永×4	他の遺物と付着
3014	ST001甕棺内		3	寛永通寶2＋判読不能1		塊状(分離処理)
3123	ST003甕棺内		3	判読不能3		
3015	ST003甕棺内		3	寛永通寶1＋判読不能2		塊状(分離処理)
3016	ST007甕棺墓ホリ方		6	判読不能4		5枚塊状(未分離)
3017	ST008甕棺内ほか		5	寛永通寶5		塊状(分離処理)
3018	ST009甕棺内		5	寛永通寶5		4枚塊状(分離処理)
3019	ST012甕棺内		5~6	判読不能5（6？）	板材(蓋？)付着	塊状(未分離)
3078	ST023甕棺内		6	寛永通寶2＋判読不能4		他の遺物と付着
3021	ST023甕棺内		1	判読不能1		
3022	ST028甕棺内		5	寛永通寶5		塊状(分離処理)
3023	ST029甕棺内		1	判読不能1		
3024	ST031下部(甕棺内？)		4	寛永通寶4	繊維痕か	2枚塊状(分離処理)
3111	遺構不明		1	一銭銅貨1（近代）		
3008	Ⅰ区１面検出時(X=6~12，Y=0~6)		1	寛永通寶1		
3006	Ⅰ区１面上(X=0~6，Y=0~6)		6	寛永通寶4＋判読不能2		塊状(分離処理)
3007	Ⅰ区１面上(X=0~6，Y=0~6)	Fig.48-8	6	寛永通寶5＋熙寧元寶1		塊状(分離処理)
3002	Ⅰ区重機廃土	Fig.48-11	1	政和通寶1		
3004	Ⅰ区西半検出時	Fig.48-5	6	判読不能5＋治平元寶1		5枚塊状(未分離)
3003	Ⅰ区南辺流出土(Y=6~12)		4	寛永通寶4＋判読不能1		塊状(分離処理)
3069	Ⅱ区西半検出時(攪乱多表層)		1	判読不能1		
3013	Ⅰ区西半１面下グリット05	PL.4-6	10?	寛永通寶2＋判読不能8？	繊維痕	塊状(未分離)
3005	Ⅰ区東側遺構か(廃土中)		5	寛永通寶4＋判読不能1		塊状(分離処理)
3009	Ⅰ区攪乱		7	寛永通寶7		6枚塊状(分離処理)
3010	攪乱011（+SK211）		4	寛永通寶2＋判読不能1＋「□□□寶」破片1		塊状(分離処理)
3011	攪乱012		6	寛永通寶5＋判読不能1		塊状(分離処理)
3012	攪乱015	Fig.49-12	1	寛永通寶1		
3049	攪乱025（SK364）		7	寛永通寶4＋判読不能1＋「□□通□」破片1"		6枚塊状(分離処理)
3070	攪乱SX849（Ⅱ区）		1	寛永通寶1		
3071	攪乱SX857（Ⅱ区）		1	「□□通□」破片1		
3001	土山（廃土）出土		2	寛永通寶2		

表８　箱崎62次出土銅銭一覧表Ⅱ

５）ガラス製品

近世土壙墓**SK702**から**ガラス丸玉**が出土した（Fig.50）。４個のみの検出だが、**数珠玉**であろう。いすれも黄白色に風化した部分が多く、未分析だが鉛ガラス系か。孔に直交するような気泡の分布や、一部（１）に螺旋状条痕がみられることから、いずれも巻き付け技法による製作と推定される。

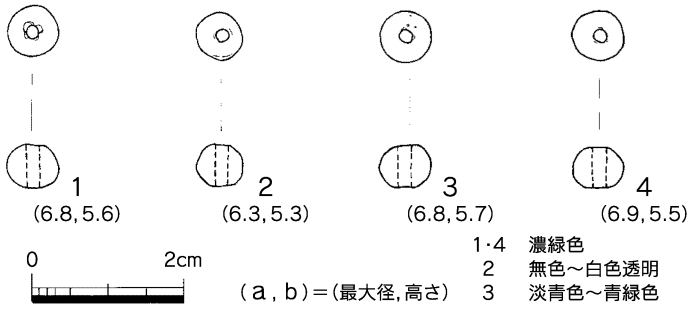


Fig.50　SK702出土ガラス丸玉実測図（1/1）

６）動物遺存体（人骨片を含む）

・箱崎遺跡第62次調査出土動物遺存体について

箱崎62次調査地点は、近年まで近隣の寺院(妙徳寺)を菩提寺とする墓地区画内に位置しており、近世以降墓域として利用されてきたため、出土した動物遺存体の多くは人骨であった。また小片で同定できない骨の多くも人骨である可能性が高いと思われる。ヒト以外の動物としてはウマ、ウシ、イルカ・クジラ類が出土した。**05003**（以下、遺物登録番号）（Ⅰ区1面下）のウマは歯冠がほとんど摩耗した老齢のウマで、左下顎を除く歯の多くが出土していることから、自然死後に埋葬された可能性が高い。所属時期は近世の可能性が高いが（包含層とするが検出できなかった遺構覆土の可能性がある)、近世には福岡藩革座による弊牛馬処理が行われており、当時の牛馬遺体の集積の在り方を示す例である。今後詳しい時期が判る出土例の増加を期待したい。**05004**（Ⅰ区1面下）のウマは下顎歯が左右揃って出土した。出土時には下顎体も残っていたにもかかわらず（取り上げ後細片化）上顎歯が全くないことから、解体後に廃棄されたもので**05043**（SX625）も同様に考えられる。（屋山 洋）

表９　箱崎62次出土動物遺存体一覧表Ⅰ(人骨片含む)

登録番号	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	整理番号	時代
082505001	Ⅰ区2面下包含層(下)暗色砂層 X=3~5,Y=15~17	哺乳類	ウシ?	中足骨？		幹部片のみ		不明	不明	不明	表面遺存不良	001	近世？
082505002	Ⅰ区2面下包含層(下)黄色砂~暗色砂面 X=5~7,Y=12~15	哺乳類	不明	長骨		幹部小片のみ		不明	調査時の傷かも	不明	表面遺存不良	002	近世？
082505003	Ⅰ区2面下包含層(下)灰黄砂~暗色砂層 X=5~7,Y=12~15	哺乳類	ウマ	上顎臼歯5本、左上顎臼歯6本、切歯3本、右下顎臼歯3本				老獣	不明	不明	歯冠がほとんど摩耗している同一個体か	003	近世？
082505004		哺乳類	不明	骨片					調査時の擦痕か			065	近世？
082505004		哺乳類	ウマ	下顎	左	下顎枝欠損	P2~M3あり	歯冠高 M2 4.3cm、P2 2.3cm	不明	不明	下顎体細片化	066	近世？
082505004		哺乳類	ウマ	下顎	右	下顎枝欠損	P2、M2、M3	歯冠高 M2 4.4cm、M3 4.8cm		不明	遺存不良　表面観察不可	067	近世？
082505004	Ⅰ区2面下包含層(下)暗色砂層 X=5~7,Y=15~17	哺乳類	ウマ	切歯		I1~I3と歯茎のみ1点						068	近世？
082505004		哺乳類	ウマ	犬歯	左右	2本						069	近世？
082505004		哺乳類	ウシ･ウマ	下顎体		細片						070	近世？
082505004		哺乳類	ウシ･ウマ	長骨								071	近世？
082505004		哺乳類	ウシ･ウマ									072	近世？
082505004		哺乳類	ウシ･ウマ	下顎		小片						073	近世？
082505004		哺乳類	ウシ	下顎	右	歯M1~M3	下顎枝残	歯冠高 M1 1.5cm、M2 2.5cm、M3 3.7cm				074	近世？
082505005	Ⅰ区カクラン003下部(北)　別遺構か	哺乳類	イルカ･クジラ類	椎骨		椎体の一部のみ		骨化済み	有り	なし		004	近世？
082505005		哺乳類	ウシ･ウマ	上腕骨		関節関節面？	小片	不明	有り	不明		005	近世~近代？
082505006	Ⅰ区カクラン012下部(別遺構か)	哺乳類	ウマ？	中足骨？	左？	近位端か	細片化	骨化済み	有り	不明	ウマか？	006	近世~近代？
082505007	Ⅰ区カクラン012(近世甕棺片多数)	哺乳類	イルカ･クジラ類	椎骨		椎体の一部		未骨化	なし	なし		007	近代

表10　箱崎62次出土動物遺存体一覧表Ⅱ（人骨片含む）

082505008	Ⅰ区１面下グリット０４	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		頭頂骨	側頭骨	縫合線残る	なし	不明		００８	中～近世
082505009	Ⅰ区１面下グリット０５	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		頭頂骨か		不明	不明	不明	遺存不良	００９	中～近世
082505010	Ⅰ区１面下グリット０６	哺乳類	不明								細片化	０１０	中～近世
082505011	Ⅰ区ＳＴ019(近世墓棺)	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		小片		未縫合	不明	不明		０１１	19C前～中
082505012		哺乳類	ヒト	下顎	左	関節突起		骨化済み	なし		黒色化	０１２	18C末～19C前
082505012	Ⅰ区ＳＴ023(近世墓棺)	哺乳類？	不明								鹿角基部に似るがスカスカの髄状	０１３	18C末～19C前
082505012		哺乳類	不明	長骨		幹部片		不明	なし			０１４	18C末～19C前
082505013	Ⅰ区近世墓棺ST023周囲＋棺内上層	哺乳類		小片のみ								０１５	18C末～19C前
082505014	Ⅰ区ＳＴ028(近世墓棺)	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭部		縫合線が消滅しかけ	不明	不明		０１６	18C末～19C中
082505015	Ⅰ区ＳＴ031(近世墓棺)	哺乳類	ヒト	上腕骨		遠位部	遠端欠損	不明	なし	不明		０１７	18C代か
082505016	Ⅰ区ＳＴ031下部	哺乳類		小片のみ								０１８	18C代か
082505017	Ⅰ区SK064 or SK375	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭部	小片	不明	なし	なし		０１９	近世～近代
082505018	Ⅰ区SK081	哺乳類	不明	小片のみ								０２０	近世
082505019	Ⅰ区SK099(or SK126？)	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭部小片		不明	不明	不明		０２１	近世
082505020	Ⅰ区ＳＴ023(近世墓棺)	哺乳類	不明					不明	なし	黒色化		０２２	18C後～19C前
082505021	Ⅰ区SK107上層(カクラン？)	哺乳類	不明	小片のみ								０２３	近代？
082505022	Ⅰ区SK123(カクラン？)	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	不明	不明		０２４	近代？
082505023	Ⅰ区SK140	哺乳類	ヒト	頭蓋骨	左	頬骨		骨化済み	なし	なし		０２５	近世
082505024	Ⅰ区SK153	哺乳類	ヒト	頭蓋骨	左	側頭骨		骨化済み	なし			０２６	近世
082505025	Ⅰ区SK159	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭骨小片		不明				０２７	近世
082505026	Ⅰ区SK162	哺乳類	ヒト	軸椎		細片化		不明	不明	不明	遺存不良	０２８	近世
082505027	Ⅰ区SK169(カクラン)	哺乳類	ヒト	下顎		オトガイ部のみ		不明	なし			０２９	近代
082505028	Ⅰ区SK181(カクラン？)下層(未掘)	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭部		不明	なし			０３０	近代？
082505029	Ⅰ区SP227(or SK228？)	哺乳類	不明	長骨		小片のみ		不明	不明	不明	細片化	０３１	近世
082505030	Ⅰ区SK237(カクラン？)	不明	不明			粉状						０３２	近代
082505031	Ⅰ区SK238	哺乳類	ヒト？	頭蓋骨		小片		不明	なし			０３３	近世
082505032	Ⅰ区SK240＋SK241(カクラン？)	哺乳類	ヒト？	頭蓋骨		小片		不明				０３４	近代
082505033	Ⅰ区SK244	哺乳類	ヒト	頭蓋骨		後頭部		不明				０３５	近世
082505034	Ⅰ区SK362(近世土壙墓)　Ⓑ	哺乳類	ヒト	切歯		3～4本分の破片		永久歯			青色	０３６	18C代
082505035	Ⅰ区SK362(近世土壙墓)　Ⓑ　一括	哺乳類	ヒト	切歯		歯冠　1個					青色	０３７	18C代
082505036	Ⅰ区SK367	哺乳類	不明	長骨		幹部細片		不明			小動物による咬痕あり	０３８	(17C？～)18C
082505037	Ⅰ区SK401(近世墓棺)	哺乳類	ヒト	頭骨小片				不明				０３９	19C？
082505038	Ⅰ区SK490	哺乳類	不明			細片		不明				０４０	近世？
082505039	Ⅰ区SK536	哺乳類	不明	肋骨		小片		不明		白色化		０４１	17C末～18C代
082505041	Ⅰ区SK580(近世土壙墓)一括	哺乳類	不明	長骨		小片		不明	なし			０４２	18C代
082505042	Ⅰ区SX606下部包含層(暗褐色砂)	哺乳類	不明	長骨		小片		不明				０４３	13～14世紀？
082505043	Ⅰ区SX625	哺乳類	ウマ	右下顎歯		2本と小片1点		歯冠高4.5cm (1本のみ計測可)			P3～M2のどれか	０４４	中世？
082505043		哺乳類	ウマ	切歯		破片　5本以上		歯冠高4cm弱程度				０４５	中世？
082505043		哺乳類	ウマ	下顎体		細片化		不明	不明	不明		０４６	中世？
082505045	Ⅰ区SK658下層(木枠内)	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体のみ		骨化済み	不明		遺存不良	０４７	中世か
082505046	Ⅰ区SK664	哺乳類	ヒト	頭骨小片				不明				０４８	近世？
082505047	Ⅰ区SK677	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	不明		遺存不良	０４９	近世？
082505048	Ⅰ区SK701(近世土壙墓)	哺乳類	ヒト	頭骨		小片		不明	不明		遺存不良	０５０	18C代
082505049	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－01	哺乳類	ヒト	頭骨		後頭部小片		不明	不明			０５１	17C末～18C前
082505050	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－02･04	哺乳類	不明					骨化済み	不明		遺存不良	０５２	17C末～18C前
082505051	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－05	哺乳類	ウシ･ウマ	長骨		幹部小片		不明	なし		遺存不良	０５３	17C末～18C前
082505052	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－06	哺乳類	ウシ･ウマ？	橈骨？		端部		不明	不明		遺存不良	０５４	17C末～18C前
082505053	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－07	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	なし			０５５	17C末～18C前
082505054	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－14	哺乳類		橈骨？								０５６	17C末～18C前
082505056	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－25	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	不明		遺存不良	０５７	17C末～18C前
082505057	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)－26	哺乳類	不明	長骨				不明	不明		緻密質が粗く海獣類の可能性がある	０５８	17C末～18C前
082505058	Ⅰ区SK702(近世土壙墓)下層	哺乳類	ヒト	頭骨		小片	長骨片 湿じる	不明	不明			０５９	17C末～18C前
082505059	Ⅰ区SK740黒褐色砂包含層	哺乳類	不明					不明	不明	有り	変色	０６０	13C前後
082505060	Ⅲ区SD802-Ⅲ区	哺乳類	ウシ	歯		小片		不明	不明			０６１	12～13C
082505061	Ⅱ区SP807～811東側壁･土砂流出	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明	不明	なし	ネズミの咬痕有り	０６２	13C前後
082505062	Ⅱ区ＳＴ845(近世墓棺)掘り方上層	哺乳類	ヒト	基節骨		近位端欠損		遠端骨化済み	なし	なし		０６３	18C末～19C初
082505063	Ⅱ区SK847(近世墓棺？)	哺乳類	不明	長骨		幹部小片		不明		白色化	表面の一部を削り平坦面を為す	０６４	18C後～19C前

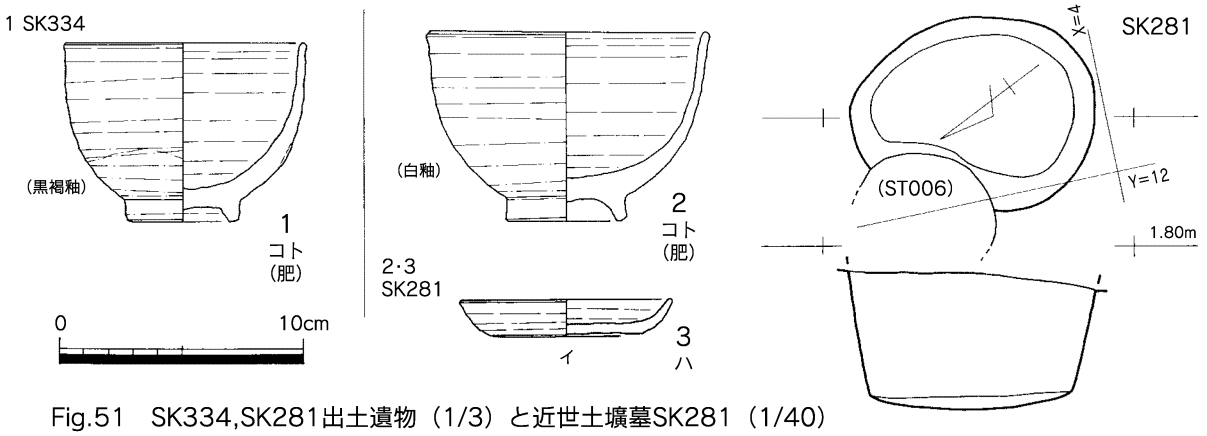


Fig.51　SK334,SK281出土遺物（1/3）と近世土壙墓SK281（1/40）

Ⅲ．まとめ

結果的に近世墓群の調査が主体となった。近世墓の初現は17世紀中葉の可能性があるが（**SK281**, Fig.51）、六道銭の寛永通寶などから18世紀代以降の造営が大部分であろう。甕棺葬への移行は、他の遺跡よりも遅く18世紀後半以降である。土師器皿２枚セットのみを副葬する墓は多いが、六道銭や他の金属製品を副葬する厚葬墓はごく一部で、埋葬者の地位や階層、富を反映するか。18世紀代以降の土師器坏・皿編年の細分が課題として残る。その他、落込み**SX001**の成因や性格も課題であろう。

PL.1　1．調査区空撮全体写真（合成写真・上が東）

PL. 2

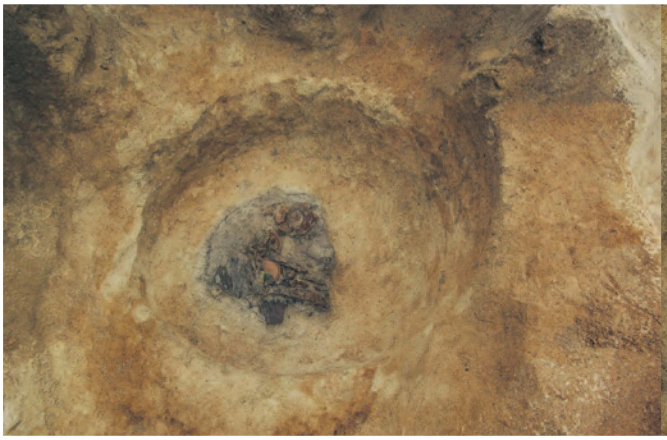
1. Ⅰ区西半２面遺構調査状況（北東から）

2. SK362近世土壙墓出土状況（西から）

3. SK362遺物出土状況近景（北から）

4. SK580近世土壙墓出土状況（南から）

5. SK580遺物出土状況近景（西から）

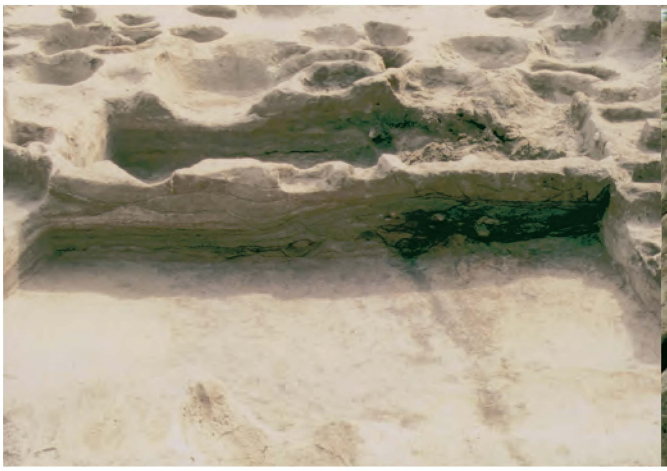


1．SK702近世土壙墓出土状況（北西から）

2．SK702遺物出土状況近景（南西から）

3．SK363近世土壙墓出土状況（北から）

4．落込みSX830土層断面（北から）



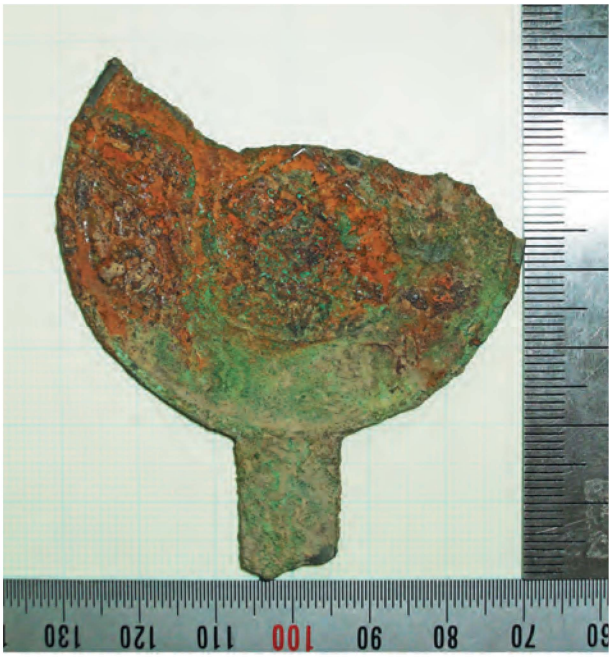
5．Ⅰ区西半中央２面下トレンチ土層断面（北東から）

6．Ⅰ区東半１面下トレンチ北壁土層断面西側（南から）

7．Ⅰ区東半１面下トレンチ北壁土層断面中央（南から）

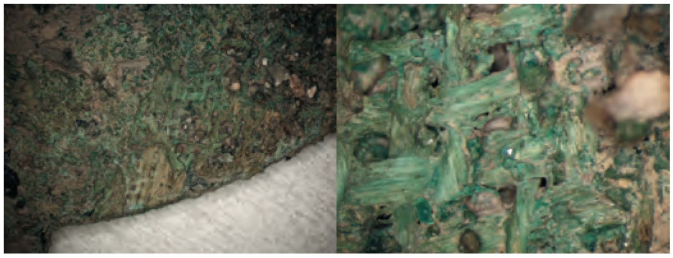
8．Ⅰ区東半１面下トレンチ北壁土層断面東側（南西から）

PL. 4



1. SK363出土和鏡 背面（Fig.46－4）

2. 同左，表面（布目痕顕著）



3. 和鏡表面一部拡大　4. 同左布目痕繊維拡大

6. 銅銭塊（六道銭）側面繊維痕（3013）　7. 銅銭塊（六道銭）表面繊維痕（3051）

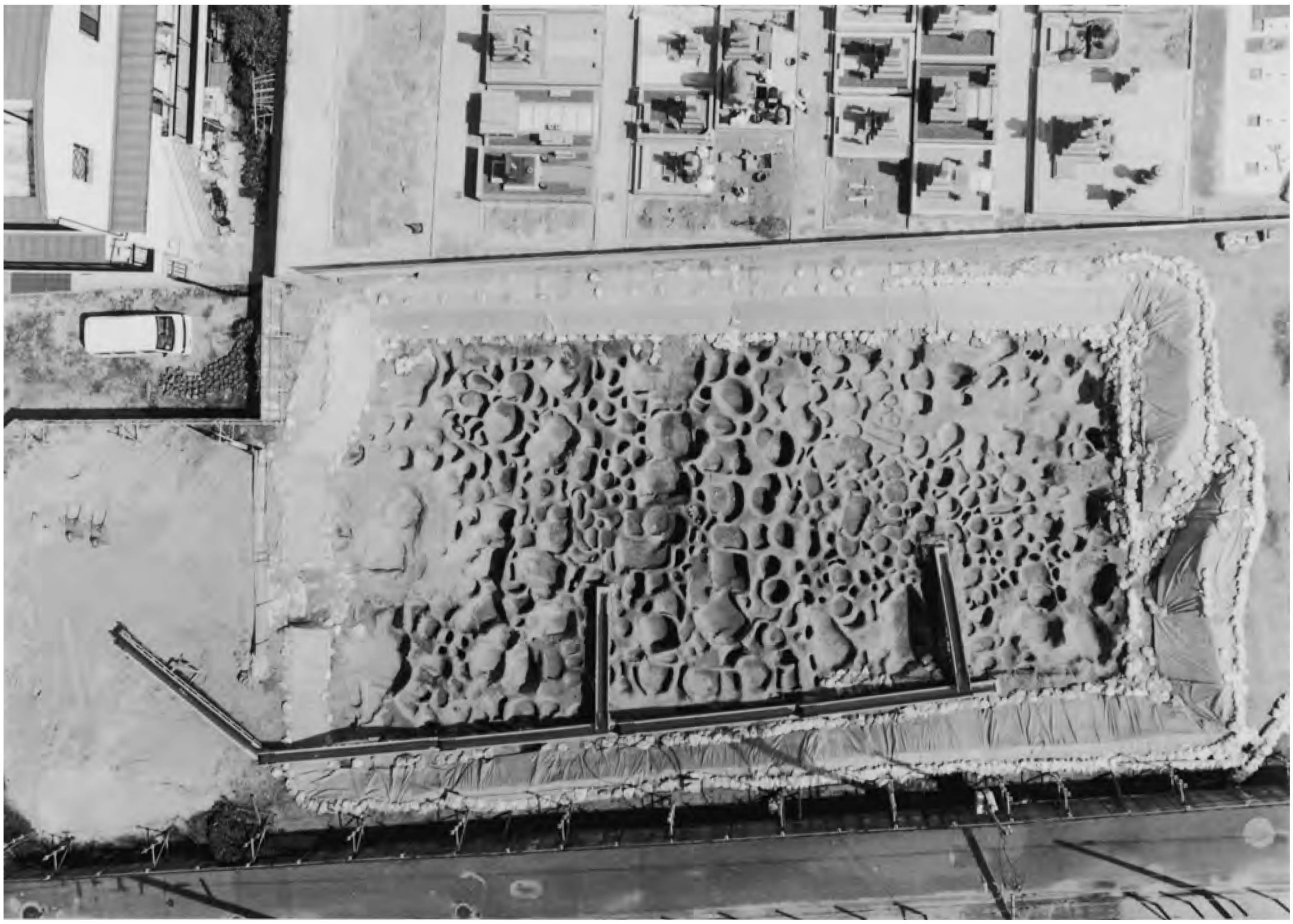
5. SK580出土銅製臥鉦（Fig.46－3）

8. SK362出土銅銭＋和鏡（布目痕）

9. SK702出土キセル・毛抜・銅銭（47-1）

10. K181出土銅製鈴（46－2）

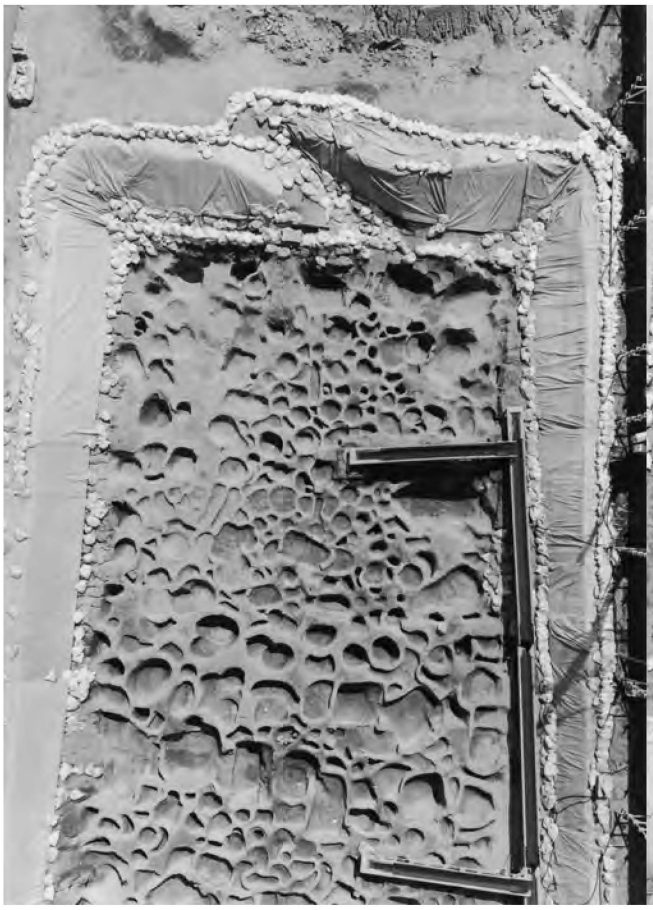
11. 攪乱001出土鍍金
銅製小仏像（不動明王像か）



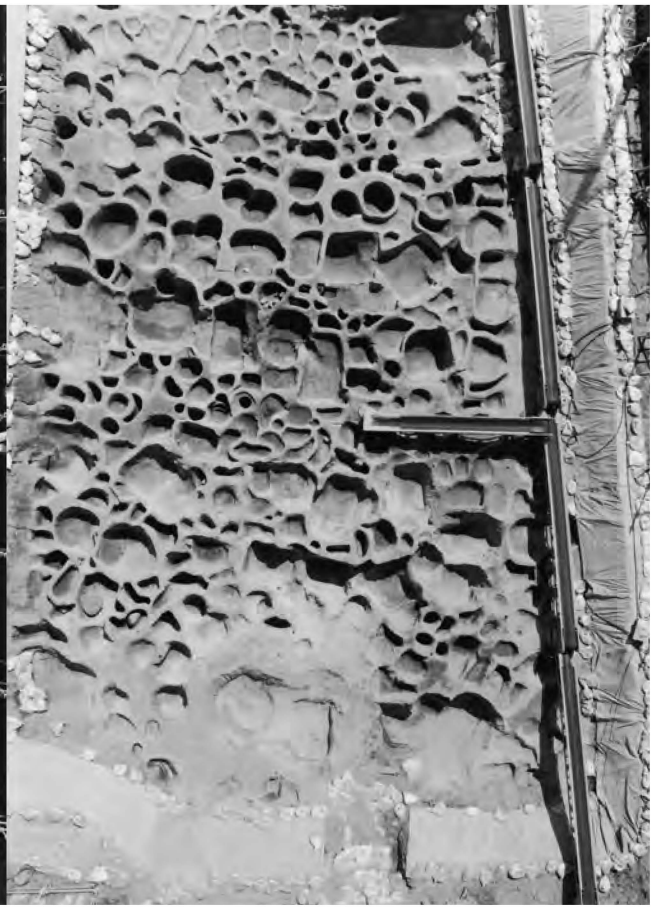
1．Ⅰ区（1面）調査状況全景（空撮）（上が南）

2．Ⅰ区調査状況遠景（空撮）（西から）

3．Ⅱ区調査状況遠景（空撮）（西から）

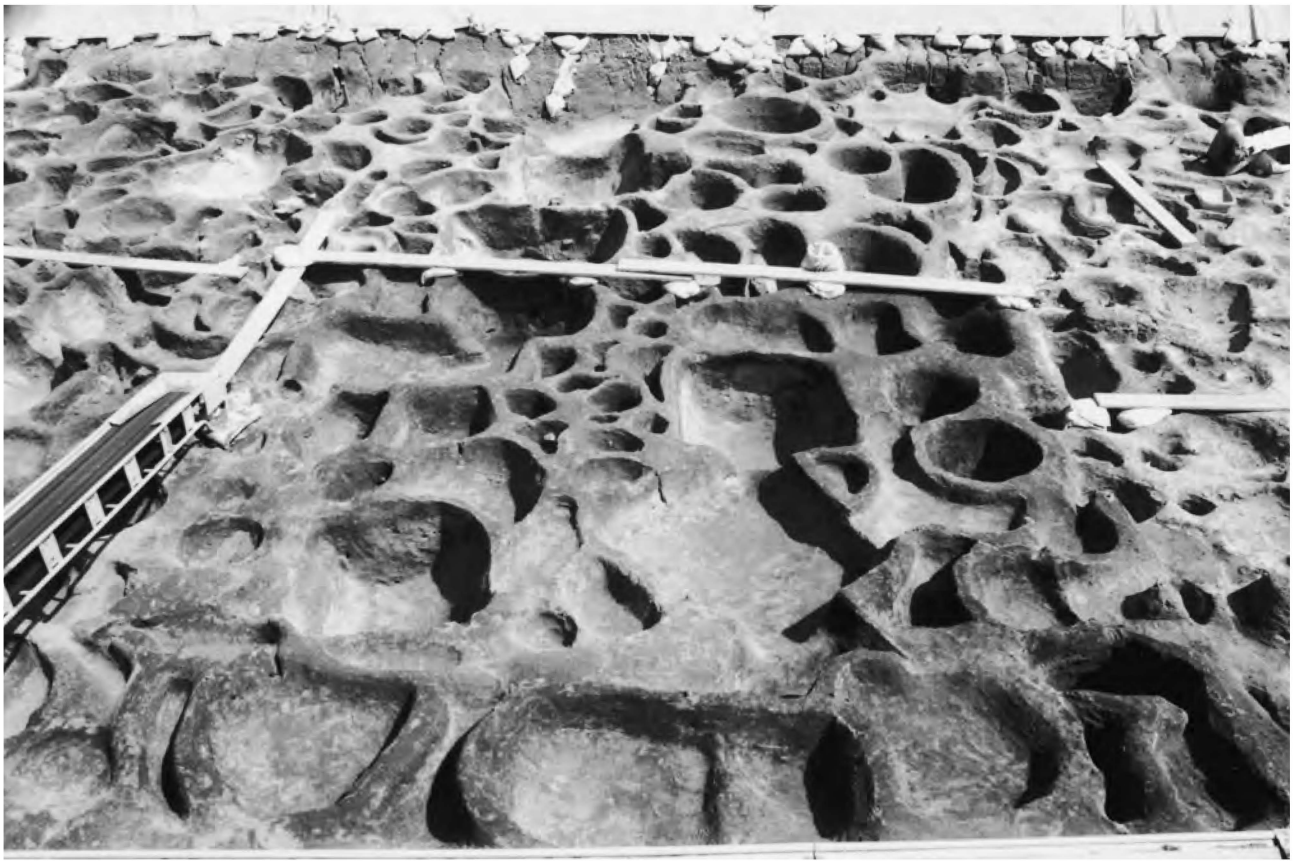


1．Ⅰ区（1面）東半調査状況（空撮）（上が東）



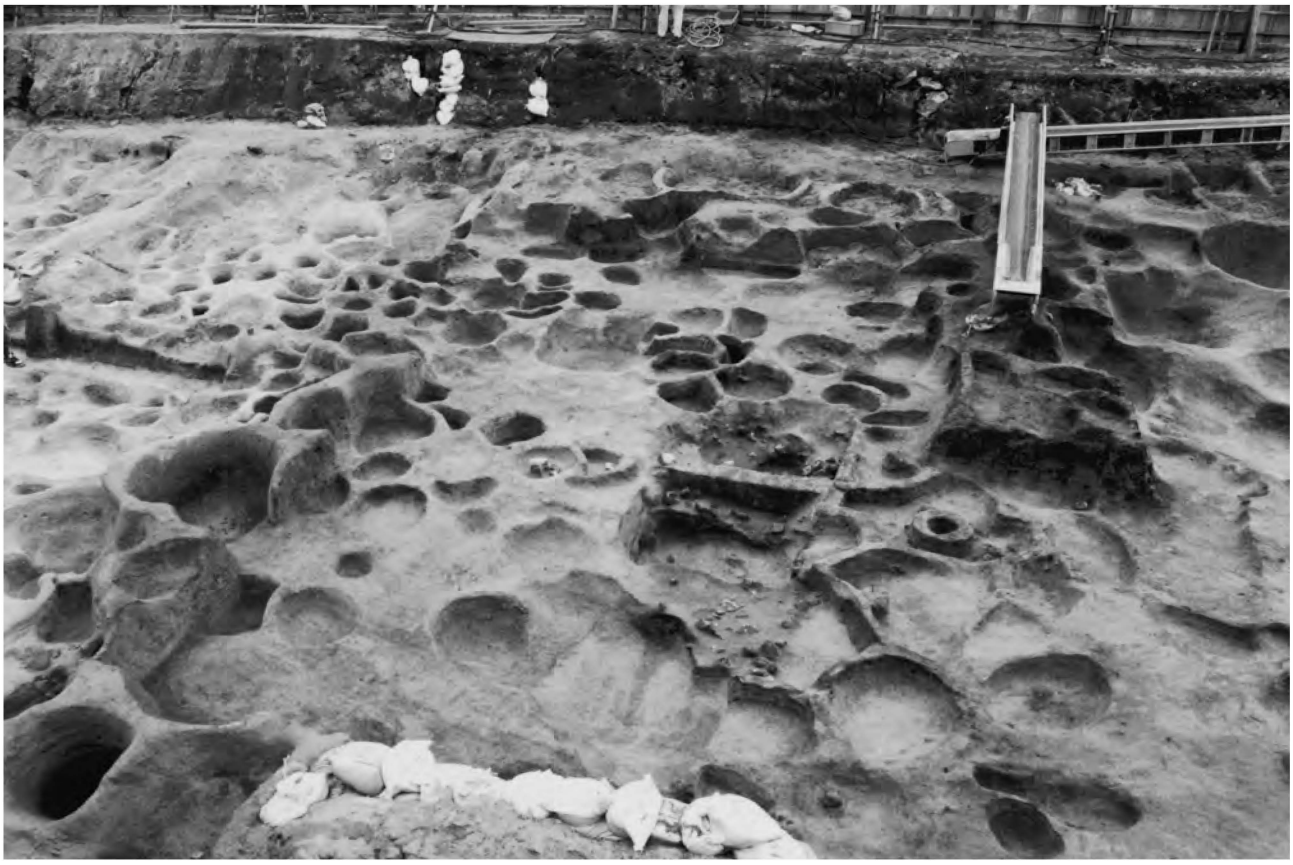
2．Ⅰ区（1面）西半調査状況（空撮）（上が東）

3．Ⅰ区（1面）中央調査状況（Y＝12～20）（北から）



1．Ⅰ区（1面）中央調査状況（Y＝11～18）（南西から）

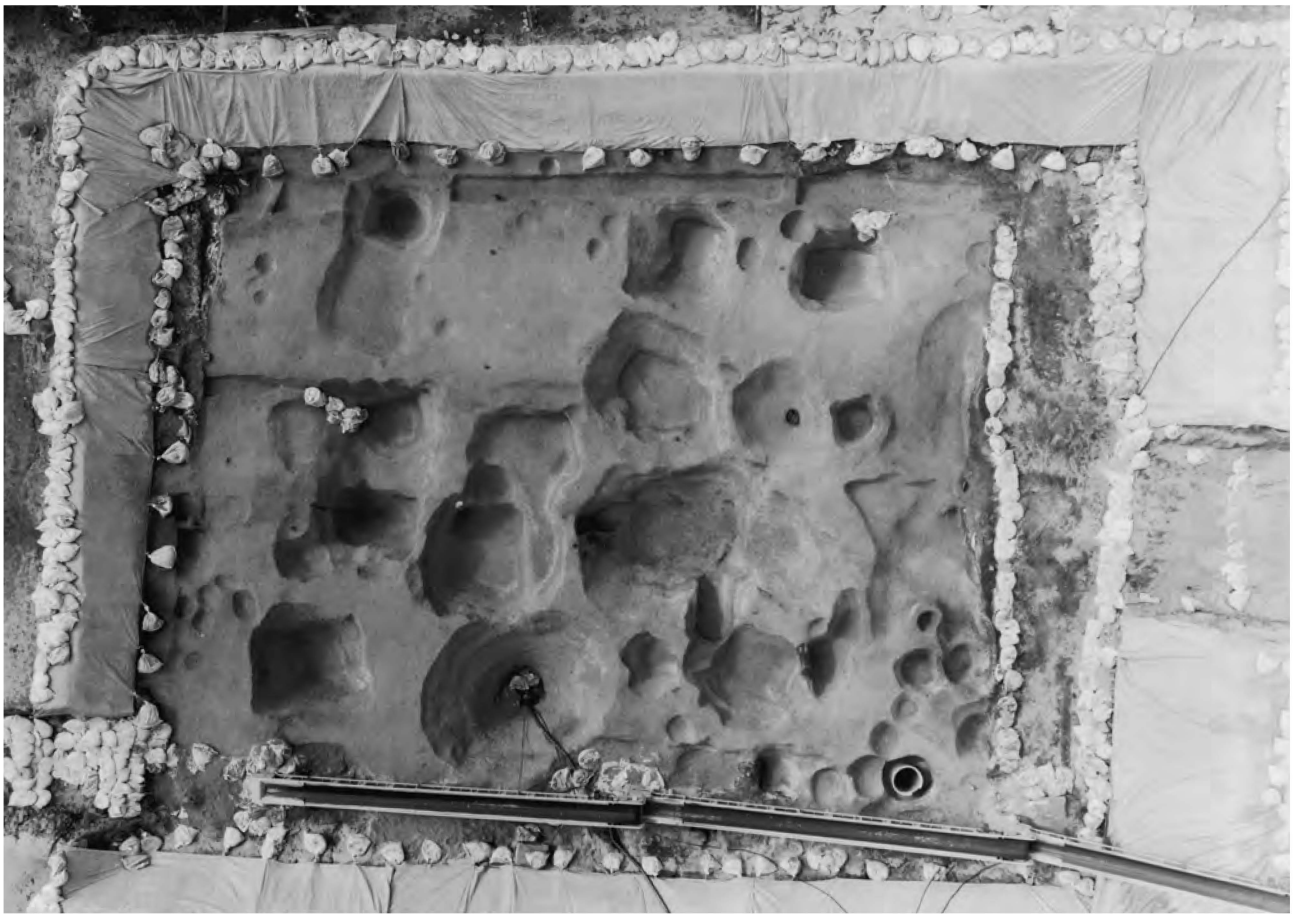
2．Ⅰ区（1面）西部調査状況（Y＝18以西）（南から）



1．Ⅰ区西半２面調査区中央～東側調査状況（北から）

2．Ⅰ区西半２面調査区中央～西側調査状況（北東から）

1．Ⅰ区西半２面調査区中央～西側調査状況（南西から）（左下がSX601）



2．Ⅱ区調査状況全景（空撮）（上が南）

PL. 10

1．Ⅱ区南半調査状況（左の溝はSD802）（南東から）

2．Ⅱ区調査状況全景（西から）

3．Ⅱ区土層D（西から）

4．Ⅱ区土層A（南から）

5．ST001甕棺検出状況（北東から）

7．ST019甕棺墓検出状況（南東から）

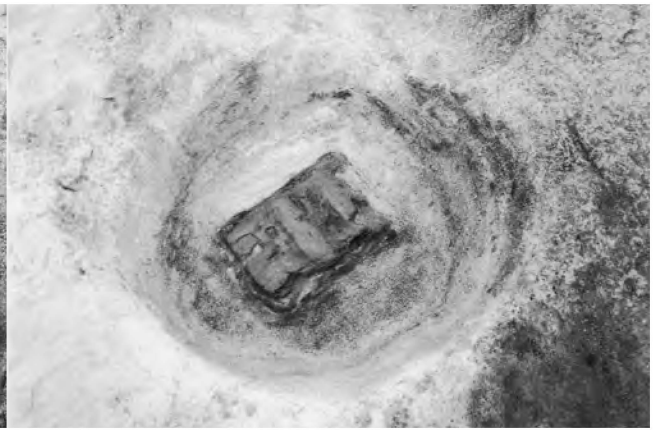
6．ST031甕棺出土状況（南から）

8．ST019甕棺内掘削状況（桶板？検出）（南西から）

1．ST845近世甕棺検出状況（南から）

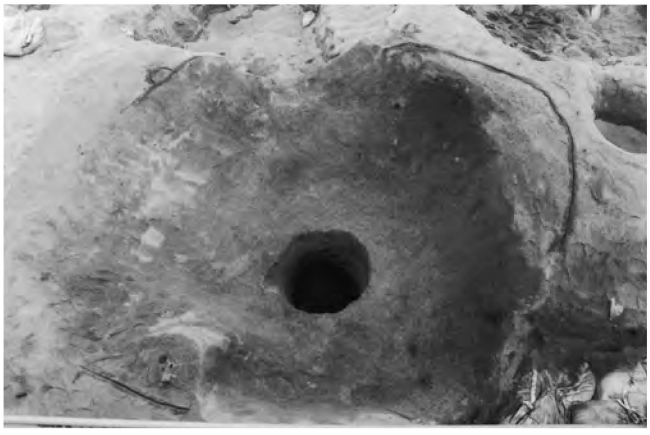
2．SK361近世土壙墓出土状況（西から）

3．SK321近世土壙墓出土状況（南から）



4．SK701近世土壙墓木桶底板出土状況（東から）

5．SK837中世土壙墓出土状況（北西から）



6．SE801井戸側落込み検出状況（北から）

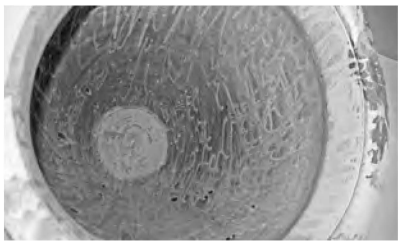
7．落込みSX837完掘状況（北から）

PL. 12

1．ST001近世陶器甕棺（Fig.28）

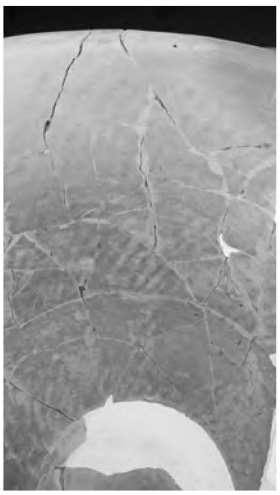
2．ST019近世陶器甕棺（Fig.29）

3．ST019陶器甕棺内面



4．ST845陶器甕棺内面

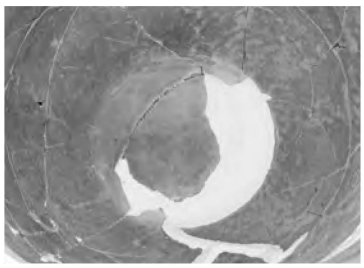
6．ST031近世土師質甕棺（Fig.31）



7．ST031甕棺体部内面

5．ST845近世陶器甕棺（Fig.30）

9．ST031甕棺底部付近外面



8．ST031甕棺底部付近内面

10．SK881出土四耳壺（Fig.36-15）

14．SK362出土近世和鏡X線写真

12．SK334出土肥前系陶器塊
（Fig.51-1）

13．SK281出土肥前系陶器塊
（Fig.51-2）

11．ST006甕棺墓出土高取系壺（Fig32-11）

PL.12 箱崎62次出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	はこざき40　－はこざきいせきだい62じちょうさほうこく－
書名	箱崎40
副書名	－箱崎遺跡第62次調査の報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1093
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667
発行年月日	西暦2010年3月23日

遺跡名ふりがな		はこざきいせきだい62じちょうさ		
遺跡名		箱崎遺跡第62次調査		
所在地ふりがな		ふくおかしひがしくまいだし5ちょうめ31ばんちほかちない		
遺跡所在地		福岡市東区馬出５丁目31番地外地内		
市町村コード		40130		
遺跡番号		2639		
北緯		33度36分50秒（世界測地系）		
東経		130度25分12秒（世界測地系）		
調査期間		2010.7.15～2010.10.15		
調査面積（㎡）		693.24㎡		
調査原因		道路建設		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墓地、集落	平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代	土坑・ピット400以上（中～近世、大部分は近世土壙墓、一部中世土坑・土壙墓あり）、近世甕棺墓30以上、井戸１（中世）、溝状遺構5、落込み遺構	土師器・瓦器・瓦質土器（中～近世）、輸入陶磁器（中世）、国産陶磁器（中～近世）、瓦（中～近世）、銅銭385枚（大部分が近世銭）、銅製品（鏡・臥鉦・鈴・キセル・小仏像ほか）、鉄製品多数（和鋏・毛抜・釘ほか）、ガラス玉、有機質遺物（櫛、棺桶板材、井戸桶板）、人骨、動物遺存体	近現代に続く墓地区画下層の近世墓群（近世後期以降は甕棺墓群、近世前～中期は密集した土壙墓群を形成）、一部の近世土壙墓に多数の副葬品（土師器皿＋銅銭、銅製品、鉄製品）、中世は集落の一部（12世紀以降中世都市の縁辺部）、性格不明の大型落込み遺構（中世の掘り込みか）

箱　崎　40

―箱崎遺跡第62次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集

2010年3月23日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1

印　刷　西福岡印刷所
福岡市西区姪浜６丁目9-27

皆層棚列	桁	段
540	2	3